静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第141集

すやん沢古窯跡

平成14年度　大井川用水(一期)農業水利事業小笠幹線水路大井川水路橋
埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第141集

すやん沢古窯跡

平成14年度　大井川用水(一期)農業水利事業小笠幹線水路大井川水路橋
埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

すやん沢古窯跡の所在する榛原郡金谷町は「遠州七窯」として著名な志戸呂焼が現在も営まれる町である。遺跡は大井川が狭隘な山地より平野部へと流出する地点の右岸丘陵部に立地する。すでに明治時代には遺跡の所在する金谷町横岡周辺において多くの陶器片が採取されていることが報告され、山茶碗を生産した多くの窯の分布が古くから知られている。

今回、大井川用水水路橋の建設に伴ってすやん沢古窯跡の所在する丘陵部分が開発されることとなり、発掘調査が行われることとなった。調査の結果、山茶碗を焼成した鎌倉時代の窯跡が発見され、当初1基のみと思われていた遺構は、2基の窯が時期を違えて縦位に重複するという形で検出されたのである。窯体は天井部が崩落していたものの、双方の窯とも分焔柱、焼台などの施設が良好に残存しており、営窯時における窯構造の一端が明らかとなった。出土した遺物を含めて、これらは今まで不明瞭であった東遠江地域における中世窯業生産の実態に迫ることのできる貴重な資料であるといえよう。さらに今回は、昭和43年の県道拡幅工事によって緊急実施されたすやん沢4～8号窯の調査結果についてもこの報告書に付編として掲載することができた。本報告書で報告するこれらの成果が「やきものの町」である金谷町の歴史をたどる一助となれば幸いである。

発掘調査ならびに資料整理にあたっては、農林水産省関東農政局大井川用水農業水利事業所、静岡県教育委員会、金谷町教育委員会、島田市博物館をはじめとする関係諸機関、地元住民の方々より多くの御理解と御協力をいただいた。また、平野吾郎、河合修の両氏には、玉稿をいただき、付編を飾らせていただいたことを感謝する。さらに、調査全般については多くの方々より御指導、御教示をいただいた。この場を借りて厚くお礼申し上げる。最後に現地調査、資料整理に従事した調査研究員、作業員諸氏にも感謝の意を表したい。

平成15年3月

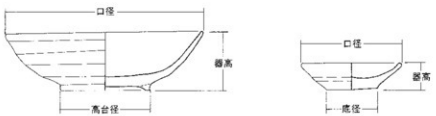
財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
所長　斎藤　忠

例　　言

1．本書は、静岡県榛原郡金谷町横岡大道北837－1に所在するすやん沢古窯跡（9・10号窯）の発掘調査報告書である。
2．調査は大井川用水（一期）農業水利事業小笠幹線大井川水路橋埋蔵文化財発掘調査業務として、関東農政局大井川用水農業水利事業所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
3．現地調査は、平成14年7月から平成14年9月まで実施し、資料整理は平成14年9月から平成15年3月まで実施した。
4．調査体制は以下の通りである。
　所長　斎藤　忠　　副所長　飯田英夫　　常務理事　粂田徳幸　　調査研究部長　山本昇平
　調査研究部次長　栗野克己（総括）　佐野五十三（国・県事業）　　調査研究三課長　篠原修二
　総務課長　本杉昭一　　会計係長　大橋　薫
　調査研究員　溝口彰啓
5．本書は調査研究員　溝口彰啓が執筆した。
6．昭和43年に行われた県道の拡幅工事に伴うすやん沢4～8号窯の発掘調査については付編1として平野吉郎氏（日本考古学協会員）、河合　修氏（静岡県教育委員会文化課）に執筆いただいた。
7．現地調査では考古地磁気測定について、富山大学理学部教授　広岡公夫氏に御指導いただいた。
8．本書に使用した遺物写真図版は、すべて㈱静岡県埋蔵文化財調査研究所職員が撮影した。
9．遺構出土炭化物の樹種同定および放射性炭素年代測定は㈱パレオ・ラボに委託し、分析結果を付編2・3として掲載した。
10．基準点測量及びグリッド杭打設は㈱建設コンサルタントセンターに委託した。遺構測量および空中写真撮影、トレースの一部は㈱フジヤマに委託した。
11．本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。
12．発掘調査に関する資料は、静岡県教育委員会文化課が保管している。

凡　　例

1．今回の調査では国土座標Ⅶ系を基準として測量を実施している。したがって、本書で示される座標値及び方位は全てこれを基準としている。なお、この国土座標は世界測地系（測地成果 2000）を使用した。
2．出土遺物の法量計測については以下のとおりである。



目　　次

序
例言
目次
第1章　調査の概要 …… 1
　第1節　調査に至る経緯 …… 1
　第2節　調査方法と経過 …… 3
第2章　位置と環境 …… 5
　第1節　地理的環境 …… 5
　第2節　歴史的環境 …… 5
第3章　発見された遺構 …… 13
　第1節　概要 …… 13
　第2節　9号窯 …… 13
　第3節　10号窯 …… 18
第4章　出土遺物 …… 25
　第1節　出土遺物 …… 25
　第2節　遺物の出土状況と傾向 …… 29
第5章　まとめ …… 46
　付編1　すやん沢4～8号窯の調査について（平野吾郎・河合　修） …… 51
　付編2　すやん沢9・10号窯出土炭化材の樹種同定（㈱パレオラボ　植田弥生） …… 63
　付編3　すやん沢9・10号窯出土炭化材の放射性炭素年代測定（㈱パレオラボ　山形秀樹） …… 67

挿図目次

第1図　すやん沢古窯跡位置図 …… 2
第2図　すやん沢古窯跡遺構位置図 …… 3
第3図　大井川流路変遷図（浅井1967より） …… 4
第4図　すやん沢古窯跡周辺遺跡分布図 …… 6
第5図　すやん沢古窯跡全体図 …… 9・10
第6図　9号窯窯体実測図 …… 11・12
第7図　9・10号窯窯体内埋土上層断面図 …… 15
第8図　9号窯前庭部遺物出土状況 …… 16
第9図　9号窯焼成室床面遺物出土状況 …… 17
第10図　10号窯窯体実測図 …… 19・20
第11図　10号窯焼成室埋土遺物出土状況 …… 21
第12図　10号窯燃焼室炭化材出土状況 …… 22
第13図　10号窯焼成室床面遺物出土状況 …… 23
第14図　9・10号窯出土遺物法量分布図 …… 27
第15図　9号窯出土遺物実測図(1) …… 31

第16図　9号窯出土遺物実測図(2) …… 32
第17図　9号窯出土遺物実測図(3) …… 33
第18図　9号窯出土遺物実測図(4) …… 34
第19図　9号窯出土遺物実測図(5) …… 35
第20図　10号窯出土遺物実測図(1) …… 36
第21図　10号窯出土遺物実測図(2) …… 37
第22図　10号窯出土遺物実測図(3) …… 38
第23図　10号窯出土遺物実測図(4) …… 39
第24図　9・10号窯出土遺物実測図(陶錘・窯道具類) …… 40

挿表目次

第1表　9・10号窯窯体内埋土土層観察表 …… 14
第2表　9・10号窯出土遺物総数集計表 …… 25
第3表　9・10号窯高台底部圧痕集計表 …… 26
第4表　9・10号窯分類別及び遺構部位別個体数集計表 …… 29
第5表　9・10号窯出土遺物一覧表 …… 41

図版目次

カラー図版1　9・10号窯全景（北東より）
カラー図版2　9号窯分焔柱および焼成室遺物出土状況（北東より）
9号窯左側床面残存状況（北より）
9号窯右側床面残存状況（東より）
9号窯床面残存部断ち割り状況（北東より）
10号窯右側天井部残存状況（東より）

図版1　調査区遠景（南上空より）
9・10号窯全景（西上空より）
図版2　9号窯分焔柱付近遺物出土状況（西より）
9号窯前庭部遺物出土状況（西より）
図版3　9号窯前庭部下層遺物出土状況(南東より)
9号窯全景（東より）
図版4　9・10号窯全景（北東より）
図版5　9号窯焼成室遺物出土状況（北東より）
9号窯焼成室遺物出土状況（南西より）
図版6　10号窯埋土遺物出土状況（南より）
10号窯焼成室埋土遺物出土状況
（北東より）
図版7　10号窯燃焼室炭化材出土状況
（北東より）
10号窯焼成室遺物出土状況（北東より）
図版8　10号窯焼成室遺物出土状況（北東より）
10号窯分焔柱左側遺物出土状況(北東より)
10号窯分焔柱右側遺物出土状況(北東より)
10号窯焼成室遺物出土状況(北東より、近接)
10号窯焼成室遺物出土状況（北東より）
図版9　9号窯出土遺物
図版10　9号窯出土遺物
図版11　9号窯出土遺物
図版12　9・10号窯出土遺物
図版13　10号窯出土遺物
図版14　10号窯出土遺物
図版15　9号窯出土遺物
10号窯出土遺物
図版16　9・10号窯出土焼台
9号窯出土障焔棒

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

すやん沢古窯跡は釜谷古窯跡とも呼ばれ、金谷町横岡地区一帯に広がる金谷古窯跡群（横岡古窯跡群）に含まれる。この古窯跡群の存在は古くから知られており、様々な報告がなされている。以下、すやん沢古窯跡についてふれられた記録を追ってみたい。

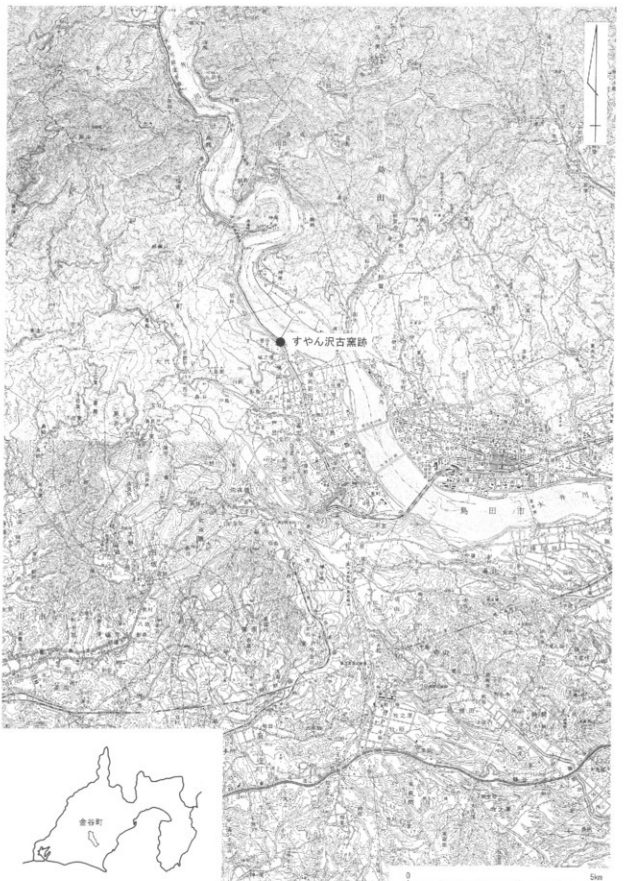
明治19年には細木松之介氏により「大井川ノ堤ヨリ土山ヶ原ヘ上ル所ヲ酢屋澤トテ上器ノ散乱セルヲ見其中二個ヲ拾ヒタルニ原中ニモ数多アリタリ當横岡村ニハ今尚忌戸呂焼トテ陶器ヲ製スル者数戸アリテ土山原ヨリ粘土ヲ取レリコノ原ヨリ奥ニ當リ古土器ノ出ル所アリテ方言之ヲ行基焼ト云フ」と報じられ、すでにこの時期までに酢屋沢（すやん沢）周辺で行基焼と呼ばれる陶器が採集されていることがわかる[1]。下って昭和３年には堀田美櫻男氏により詳細な報告がなされる[2]。一部を抜粋すると、「窯趾は前記の如く鐵道敷設の為、掘割酢屋澤より入りて左傍は長さ三十八米の間に十二個、右傍は四十四米の間に九個の窯址断面を見らる。（中略）この窯中部以下に多数の齋瓷片、生焼のもの、香形のもの、又は吹出しの為数個乃至十個互に附着せるものの包含せらるるを見る。」と大井川鉄道敷設により開削された丘陵の断面に多くの窯が存在することを伝えている。また同報文には足立鍬太郎氏が五和村大代栗島白山神社経塚で出土した齋瓷片が堀田氏の採集品と同一であること、「酢屋澤」が「陶家澤」の転訛であろうということを記している[3]。さらに昭和７年には大場磐雄氏により窯跡の存在が紹介されている[4]。

昭和43年には県道金谷中川根線の拡幅工事に伴い、丘陵部分が削平され、８基の窯が発見された。大井川鉄道よりも西側に存在した１～３号窯については調査されることなく消滅してしまったらしいが、東側に存在する４～８号窯の５基については山村宏氏、平野吾郎氏らによって発掘調査が行われている（第２図参照）。この調査結果は金谷町教育委員会、島田市博物館のご協力により付編１として掲載することができた。この成果は、すやん沢９・10号窯の位置付けを理解する上でも重要な資料である。

このようにすやん沢古窯跡は行基焼、齋瓷とよばれる陶器、すなわち山茶碗[5]を焼成していた窯としてすでに周知されている遺跡であり、少なくとも８基の窯の存在が確認されている。ただし、上記堀田氏の報告が示すように本来はさらに多くの窯が営まれていたと思われる。

今回、大井川にかかる大井川用水水路橋の改築工事に伴って、すやん沢古窯跡が周知されている丘陵の北東向斜面に建設用道路の工事が計画された。道路建設予定地周辺は遺跡範囲内にあたり、窯跡の存在が十分考えられたため、農林水産省関東農政局大井川用水農業水利事業所の依頼を受け、静岡県教育委員会の指導のもと、平成13年12月に金谷町教育委員会により確認調査が実施された。その結果、調査対象地のほぼ中央付近で山茶碗が出土し、炭化物及び焼土の堆積や分焔柱とみられる遺構が確認されたことから、山茶碗窯１基の存在が確定的となった。

この結果を受けて平成14年２月に農林水産省関東農政局大井川用水農業水利事業所、静岡県教育委員会文化課、(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所による協議が持たれ、平成14年７月より発掘調査を実施する運びとなった。



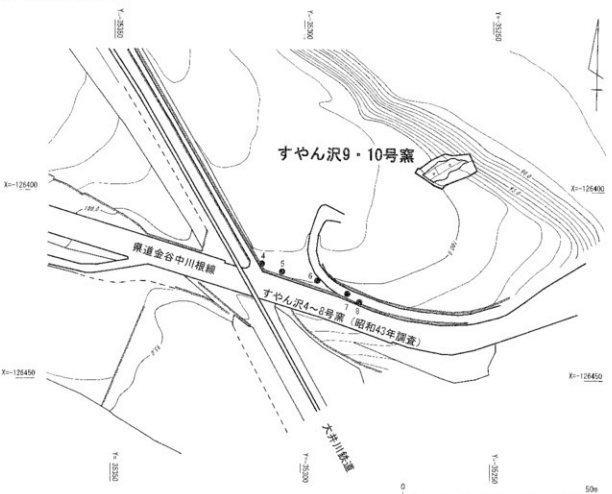
第１図　すやん沢古窯跡位置図

第２節　調査の方法と経過

現地調査

発掘調査は平成14年７月より開始した。まず、金谷町教育委員会によって実施された確認調査の結果から窯体は検出面で５ｍ程度の幅を持ち、主軸は北東方向を向くことが判明したため、その形状に合わせた形で調査区を設定した。調査区北側の斜面については急峻な崖となっており、窯体、灰原もかなり流失していることが考えられた。調査区の多くは茶畑で、北側斜面については竹林となっていた。調査にあたってはこれらを伐採し、重機により表土及び耕作土を除去した後、人力で遺構の検出に努めた。検出面で確認した窯体は埋没と崩落により幅の広い溝状の遺構として把握されたため、主軸を設定してベルトを残し、埋土の状況を記録しながら掘削を進めた。調査が進むと、当初１基と思われていた窯体は２基が重複していることが判明した。上部の堆積土がかなり厚く、これを除去し窯体の壁面、床面の精査を行い、必要に応じて実測及び写真撮影を実施した。

遺構・遺物出土状況の測量については手実測、トータルステーションを併用して1/10または1/20を基本として、一部を㈱フジヤマに委託し作成した。また、遺物の取り上げについては可能な限り出土状況図、出土ポイントを記録しながら番号を付して取り上げたが、それ以外の遺物は遺構部位、層位ごとに取り上げた。記録写真の撮影は６×７版モノクロ、35㎜カラーリバーサル、35㎜カラーネガを基本とし、６×７版カラーリバーサルを適宜使用した。遺構の完掘俯瞰写真はラジコンヘリコプターによる撮影を委託により実施した。



第２図　すやん沢古窯跡遺構位置図

窯体の完掘後は壁面及び床面を断ち割り、改修の有無や窯体の構築状況に関する調査を行った。9月12日には調査区を埋め戻し調査を終了した。

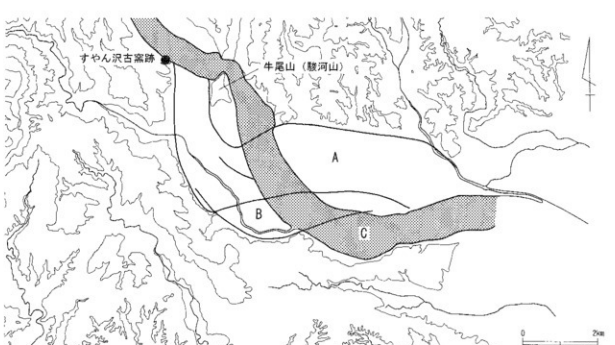
資料整理

資料整理は平成14年9月より実施した。遺物は水洗及び注記の後、接合作業を行った。遺物は器種ごとに分類し、各窯ごとに接合した後、樹脂を使用して復原及び補強した。復原、補強の終了した遺物は完形または全体の形状がわかる個体を抽出し、実測図を作成した。そして6×7版モノクロを中心に写真撮影を実施し、台帳を作成して収納した。

現地で作成した遺構図は編集作業を経て、遺物実測図とともにトレースし、報告書挿図を作成した。これら遺構図や現地で撮影した写真類についても遺物同様、検索可能なように台帳を作成して収納した。

註

(1) 細木松之助　1886「東海道地方ニテ人類學ニ関スル略報」『東京人類學会報告』東京人類學会
(2) 堀田美櫻男　1928「榛原郡五和村釜谷の齋瓷窯址に就て」『静岡縣史蹟名勝天然紀念物調査報告第四集』静岡県
(3) 足立眞太郎　1930「榛原郡五和村大字大代栗島白山神社の経塚」『静岡縣史蹟名勝天然紀念物調査報告第六集』静岡県
(4) 大場磐雄　1932「郷土史研究と特殊遺蹟」『郷土史研究講座　第六號』雄山閣
(5) 「山茶碗」という用語については様々な意見があるが、ここでは学史や周知度を尊重し、碗形態のみを指す狭義の用語としてではなく、併焼される小皿を含めた供膳具を指す広義の用語として使用する。



第3図　大井川流路変遷図（浅井1967より）

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

すやん沢古窯跡の所在する榛原郡金谷町横岡は、白根間ノ岳に源を発した大井川が狭隘な山地から、自らの堆積によって形成した沖積平野である大井川平野へと抜ける地点にあたる。遺跡はＪＲ東海道本線金谷駅の北方約4.7㎞の丘陵北東斜面に位置し、その裾には大井川の堤防が迫っている。この丘陵は赤石山脈の南端、八高山、経塚山、神尾山といった山塊から連なり、南東に向かって伸びているものの一つで、大井川の形成した河岸段丘の末端である。丘陵の南裾から大井川の氾濫原でもあった沖積地が南東に向かって広がっており、ここに現在の金谷町の中心部が存在する。この河岸段丘を開析しているのがすやん沢で、その谷口に位置するのがすやん沢古窯跡である。すやん沢は西側上流部できつね沢、ほろん沢に枝分かれするが、いずれの地点にも山茶碗を焼成した窯跡が確認されている。すやん沢の南にはほぼ並行して川根沢が流れており、両沢に挟まれた段丘上に笠谷の集落が営まれる。

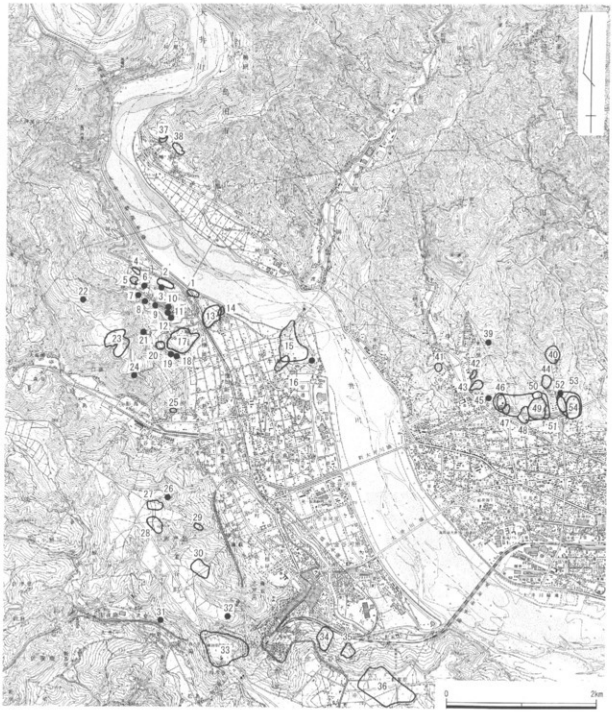
丘陵の基盤は古第三系瀬戸川層群で、部分的に坂部原礫層などの礫層が水平堆積している。瀬戸川層群は砂岩と頁岩を主とした互層からなり、金谷付近から瀬戸川、菟科川、安倍川の上流を経て山梨県の早川流域に至る瀬戸川帯と呼ばれる帯状の分布を示す。この瀬戸川層群に含まれる頁岩に地下水が染み込むことによって粘土化した頁岩由来粘土を陶土として利用していたという意見もある[1]。瀬戸川帯の領域には金谷古窯跡群を含む金谷一帯の窯跡、神座古窯跡、旗指古窯跡、助宗古窯跡など古代から近世にわたる窯跡群が存在しており、陶土を得ることが窯の立地に大きく影響していたことを考え合わせれば十分に首肯できる。

ところで、現在大井川は遺跡の南東にある牛尾山、通称駿河山の東側を流れているが、それは天正年間に駿河を領有した中村一氏の「天正の瀬替え」と呼ばれる開鑿工事によってそれまでの流路が変更されてからのことである[2]。それ以前の流路については浅井治平氏によって考察がなされており[3]、それによれば旧五和村の多くは旧流路にあたっている（第３図参照）。現在宅地や耕地となっている範囲の多くも河原であったに相違なく、横岡新田などの地名は瀬替えの後に開発されて耕地化したことを示すものである。

第２節　歴史的環境

金谷町一帯は古代においては質侶郷に含まれていたと考えられている。質侶郷は平安時代に成立した『和妙類聚抄』にも榛原郡九郷の一つとして記載されており、広大な牧の原台地と交通の要衝たる立地を背景として成立した質侶牧の範疇に含まれる。眼下に駿河との国境である大井川を有し、また『延喜式』に記載された横尾駅家（現掛川市に比定）から初倉駅家（現島田市に比定）を結ぶ主要官道たる東海道筋にあたることが重視されたのであろう。

平安後期になると質侶郷は質侶荘の荘域として把握され[4]、その本荘であったことがその名から知ることができる。質侶荘は質呂郷、湯口郷、大場郷の三つの郷から成り、長元四（1031）年～長暦二（1038）年に遠江守に任命された大江公資が、その在任中に質侶牧の開発を契機に私領化することによって成立したとされる。長暦年間には大江公資が預所職を留保したまま藤原道長六男である権大納言民部卿藤原長家に質呂荘を寄進したことにより、本家職は藤原長家に移る。その後、本家職は藤原信長、藤原俊家、藤原宗俊、藤原宗忠へと、預所職は大江広経、その外孫の文章博士藤原永実へとそれぞれ相伝された。藤原宗忠が本家職にあった天永二（1112）年、一切経の書写料を捻出するために預所藤原永実に銅二万



番号	遺跡名	時期
1	すやん沢古窯跡	平安末～鎌倉
2	釜谷Ⅰ遺跡	縄文
3	土山原古窯跡	江戸
4	きつね沢古窯跡	平安末～鎌倉
5	ほろん沢古窯跡	平安末～鎌倉
6	ほろん沢東古窯跡	江戸
7	北古窯跡	江戸
8	新兵衛古窯跡	江戸～明治
9	中古窯跡	江戸～明治
10	内藤古窯跡	江戸
11	南古窯跡	江戸
12	釜谷西古窯跡	平安後期
13	宮ノ段遺跡	縄文・弥生・中世
14	宮ノ段古墳群	古墳
15	駿河山遺跡	縄文・弥生・古墳
16	駿河山古墳群	古墳
17	志戸呂城(横岡城)	戦国
18	城ノ段B古窯跡	江戸

番号	遺跡名	時期
19	城ノ段A古窯跡	平安末～鎌倉
20	観津寺遺跡	中世
21	川根沢古窯跡	室町
22	三ツ沢古窯跡	室町
23	長者原遺跡	縄文
24	孫工門原古墳	古墳
25	上志戸呂古窯跡	安土桃山
26	弧平古墳	古墳
27	加藤原遺跡	縄文
28	杉ノ沢遺跡	縄文
29	杉沢古墳群	古墳
30	西原遺跡	縄文
31	宗行源塚	中世
32	伊之助原古墳	古墳
33	諏訪原城	戦国
34	大王町遺跡	弥生
35	下坂遺跡	弥生
36	唐沢遺跡	縄文

番号	遺跡名	時期
37	神座A地点古窯跡	安土桃山～近世
38	神座B地点古窯跡	平安末～鎌倉
39	東川根Ⅰ古窯跡	平安末～鎌倉
40	静居寺裏古窯跡	平安末～鎌倉
41	中村地蔵尊前古窯跡	平安・鎌倉
42	東川根Ⅱ古窯跡	平安末～鎌倉
43	東川根Ⅲ古窯跡	平安末～鎌倉
44	静居寺前C地点古窯跡	平安・鎌倉
45	伊太口古窯跡	平安・鎌倉
46	旗指1地点古窯跡	縄文・平安・鎌倉
47	旗指2地点古窯跡	縄文・平安
48	旗指4地点古窯跡	縄文・平安・鎌倉
49	旗指6地点古窯跡	平安・鎌倉
50	静居寺前D地点古窯跡	平安・鎌倉
51	旗指遺跡	縄文・古墳・古代・中世
52	静居寺前A地点古窯跡	平安・鎌倉
53	旗指7地点古窯跡	平安末～鎌倉
54	旗指8地点古窯跡	平安

第４図　すやん沢古窯跡周辺遺跡分布図

五千疋で売却した。このことにより、質呂荘の本家職、預所職は藤原永実に一元化された[56]。

質呂荘両職は永実の子である藤原永範に相伝されたが、天永三（1112）年に大場郷が、永久元（1113）年には湯日郷が相次いで遠江守源基俊に収公される危機に陥った。藤原永範が白河上皇に訴えることで収公措置は撤回されたが、権門の後楯を失った荘園の維持は困難であったことが察せられる。藤原永範は大治三（1128）年に本家職を六勝寺のひとつ、円勝寺に寄進することでその領有の維持を図ることとなる。円勝寺は鳥羽上皇の中宮であり、後白河上皇の母である待賢門院藤原璋子の御願寺である。これにより、質倍荘本家職は実質的に円勝寺を経営する待賢門院庁が執行するところとなり、それは同時に藤原璋子、さらには鳥羽上皇への寄進を意味し、院領荘園としての質倍荘が生まれたのである。質呂荘は寄進に際して改めて立券の手続きがとられ、その領域を示す四至傍示が打たれた。「藤原永範寄進状案」[57]などに記載された四至は東限が「中河」、南限が「坂口中山并真野崎」、西限が「栗栖峯梅津領宇那河等」、北限が「大井河流并鷹駒」である。これらから牧之原を中心として、金谷町一帯、大井川以南の湯日・阪本・大場一帯を含む広大な荘域が復原される。

質倍荘預所職については藤原永範がそのまま留保することとなったが、治承二（1178）年に預所職の生前分与を行っている。すなわち、本荘質倍郷は嫡男藤原光範に、湯日郷は嫡女である少輔入道藤原隆兼室に、大場郷は三女の三郎女子に譲られそれぞれ相伝されていくのである[57]。この内湯日郷については藤原隆兼死後、嫡男有夜叉が相続する筈であったが、承元三（1209）年に本荘預所職藤原光範嫡男の頼範が有夜叉の幼少を理由に湯日郷の自らの領有を主張した。しかし、この訴えを受けた後鳥羽上皇は湯日郷を預所職が絶えたとして収公し、院女房伊与局に給してしまった。有夜叉は長じて東大寺尊勝院主・東大寺別当宗性となり、後に湯日郷の返還訴訟を起こしている。結果的に返還は果たされなかったものの、この時の訴訟に際して作成された文書類が反故となり、所謂紙背文書として伝えられたために質倍荘に関する成立過程や内部構造を窺うことが可能となったのである。

鎌倉時代初期、質倍荘には地頭として武田信義二男の板垣兼信が任命されている。しかし、建久元（1190）年に板垣兼信は隠岐に流罪となり、源頼朝によって解任された。以後地頭を補任されなかったようである。

第Ⅰ節でもふれたように、当遺跡周辺には多くの窯跡が確認されている。大井川を挟んで須恵器及び灰釉陶器を生産した藤枝市助宗古窯跡群が所在し、また島田市旗指古窯跡群（46～49・53・54　番号は第４図に対応。以下同様）では灰釉陶器から山茶碗を生産する大規模な窯跡群が確認されている。特に旗指６地点（49）では多数の窯の発掘調査がなされ、窯構造が明らかにされた。工房とも推定される建物跡なども検出され、当時の窯業生産を考える重要な知見を与えている[58]。金谷町で確認された最も古い窯跡は11世紀後半の操業とされる釜谷西古窯跡（12）である。窯体のほとんどは破壊されていたものの、旗指古窯跡との関連を含めて金谷町周辺の窯業生産の初源として注目される[59]。山茶碗を生産した窯跡はすやん沢古窯跡（１）、きつね沢古窯跡（４）、ほろん沢古窯跡（５）が10基以上の規模を持つと想定される。位置関係については前節のとおりである。すやん沢古窯跡を除けば発掘調査がなされたのは、平成４年の金谷町教育委員会によるきつね沢古窯跡のみであり、詳細については不明確ながらこれらの窯は12世紀前半から14世紀初頭にかけての山茶碗生産が行われていた可能性が高い[60]。

これら山茶碗諸窯は遅くとも14世紀初頭頃には廃絶するとみられる。この地域に再び窯が営まれるのは15世紀中頃から後半にかけて、藤沢良祐氏による古瀬戸編年後Ⅳ期[61]に併行する時期である。該期の窯として昭和63年に三ツ沢古窯跡（22）[62]、平成10年には川根沢古窯跡（21）[63]の発掘調査がなされ、窯構造や出土遺物のあり方から瀬戸美濃地域からの工人の移動を伴う技術移入が指摘されている。これらの窯が大窯段階に継続することは現在のところ確認されておらず、一度断絶するようである。上志戸呂古窯跡（25）は16世紀末から17世紀初頭、藤沢氏編年大窯４段階[64]を中心とした時期に併行するとみられる

窯である。平成元年に灰原の調査[1]、平成12年には２基の窯体調査[2]が行われている。

江戸時代に入ると前節でもふれた釜谷地区を中心に窯業が盛行し、志戸呂焼が著名となるのもこの時期に量産された製品によるものである。第４図に示したように多くの窯が営まれているが、このうち平成４年にほろん沢東古窯（６）が、平成７年には加藤元屋敷古窯跡と土山原古窯跡（３）が釜谷町教育委員会によって灰原調査を受けている。

このように古代から断絶をはさみながらも現在にいたるまで窯業生産が当地周辺で行われた背景は、古代以来の水陸交通の要衝たる立地、陶土を産出する地盤、山林が多く燃料材が豊富であることなど、営窯する上で有利な条件を満たしていたことが大きな要因であろう。

註

(1) 小川隆司　2002 「１．川根沢古窯跡周辺の地質」『川根沢古窯跡発掘調査報告書』金谷町教育委員会

(2) 『掛川誌稿』巻十一による。瀬替えの目的については様々な意見があるが、大塚淑夫氏は『鳥山窟と大井川』(1992 島田市教育委員会)の中で、瀬替えによって芝地化した現島田市街地への宿と街道の整備が目的ではなかったかとの考えを示されている。

(3) 浅井治平　1967 「第２章　大井川の自然　大井川下り」『大井川とその周辺』いずみ山版Ｋ・Ｋ浅井氏の想定する範囲は第３図に示した。現在の流路をＣとし、それ以前のものをＡ、Ｂとしている。時期についてははっきりしないものの、平素はＢ流路を中心に小流路を伴って流れていたと推定している。

(4) 質侶荘については『静岡県史　通史編１　原始古代』(1994 静岡県)の記述に多くを依拠した。なお、質侶荘という呼称は治承二 (1178) 年の藤原永範による質侶荘預所職の分与処分以降のもので、それ以前は質侶牧とされていた。以下、質侶荘として記述を進める。

(5) これらに至る経緯については大治三年の「藤原永範寄進状案」(『静岡県史資料編４　古代1669』) に記載されている。

(6) 前掲　註５

(7) 「藤原永範譲状案」『静岡県史資料編４　古代　1906』
「藤原有夜叉申状土代」『静岡県史資料編５　中世１　559』

(8) 島田市教育委員会　1983『旗指古窯跡』
遠谷昌彦　1989 「旗指古窯跡６地点を中心とする工房の復元」『静岡県の窯業遺跡』静岡県教育委員会

(9) 鈴木良孝　1989 「第Ⅳ章　詳細分布調査報告」『静岡県の窯業遺跡』静岡県教育委員会

(10) 松井一明　1993 「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究』静岡県考古学会
河合　修　2001 「青灰色のうつわ～榛原郡金谷町横岡字釜谷の灰釉系陶器について～」『研究紀要第８号』(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
両氏は主に表面採集資料を元にした編年作業とともに窯の分布にも言及し、発掘調査が進んでいない金谷古窯跡群の窯業生産の実態への見通しを示した。今回の報告にあたってもこれら論文に依拠する部分は多い。

(11) 藤澤良祐　1997 「中世瀬戸窯の動態」『研究紀要　第５輯』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター

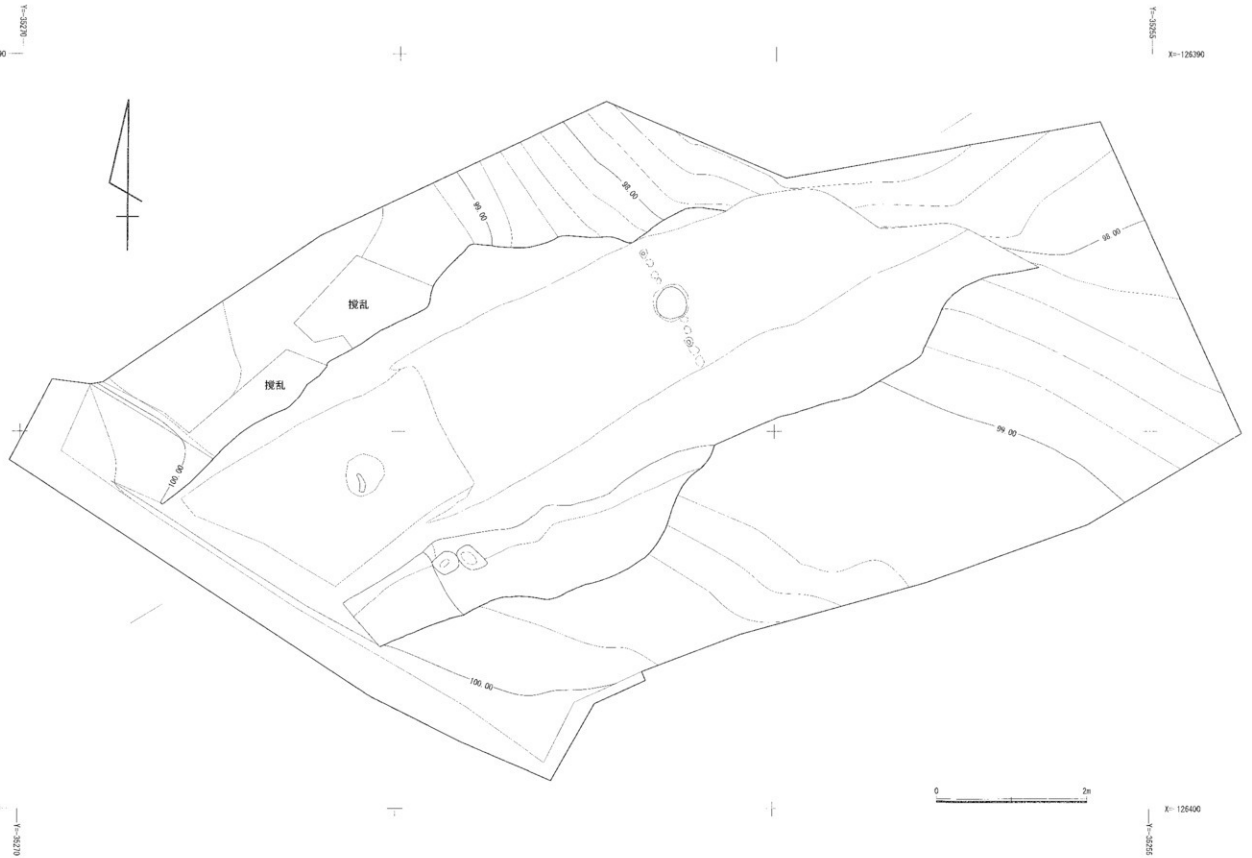
(12) 前掲　註９

(13) 金谷町教育委員会　2002 『静岡県金谷町川根沢古窯跡発掘調査報告』

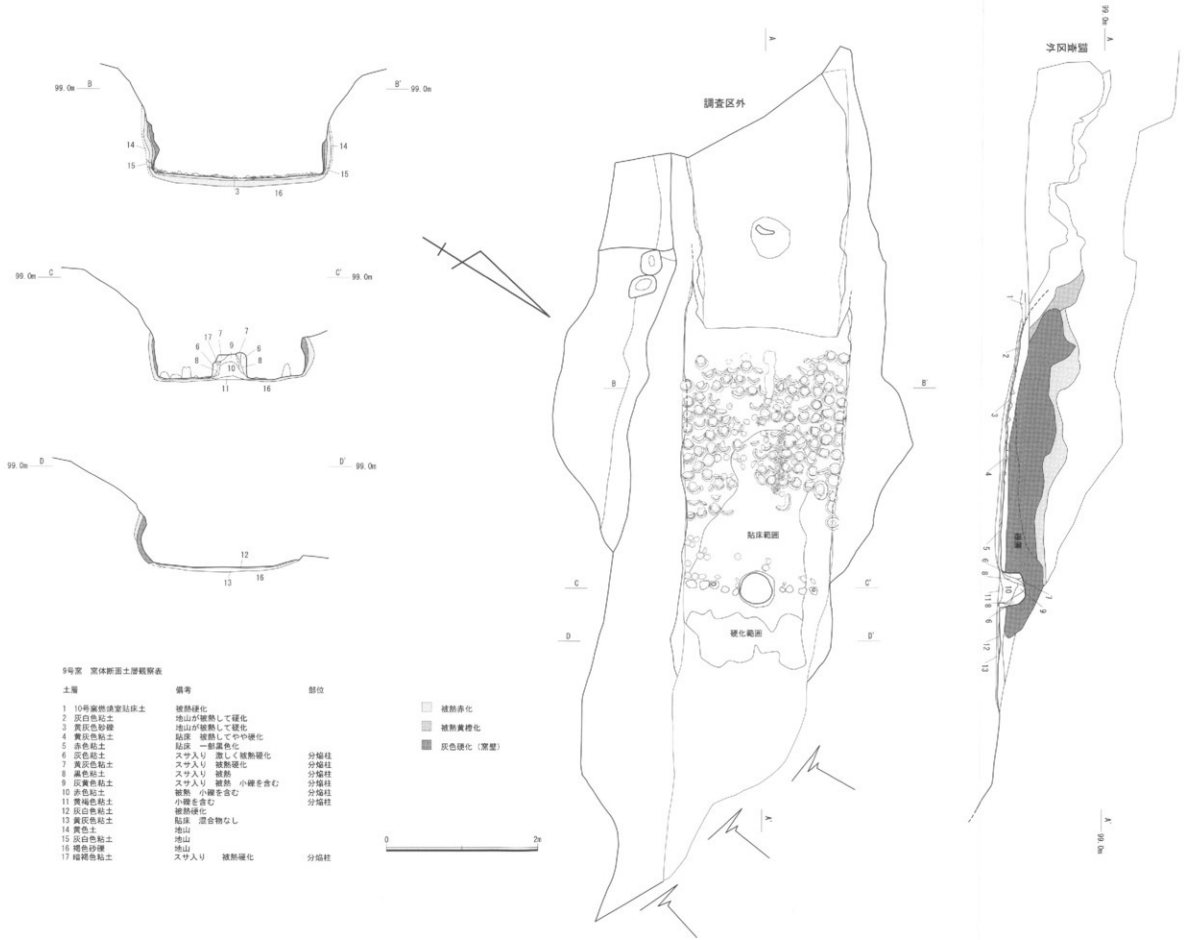
(14) 藤沢良祐　1993 「瀬戸・美濃大窯の編年」『瀬戸市史　陶磁編四』瀬戸市

(15) 金谷町教育委員会　1991 『静岡県金谷町上志戸呂古窯跡発掘調査報告』

(16) (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所により第２東名高速道路建設に伴い調査され、継続中。



第５図　すやん沢古窯跡全体図



9号窯　窯体断面土層観察表

土層	備考	部位
1　10号窯燃焼室貼床土	被熱硬化	
2　灰白色粘土	地山が被熱して硬化	
3　黄灰色粘礫	地山が被熱して硬化	
4　黄灰色粘土	貼床　被熱してやや硬化	
5　赤色粘土	貼床　一部黒色化	
6　灰色粘土	スサ入り　激しく被熱硬化	分焔柱
7　黄灰色粘土	スサ入り　被熱硬化	分焔柱
8　黒色粘土	スサ入り　被熱	分焔柱
9　灰黄色粘土	スサ入り　被熱　小礫を含む	分焔柱
10　赤色粘土	被熱　小礫を含む	分焔柱
11　黄褐色粘土	小礫を含む	分焔柱
12　灰白色粘土	被熱硬化	
13　黄灰色粘土	貼床　混合物なし	
14　黄色土	地山	
15　灰白色粘土	地山	
16　暗色砂礫	地山	
17　暗褐色粘土	スサ入り　被熱硬化	分焔柱

第６図　９号窯窯体実測図

第３章　発見された遺構

第１節　概要

遺構は窯体が２基、縦位に重複する形で検出された。これまですやん沢古窯跡で確認されている窯の基数に続けて、古い段階の窯を９号窯、９号窯を壊して築造されている新しい段階の窯を10号窯と名づけた。窯体は大井川に面した丘陵の北東斜面、標高95～100mほどの地点に築かれ、両窯ともに地山をトンネル状に掘り抜いて築造した窖窯構造を有する。すやん沢古窯跡で確認されている窯の多くは、同じ丘陵にありながら南向きまたは西向きの斜面に分布している。今回の調査に先立つ確認調査でも北東向き斜面では他に窯は発見できなかったため、９・10号窯は少し離れた場所に単独で営まれていたと考えられる。

窯跡の燃焼室側にあたる北東斜面は急峻な崖となっており、本来は灰原が広がっていたと考えられるが、長年の浸食作用によりほとんど流出しているとみられる。また、調査区が水路橋建設用道路幅に沿っており、調査区を横断する窯体のうち10号窯焼成室の大部分は調査区外となる。９号窯についても焼成室から煙道部にかけてが10号窯構築時に破壊されているため、結果的に両窯ともに窯体全てを明らかにすることができなかった。次節以降、各窯・各部位ごと記述するが、燃焼室側を下方、煙道部側を上方、また左側・右側という表現は燃焼室から見た場合とする。

第２節　９号窯

９号窯（第６図）は前節で述べたように焼成室から煙道部にかけて、10号窯構築時に破壊され失われている。残存している窯体の焚口から焼成室までの全長は、主軸全長で4.45mである。主軸方向はW－58°－Sで、天井部については全て崩落し残存していなかったが、燃焼室と焼成室の間に設置された分焔柱や焼成室床面の残された焼台が良好な状態で検出された。窯壁は掘り抜いた地山の面をそのまま利用しており、粘土と礫層の層境が壁面で明瞭に観察できた。また断ち割り調査の結果、壁面・床面ともに一面のみで、修復が行われた痕跡は確認されていない。

窯体内の埋土堆積状況（第７図）を見ると、焼成室は天井の崩落によって床面が覆われ（45層）、その後に10号窯構築時の掘削によって生じた地山の黄色土（41～43層）を、整地するかのように平らに入れていることが観察された。燃焼室付近には燃料材を含む炭化物層（50層）があり、その上に分焔柱方向に向かってやや厚くなりながら赤色土（48・49層）が堆積していた。あまり混じり気のない粒子の細かい土で、焼成時の逐次堆積であろうか。さらにその上部には灰層と見られる黒褐色土（46層）があり、それを先述した整地土とみられる地山由来の黄色土（43層）が覆っている。燃焼室には天井崩落土らしき堆積層がみられないことから、窯出しの際に天井を除去した可能性もある。

焚口・燃焼室・前庭部

貼床された粘質土が被熱によって硬化した部分の下端を焚口と考え、燃焼室は分焔柱から焚口までとしてとらえた。長さは0.82m、幅は分焔柱下方端で1.89m、焚口付近で1.70mである。山茶碗窯の場合、焚口付近で幅を狭める事例が多いが、この窯では幅がほとんど変わらない。また、燃焼室では傾斜はなく、ほぼ平坦である。燃焼室付近の床面は地山が礫層であることから、平坦面を確保することと分焔柱を構築するためであろう、２～３cmほどの薄い貼床がみられる。貼床は焼成室中ほどまで続いている。床面は被熱により硬化していたが、その上には燃料材の小片をふくむ炭化物層が検出されている。側壁は焚口付近まで灰色に被熱硬化していた。

第1表　9・10号窯窯体内埋土土層観察表

番号	層名	備考	遺構
1	灰黄色土	しまりあり　礫若干混じる	10号窯
2	黒褐色土	しまりあり　礫若干混じる	10号窯
2'	褐色土	しまりあり　礫若干混じる	10号窯
3	黒褐色土	黄色土をブロック状に含む	10号窯
4	暗褐色土	礫混じる　炭化物、焼土を少量含む	10号窯
5	暗褐色土	礫混じる	10号窯
6	褐色土	窯壁片、焼土、炭化物を若干含む	10号窯
7	黄褐色土	礫混じる　炭化物、焼土少量含む	10号窯
8	黄褐色土	焼土ブロック多量に含む	10号窯
9	暗黄灰色土	焼土ブロック多量に含む　上層に山茶碗多量	10号窯
10	暗褐色土	焼土ブロック多量に含む	10号窯
11	黄色土	焼土ブロック多量に含む	10号窯
12	黒褐色土	焼土ブロック多量に含む	10号窯
13	黒褐色土	焼土少量含む	10号窯
14	赤色土	黒褐色土若干量含む	10号窯
15	黒褐色土	粒子の大きい焼土を含む	10号窯
16	赤色土	炭化物多量に含む	10号窯
17	黄色粘質土	窯壁の小片を含む　上面被熱硬化	10号窯
18	炭層	燃え残りの燃料材を含む	10号窯
19	赤色土	礫混じる　天井または壁の崩落か	10号窯
20	黄色土	礫混じる　焼土を若干含む	10号窯
21	赤褐色土	焼土ブロック多量に含む	10号窯
22	黄色土	やや粘質　礫混じる	10号窯
23	黄色粘質土	礫混じる　山茶碗を多量に含む	10号窯
24	赤黄色土	礫混じる　山茶碗を多量に含む	10号窯
25	暗黄褐色土	黒暗色土をブロック状に含む	10号窯
26	黄色土	27層崩落後に堆積した　黒褐色土少量含む	10号窯
27	黄色土	崩落した地山土	10号窯
28	黄色土	礫混じる	10号窯

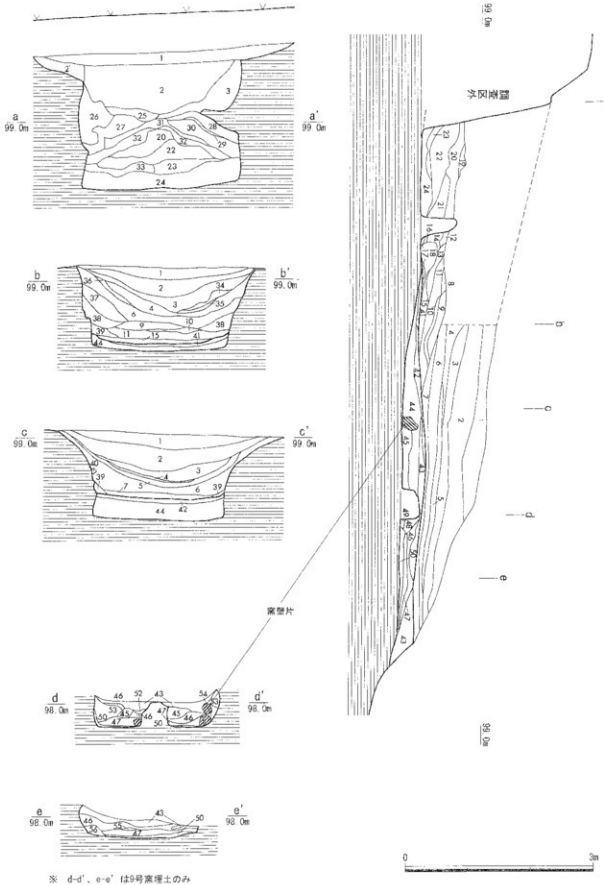
番号	層名	備考	遺構
29	黒色土	黄色土を含む	10号窯
30	暗黄色土	窯壁片を多量に含む	10号窯
31	黒色土	焼土をブロック状に含む	10号窯
32	黄色土	黒色土をブロック状多量、窯壁片を少量含む	10号窯
33	黄色土	崩落した地山土	10号窯
34	黄褐色土	礫混じる	10号窯
35	炭層	焼土をブロック状に含む	10号窯
36	暗褐色土	礫混じる	10号窯
37	黄色土	やや赤化	10号窯
38	黄色土	地山土	10号窯
39	黄色粘質土	焼土をブロック状に含む	10号窯
40	赤色土	焼土ブロック多量に含む	10号窯
41	黄灰色土	整地土　焼土、炭化物を多量に含む　やや粘質	9号窯
42	黄色土	整地土　窯壁の小片少量含む	9号窯
43	黄色土	整地土　上面に炭化物多量、窯壁、礫を多量に含む	9号窯
44	黄色土	礫、焼土、窯壁片を多量に含む	9号窯
45	褐色土	窯壁片を特に多量含む　山茶碗多量に含む	9号窯
46	黒褐色土	炭化物、焼土を多量に含む　山茶碗多量に含む	9号窯
47	橙褐色土	炭化物含む	9号窯
48	赤色土	かなり硬化、窯壁片含む	9号窯
49	赤色土	硬化	9号窯
50	炭層	燃え残りの燃料材の小片含む	9号窯
51	黄色土	整地土	9号窯
52	黄色土	炭化物、焼土を含む	9号窯
53	赤褐色土	黒褐色土ブロック、炭化物、焼土を含む	9号窯
54	黒灰色土	窯壁の小片多量に含む	9号窯
55	暗赤色土		9号窯
56	赤色土	黒褐色土、窯壁の小片を含む	9号窯

本来は焚口から斜面の方向に向かって前庭部および灰原が広がっていたのであろうが、前述のようにそのほとんどは流失している。焚口から前庭部にかけての平坦面が一部残存しており、灰層とみられる堆積層に混じるような形で多量の遺物が出土した（第8図）。選別された遺物が窖窯時に灰を掻き出す際に廃棄されたものと考えられる。比較的大破片の碗が多く、小皿はほとんど出土していない。

分焔柱・通焔孔

分焔柱は天井部に接続する上部は失われていたが、下部は良好に遺存している。分焔柱は基底部の長径が0.48m、短径は0.46m、床面からの残存高は0.36mであった。断ち割りによる断面観察から、分焔柱は粘土によって構築されていたことが判明した。まず、貼床した床面にスサを含まない粘土を盛り上げるようにし、その上にスサ入りの粘土を積みつつ成形していったものと考えられる。表面は全体的に被熱して灰色に硬化していた。

通焔孔の床面幅は右側が0.72m、左側は0.74mである。高さについては天井が崩落しており判然としないが、分焔柱と壁面の彎曲具合から0.6～7m程度であったと思われる。特筆すべきは左右の通焔孔の床には障焔棒[1]（361）が立てられた状態で検出されたことである。障焔棒は粘土によって筒状に成形され、全面的に被熱して灰色に硬化しており、完形に近いものが左右通焔孔に各1本立っていた。左側通焔孔では破損して基底部のみ残存した障焔棒もあり、それらから5本程度が設置されたものと推定できる。左右同じ本数であったとすれば、本来は10本程度が分焔柱の両脇に設置されたと考えられる。障焔棒は固定されていた形跡はなく、可動式であった可能性が高い。障焔棒は通焔孔の床にという窯出しの際には障害となる位置にあるため、壊されてしまうことが多いと思われる。これまで障焔棒が原位置を保って発見された例はほとんどなく[2]、多くは灰原や埋土に含まれた状態で出土している[3]。9号窯でも分焔柱付近の埋土から完形の障焔棒（359・360）が2本出土しており、窯出しの際に除去されたものと思われる。では、その機能は果たしてどういったものであるか。障焔棒がやや隙間を持ちつつも並んで通焔

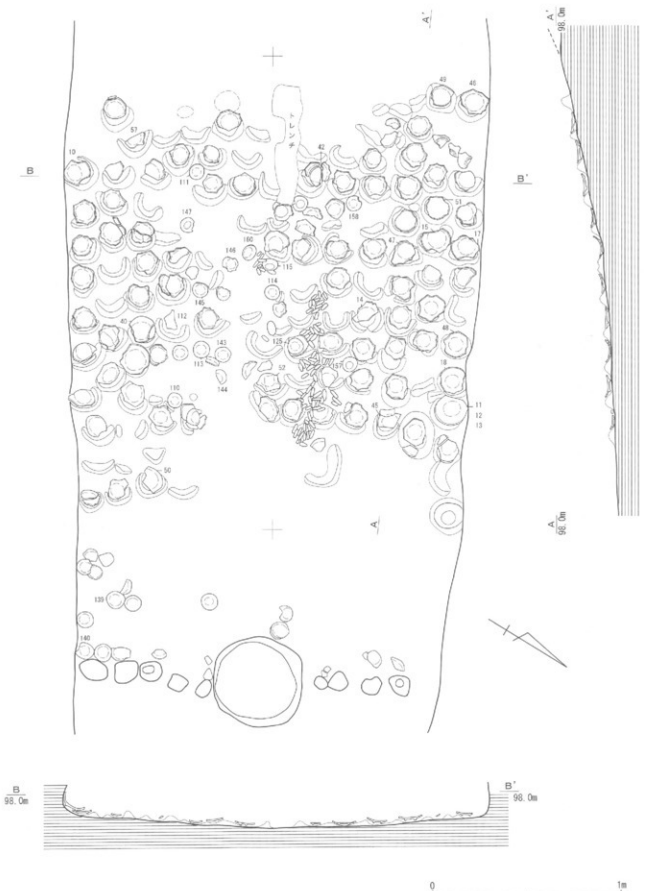


※ d-d'、e-e' は9号窯埋土のみ

第７図　９・10号窯窯体内埋土土層断面図

第８図　９号窯前庭部遺物出土状況

孔に立っている状態は、知多半島の窯で多くみられる間仕切障壁に類似するものと考えられる。間仕切障壁は通焔孔を上下に細くしぼり、燃焼室の火焔をぶつけることで焼成室への火勢を強めて焼成室内の温度の均一化する効果を狙うものとされ、燃焼室の炭や灰が焼成室に入るのを防ぐ効果もあるという[4]。障焔棒も同様の効果を志向していると考えられるが、間仕切障壁の場合はその名のとおり、粘土や製品を固めて壁を作るもので基本的には固定されたものである。障焔棒はその点、可動式であるため窯出しの際には取り外すことも可能で、さらに障焔棒の間には隙間が開いている為、空気の流れを調整することも可能と思われる。分焔柱左側の障焔棒の隙間にあたる部分には生焼けの小皿が２枚程度重ねられた状態で発見され、これがそうした施設の痕跡である可能性もある。障焔棒の設置は窯構造にも関わりがあると考えられ、通焔孔を上下に絞ることで燃焼室の幅を狭めることなく火勢の強化が可能になり、作業の容易さが確保できたのではないだろうか。



第９図　９号窯焼成室床面遺物出土状況

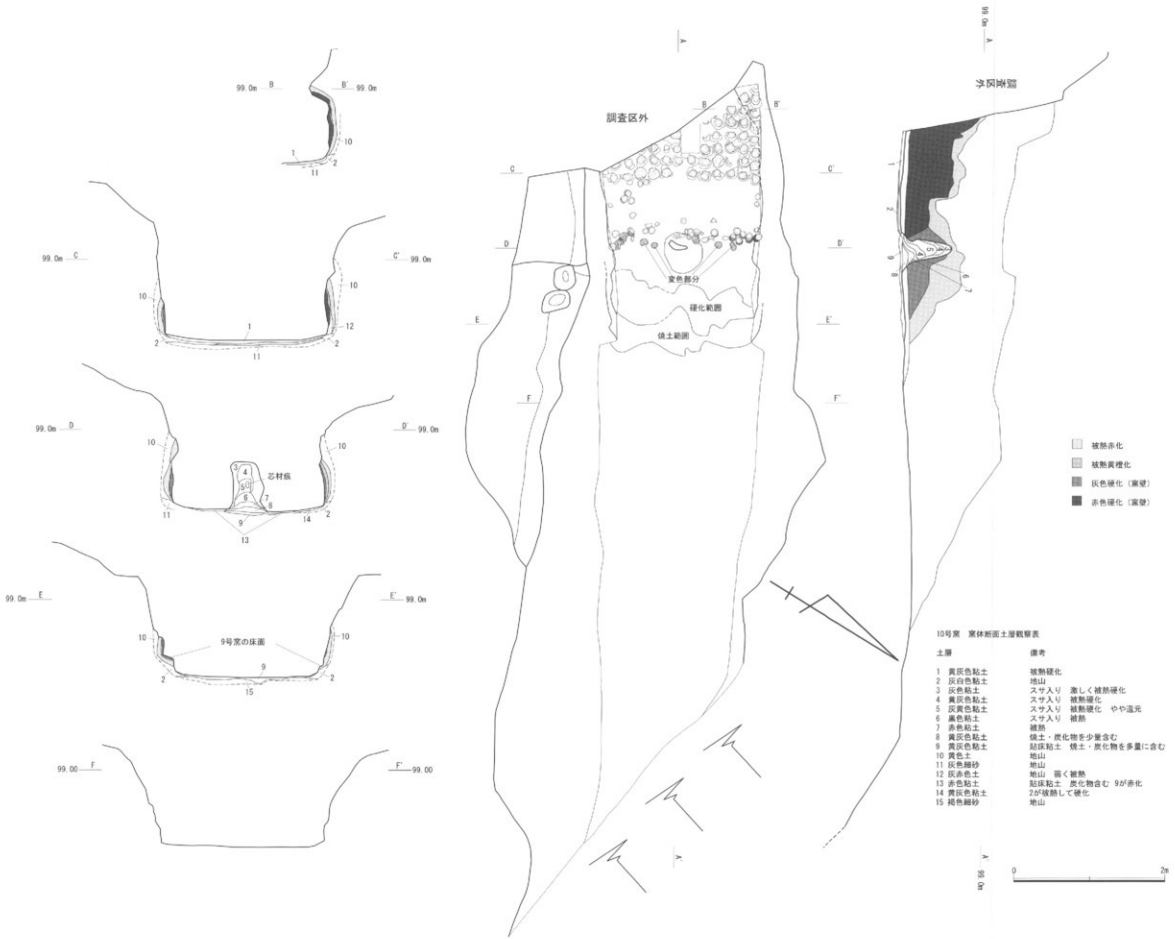
焼成室

焼成室は前述のように10号窯によって煙道へ向かう部分が破壊され、壁面際に残存する床面によって破壊された部分が窺えるのみである。残存している長さは主軸床面で3.45m、最大幅は2.20mである。分焔柱から2.4m付近で最も幅が広くなり、残存した煙道方向の床面をみると焚口に向かって若干狭くなっていくようである。床面の傾斜は分焔柱端から上方1m付近で4°、3m付近で15°、破壊された床面の残る4m付近では45°であった。つまりこの窯の床面は燃焼室から焼成室中ほどまではほぼ平坦であり、煙道に向かって徐々に傾斜を増し、分焔柱より上方3.5m付近から急激に立ち上がって煙道へ向かうという構造を持っていると考えられる。焼成室の床面は燃焼室から伸びる粘質土による貼床が分焔柱より上方1.8m付近まで及んでいる。地山をそのまま床とすることで礫層が露出した状態であるため、凹凸のある部分のみ粘質土の充填を行ったものであろう。貼床面は焼けて若干硬化しているものの、生焼けのような状態であった。床面の礫層は床面傾斜が増しているために分焔柱より上方2.2m付近で粘土層に変わる。粘土層が露出した床面はその残存する部分まで灰色に被熱してかなり硬化していた。壁面は直立気味に立ち上がる傾向があり、アーチ状に天井部につながるとみられる。壁面の高さは最大0.60m程度残存しており、それを考慮すれば天井の高さは0.7～8m程度であったと思われる。

焼成室では原位置を保った焼台が17点検出された（第9図）。分焔柱端より0.5mから3.0m付近までの範囲で残存していたが、本来は床面全体に設置されていたものと思われる。窯出しの際、あるいは10号窯築造時に多くは除去されてしまった可能性が高い。残存する焼台の並びは規則性があるようで、燃焼室側に若干の弧を描くように配置される。燃焼室側は焼台が残存していないが、床面で小皿が多く出土していることから燃焼室側には焼台を伴った小皿が配置されていた可能性が高い[9]。焼台（355・356）は耐火度を高くするためか、砂や小礫が多く含まれた粘土でU字状あるいは馬蹄形に成形されている。その上には碗の高台部分（45・47～52・57）が置かれているものが多数を占める。当初、その碗は重ね焼き最下部が残存しているものと思われたが、割れ口が粘土に食い込んでいる状態のものが多数みられ、2次焼成を受けている形跡も看取されることから、破損した碗を意図的に使用していたと推定できる。つまり、馬蹄形の焼台と破損した碗がひとつの焼台を構成していると考えられる。使用された碗は焼け歪みが顕著で、底部が凹んでしまっているような個体もみられるため、失敗品を再利用している可能性が高い。おそらく、焼台はまずU字状の粘土塊を置き、破損した碗を押し付けて平坦を確認しつつ配置され、その後に重ねられた製品が置かれていったものと推定する。使用されている碗の多くは体部を欠き、高台のみを利用しているものが多数を占めるが、破損はしているものの口縁部まで残存している個体もいくつかみられる（43）。破壊されている煙道側の床面に置かれた焼台の数を知る術がないため、全体にどれほど配置されていたか不明である。

第3節　10号窯

10号窯（第10図）は再三述べているように9号窯を破壊して築造されており、ちょうど9号窯を上方に押し出すように緩位に重複する状態で検出された。焼成室の大半は調査区外となることからその全容は明らかではなかったが、床面は良好に残存しており、分焔柱や焼台が9号窯と同様に検出されている。主軸方位は9号窯とほぼ同様で、検出した燃焼室から焼成室までの最大長は3.32mであった。天井部はほとんど崩落していたが、焼成室の一部で壁面から湾曲する部分が残存してり天井部の高さを推定することが可能であった。窯壁は9号窯同様、掘り抜いた地山の面を利用しており、断ち割り調査の結果から床面・壁面ともに一面のみで修復の痕跡は確認できなかった。壁面は被熱を受けてかなり硬化していたが、燃焼室部分は還元して灰色に、焼成室部分は酸化気味に赤色となっていた。



10号窯　窯体断面土層観察表

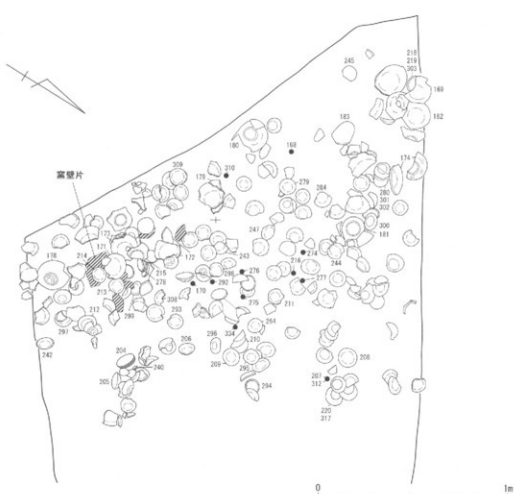
土層	備考	部位
1 黄灰色粘土	被熱硬化	
2 灰白色粘土	地山	
3 灰色粘土	スサ入り　激しく被熱硬化	分焔柱
4 黄灰色粘土	スサ入り　被熱硬化	分焔柱
5 灰黄色粘土	スサ入り　被熱硬化　やや還元	分焔柱
6 黒色粘土	スサ入り　被熱	分焔柱
7 赤色粘土	被熱	分焔柱
8 黄灰色粘土	焼土・炭化物多少量含む	分焔柱
9 黄灰色粘土	貼床粘土　焼土・炭化物を多量に含む	
10 黄色土	地山	
11 灰色細砂	地山	
12 灰赤色土	地山　弱く被熱	
13 赤色粘土	貼床粘土　炭化物含む　9が赤化	
14 黄灰色粘土	2が被熱して硬化	
15 褐色細砂	地山	

第10図　10号窯窯体実測図

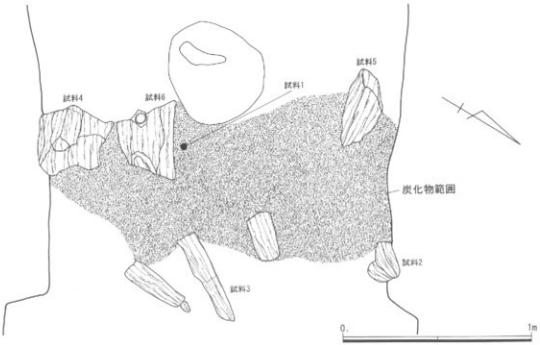
窯内の埋土堆積状況（第７図）をみると、焼成室は窯出し後それほど時を経ずして天井が崩落したため、床面に残る原位置をとどめた焼台が遺存されたものと考えられる。床面は窯壁片と山茶碗を多量に含む赤黄色土（24層）に覆われており、これが天井崩落土と考えられる。ただし、調査区外となる部分が大半を占めるためその詳細な状況は明らかではないが、崩落は全体的なものではなく、部分的な崩落の後、一部に残存する上方からの床面の遺物がその上に流れ込んでいるような様子も窺われた。第11図に示すのは焼成室埋土の赤黄色土（24層）上層での遺物出土状況であるが、これはそうした状況を示すものであろう。そして埋土の流出入と断続的な天井崩落を繰り返しながら、最終的には溝状の落ち込みとなりつつ窯体は埋没したものと考えられる。燃焼室は積極的に崩落土を観察できる堆積はみられず、燃料材を多量に含む炭化物層（18層）の上は流入土で覆われていた。やはり、９号窯と同じく天井部については窯出しの段階で除去された可能性が高い。

燃焼室・焚口

第10図上に「焼土範囲」とした被熱の及ぶ部分の下端を焚口と捉えた。燃焼室の長さは0.82m、幅は分焔柱下方端で1.86m、焚口付近で1.80mである。９号窯と同じくほぼ一定の幅を保ち、傾斜もなく平坦である。床面には２～５cm程度の貼床が認められるが、９号窯のように広範囲に及ぶものではない。床面は地山である砂層に達しており、砂礫に比べ凹凸はないが、水分を避けるために貼ったとも考えられる。床面は中央部が特に激しく灰白色に硬化しており、その上には炭化物層と燃料材が良好な形で残存していた（第12図）。燃料材はかなり太い樹木を薪としたらしく、中には樹齢50年以上とみられる材も



第11図　10号窯焼成室埋土遺物出土状況



第12図　10号窯燃焼室炭化材出土状況

あった。燃料としていた樹木はクリやモミ属などであったことが樹種同定の結果明らかとなっている[6]。焼成の最終段階で投げ込まれた薪が完全に燃え尽きずにこのように残存したのであろう。なお、第12図に記した試料番号は付編２・３で分析された試料と対応する。第10図に示したように窯壁は灰色に硬化し、その外側は天井部断面の名残とみられる部分で赤色化している。いずれも焚口付近で破壊した９号窯の床面傾斜の延長線上に沿って取束している。これは燃焼室天井部の形状を示すものと思われ、９号窯床面の残存部分に合わせるような形で燃焼室を構築している様子が窺える。

分焔柱・通焔孔

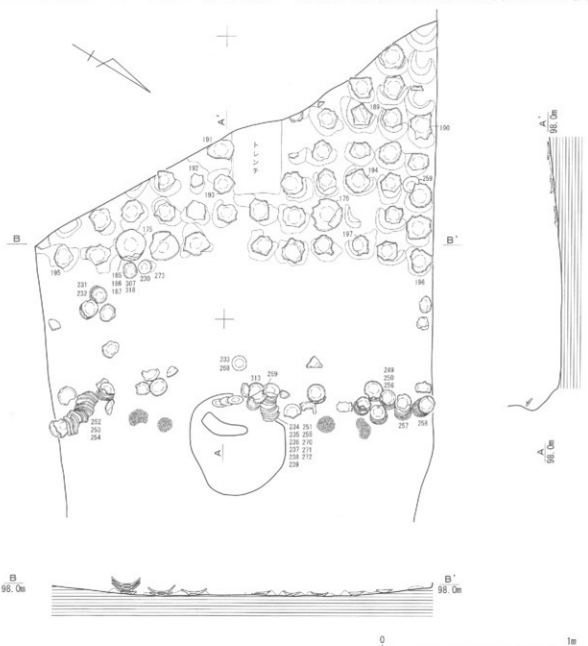
分焔柱は９号窯同様、天井部とともに上部を失ってはいたが下部の遺存状況は良好である。分焔柱は規定部の長径0.55m、短径0.51m、床面からの残存高は0.61mであった。断ち割りによる断面観察から分焔柱はやはり粘土によって構築されていることが明らかとなった。床面に粘土を盛り上げて基部を造り出すところは９号窯と同様であったが、そこに芯材を使用している点で相違する。芯材は遺存していなかったが、直径４cm、長さ60cm程度の先端を尖らせた木材と思われる。芯材は基部の粘土に突き刺すような形で使用されており、それにスサ入りの粘土を貼り付けて成形したものと考えられる。分焔柱は燃焼室側が特に被熱が激しく、灰色に硬化している。しかし焼成室側はそれほどの被熱はなく、若干崩落していた。

通焔孔の床面幅は右側が0.73m、左側は0.69mである。天井の崩落により判然としないが、壁面の湾曲具合から0.7～８m程度であったと推定される。通焔孔の焼成室側には小皿が重ねられた状態で検出された。右側通焔孔では４～13枚程度の小皿が重ねられた状態で横に並べられるように、また左側通焔孔では重ねられた小皿22枚が倒れているような状態で検出された。左側通焔孔遺物は焼成不良品の廃棄とも考えられるが、右側通焔孔の遺物はいずれも原位置を保っていたとみられ、燃焼室に近接し、最も火力が高いはずの位置にありながらほとんどの個体は生焼けであった。これは９号窯同様に障焔棒が設置されていたために炎が直接製品に及ばなかったためと推定する。障焔棒自体は発見できなかったものの、窯構造が９号窯と類似することと、第10・13図に示したように通焔孔の床面には略円形状の変色部がみられ、これが９号窯で障焔棒が置かれていた床面の状況と酷似することがその理由である。また、前節

で障焔棒の隙間では空気の流入の調節が可能であろうと推定したが、このように重ねた小皿を利用していた可能性も考えられよう。

焼成室

調査できたのは一部であり、大半は調査区外となる。調査で確認できたのは焼成室右側壁際で分焔柱上方端から1.94m、左側壁際で0.89mに過ぎない。最大幅は分焔柱端より上方0.6m付近の部分で、2.10mである。おそらくは9号窯のように煙道方向に向かってわずかに狭くなっていくものと思われる。分焔柱端より上方0.65m付近までほぼ平坦で、そこから若干の傾斜がつき、1m付近では5°となる。調査区外の状況は明らかではないが、9号窯と類似した構造を有するとみれば、焼成室上方で急激に立ち上がって煙道部に至ることが推定される。やはり掘り抜いた地山をそのまま床面としているが、掘り込みを粘土層で止めることによって床面の堅牢さと平坦を巧妙に確保しており、露出した床面は被熱によってかなりの硬化が認められた。窯壁は9号窯と同様に直立気味に立ち上がる傾向がある。焼成室右の調査区境には天井部へとアーチ状につながる部分が一部残存しており、0.9m程度の天井高であったと推定



第13図　10号窯焼成室床面遺物出土状況

される。

壁面の一部には掘り込んだ地山を最終的に調整した工具痕が残存していた。右側窯壁が特に顕著で、やや湾曲した刃物、おそらくヤリガンナのような工具によって縦方向に連続して削ったような痕跡が認められた。焼成室は全体的に赤化が著しく、還元炎焼成に必要な酸素の遮断に失敗している可能性がある。右側の窯壁付近が特に顕著で、窯壁に留まらず、焼台や製品にいたるまで赤色化が激しくなっている。左側の窯壁付近は灰色の還元状態となっているため、何らかの原因により焼成状況にムラが生じたのであろう。通焔孔の重ねられた生焼けの小皿は障焔棒によって炎が及ばなかったためと推定したが、こうした焼成ムラも無縁ではなかったと思われる。

床面には原位置を保つ焼台が52点検出された。このうち小皿専用と思われるものが２点含まれる。第13図に出土状況を示したが、小皿230・273・307・318が乗っていた小皿用焼台が燃焼室寄りに存在することから、碗用焼台の並べられる分焔柱端より0.80m付近までは小皿が並んでいた可能性が高い。碗用焼台は９号窯よりも縦横の並びが整然としている感があり、この状況は調査区外へと続いていくものと思われる。焼台は９号窯と類似した構造で、指などによって馬蹄形に粗く成形した粘土（357・358）に碗の高台部分（189～197）を押し付けて製作される。割れ口が粘土に食い込み、２次焼成を受けている個体の存在が認められるなど、９号窯同様の手法を有すると思われるが、焼台の粘土に礫や砂がそれほど混入していないのが相違する点である。また、粘土と碗の高台部分の間には砂が詰まっている例がみられたが、双方が一体となって焼台を構成すると考える以上、焼台の粘土と碗底部との離れ砂とも捉え難く、理由は判然としない。

前庭部

前庭部は前節でも述べたように９号窯が廃絶した後、その焼成室部分に10号窯を築造する際に生じた排土を入れて整地することにより造り出されている。前庭部は均質な地山由来の整地上の上面に炭化物が面的な広がりをみせており、若干の遺物が出土しているが、選別や廃棄によるような多量の遺物は認められなかった。また、灰原らしき痕跡は確認できなかったため、崖状の落ち込み方向へ流失しているものと考えられる。前庭部の面として捉えた炭化物の広がりが残存していた９号窯の壁面まで追えたことから、９号窯の窯幅をそのまま利用していたと理解できる。幅が一定かつ広く、焼成室中ほどまでほぼ平坦な９号窯の窯体構造は、意図的なものかどうかは別として結果的に10号窯の様々な前庭部における営窯活動に寄与している状況が窺える。

註

(1) 「障焔棒」という名称については同様の遺物がすでに多く出土している瀬戸市で用いられた用語を使用した。他にも「障筍」、「分焔棒」等が使用されるが、後述する間仕切障壁的な機能を想定するため、それを的確に表すと思われる用語を使用した。

(2) 島田市アザミ沢１号窯では分焔柱からやや離れた焼成室下方に板状の粘土ブロックを立て並べた施設が検出されている。当窯と同様の効果を指向する施設と考えられ、窯構造の系譜を考える意味でも興味深い。（島田市教育委員会他　1976　『旗指古窯址群－一般国道１号島田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』）

(3) 財瀬戸市埋蔵文化財センター　1995　『水南中窯跡』
財瀬戸市埋蔵文化財センター　1997　『太子Ａ跡』
財瀬戸市埋蔵文化財センター　2001　『広久手18・19・20号窯跡』等
灰層や窯内埋土から同様の形状の遺物が出土し、障焔棒または分焔棒という名称で報告されている。

(4) 杉崎　章　1974　「第１編　歴史」『常滑窯業誌』常滑市役所

(5) 島田市アザミ沢１号窯では分焔柱に近い部分に、床面に広く粘土を貼り小皿を押し付けた構造の焼台を伴って小皿を並べている状況が検出されており、おそらく当窯も同様の配置であったと推定される。（前掲　註２文献）

(6) 付編２参照。

第4章　出土遺物

第1節　出土遺物

すやん沢9・10号窯で出土した遺物は窯跡の焼成品である碗・小皿がそのほとんどを占め、それに少量の鉢類や陶錘が加わる程度である。灰原がほとんど流失しているため、遺物は表採品以外すべて窯内と前庭部からの出土である。また、上記以外の遺物として焼台や障焔棒といった窯道具類の出土もみられた。第2表は各窯における窯道具を除く、破片をも含めた製品の総量を示したものである。個体数に関しては底部の残存率に応じて100%ならば1、50%ならば0.5という具合に10%刻みで数え、それらを足し合わせた数を個体数として算出し、端数は切り上げた。

第2表　9・10号窯出土遺物総数集計表

遺構	遺構部位	層位	碗		小皿		鉢		陶錘
			個体数	破片数	個体数	破片数	破片数	個体数	個体数
9号窯	焼成室	埋土	86	926	138	757			16
		床面直上	100	244	71	437			103
	燃焼室	埋土	4	80	14	90			1
		床面直上							
	前庭部	埋土	52	581	1	6			
		床面直上							
	9号窯小計		242	1831	244	1290			120
10号窯	焼成室	埋土	48	501	380	1464			
		床面直上	53	163	111	764			
	燃焼室	埋土	1	71	1	23	1	1	
		床面直上		2					
	前庭部	埋土	7	78	4	28	3		1
		床面直上	6	48					
	焼成室～前庭部	埋土	10	47	87	276			
	窯内	埋土　上層	25	181	2	8			
	10号窯小計		150	1091	585	2563	4	1	1
その他	表採等		4	54	2	48			1
すやん沢古窯合計			396	2956	831	3901	4	1	122

碗（第15～18・20・21図）

碗は付高台を有する無釉陶器であり、体部内外面はロクロによる回転ナデ調整により丁寧に仕上げられる。ロクロの回転方向は確認できた個体ではすべて右回りである。全体的に平滑で、外面には浅いノタメが現れるが、内面ではほとんど観察できない。大半の口縁は外反せず、体部からそのまま立ち上がり、端部は丸く収められるが、18・23・37・75・198のように端部を若干内傾させる個体も見受けられる。高台は貼り付け高台で、断面が逆二等辺三角形状を呈するものがほとんどであり、26・31・51・169などのように若干外に開き気味の個体もみられるが少数である。大半の碗の高台高は0.3～0.6cm程度とかなり低く、接合部分はナデ調整されるが粗雑な感は否めない。第3表に示すように高台端部は成形後の乾燥時についたとみられるスノコ状圧痕が観察されるものが多数を占める。スノコ状圧痕は製品が生乾きの状態で、平らな細い棒状の板を並べた道具の上で乾燥される際に付くものと考えられる。ごく少数ではあるが、乾燥時に籾殻を使用した痕跡が観察できる個体も存在する。底部高台内には高台貼り付けに伴ってナデ消された部分を除き、回転糸切痕が明瞭に残っている。胎土は緻密で黒色粒子および微細な砂粒を少量含み、表面に鉄分が吹き出しているものも少なからず見受けられ、焼成の良好な製品は灰色または青灰色を呈する。前章10号窯の記述でふれたように焼成状況にムラが生じていることから、10号窯焼成室出土遺物については灰黄色や灰褐色に近い色の個体もみられる。軟質かつ灰白色を呈するものも多くみられるが、これは生焼けであるために製品として流通に耐えられずに廃棄もしくは遺棄された

ものであろう。また、内面全体に多量の自然釉や窯屑が付着したものが多く認められるが、重ね焼きされた最上部の製品が廃棄されたものと思われる。

碗は以上を共通の特徴として有するが、その全体の形状から下記のように二つの類型に分類を試みた。分類対象としたのは全体の形状が把握できる1/2以上残存している個体152点である。焼台として使用されたものは口縁部まで残存している個体のみ分類した。なお、実測個体の分類は第5表に表示した。

A類：法量は口径13.9～16.5cm、器高4.2～5.9cm、高台径5.4～8.0cm。体部下半が張り、体部から口縁にかけて彎曲しているため、あたかも半球状を呈する。40は口径が13.9cm、器高4.2cmと著しく小さい。

B類：法量は口径15.3～16.8cm、器高4.4～5.4cm、高台径6.5～8.1cm。体部下半は張りがやや弱い傾向があり、口縁にかけて直線気味に外へ引き出すように立ち上がる。

A類が分類可能個体中85%を占め、半球状を呈する形状を製品として指向されていたことは明白である。ただしA・B類の形状の差はわずかなものであり、一個体の部位によっても双方の形状を示すものが認められることもあるため、型式認定には曖昧な部分があることも否めない。第14表に示した法量分布図をみるとA類の場合、著しく小さい40を除けば口径は15.5cm付近、器高は5.0cm付近に密集域を持ち、口径はほぼ1cmの範囲、器高は1cm弱の範囲で遷減していく。B類もほぼ同様の傾向であるが、器高のばらつきが少ないように思われる。

第3表　9・10号窯碗高台底部圧痕集計表

遺構 ＼ 圧痕	スノコ痕	籾殻痕	スノコ・籾殻
9号窯	169		1
10号窯	126	7	
合計	295	7	1

小皿（第18・19・21～23図）

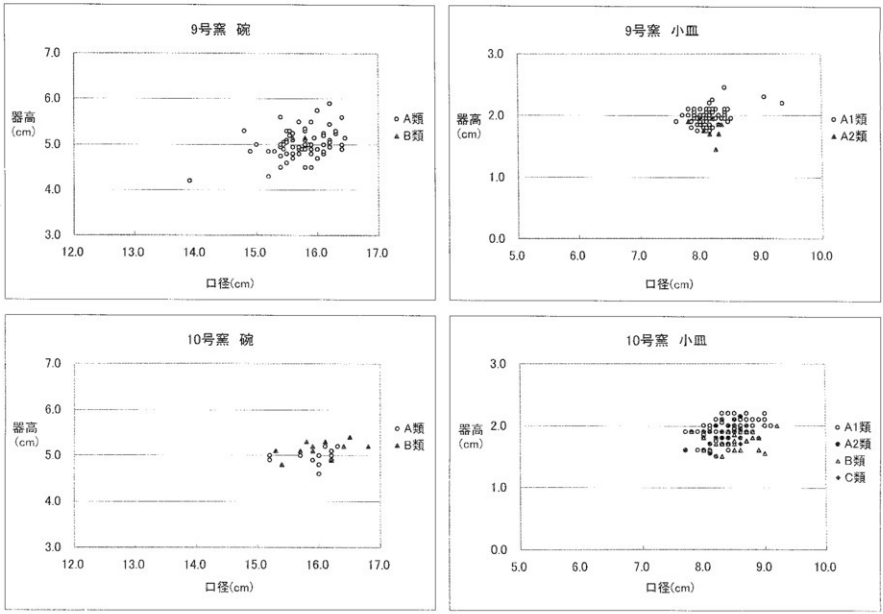
小皿は高台を有さない無釉陶器である。体部内外面はロクロによる回転ナデ調整によって平滑に仕上げられ、ノタメはほとんど観察できず、やはりロクロの回転方向は全て右回りである。口縁端部は丸く収められる。底部は回転糸切り痕が全ての個体で認められ、明瞭な調整はなされていない。底部にスノコ状圧痕が観察できる個体が20点ほどあるが、その他に圧痕は確認できなかったため基本的には成形後の乾燥には特別な道具は使用されなかったと考えられる。胎土や焼成の状況は碗と同様である。

上記特徴を持つ小皿はその形状から四つの類型に分類可能と思われる。分類は1/2以上残存した個体702点について行った。なお、実測個体の分類については第5表に表示した。

A1類：法量は口径7.6～9.4cm、器高1.6～2.5cm、底径3.8～5.8cmである。体部下半から口縁にかけて直線的もしくは内彎気味に立ち上がる。底径にはばらつきが大きいが、糸切りする部位によって大きく変わるもので、特に意識的とは考えられない。しかし、多くの個体は底径が口径に比して小さく、これが基本形態であろうと思われる。

A2類：法量は口径7.7～8.8cm、器高1.5～2.2cm、底径4.1～5.3cmである。基本的な形状はA1類と同様であるが、口縁部外面を強くナデることで外反気味とするものである。第14図でみるようにA1類と比べ口縁が外反する分、器高は低くなる傾向がある。

B類：法量は口径7.8～9.2cm、器高1.5～2.0cm、底径3.9～4.9cmである。底部から口縁にかけて丸く立ち上がるものである。底部が若干突出する個体もあるが、やはり糸切りの部位によるものと思われ、また意図的とみられる様子も窺えないため同一類型として捉えた。A類系と比べ、器



第14図　9・10号窯出土遺物法量分布図

高は低くなる傾向があり、扁平な印象を受けるものが多い。

C類：法量は口径8.0～8.9cm、器高1.7～1.9cm、底径4.8～6.5cmである。つくりはB類に近いが、内面の底部と体部の境に強いナデを施すことによって、あたかも段を作り出しているような形状となる。それによって底径が広くなるのも特徴的である。C類として認定できるのは4点のみであり、極めて少数である。

第14図の法量分布表から、小皿の全体的な傾向として9号窯出土製品はドットがかなり密集しており、数点を除けば口径・器高ともにばらつきの範囲は0.5cm以下にほとんど収まってしまう。一方、10号窯出土製品は口径のばらつきの幅が類型を問わず若干大きいことが読み取れる。A1類は口径8.0cm付近、器高2.0cmに密集域を持つが、10号窯の場合は口径の分布の中心が若干大きくなるようである。A2類・B類は口径の分布はA1類とほとんど変わらないが、器高の分布は上記のようにA1類→A2類→B類となる傾向が看取できる。

陶錘（第24図340～354）

陶錘は122点出土しており、2点を除いてすべて9号窯から出土したもので、長さ3.3～5.9cm、最大径1.2～2.0cm、重さ6.0～17.0gの管状陶錘である。両端はややすぼまり、中央部に最大径を持つ。おそらく、棒状の芯に粘土を巻き付けて成形したものと考えられ、その際の指頭痕が観察できる個体もある。また1点ではあるがスノコ状圧痕が表面についた個体も確認した。製品の多くはやや焼成不良であり、軟質で灰白色を呈する。陶錘は9号窯焼成室の床面に散乱するかのようにして出土しているものが大半を占める（第9図）。焼台の上にまで及んでいる遺物の様子から、焼成時にこの位置の置かれたものではなく、窯出しの際に何らかの理由で散乱してしまい、遺棄されたものと考えられる。白然釉や窯屑の付着が認められないため、本来は碗の中に入れて蓋をされるなどして焼成されたとも考えられる。340・354のような大型品、343・351のような小型品、それ以外の中型品と法量的には大きく3つに分けることが可能と思われるが、極端な差はなく、その形態・法量からこれらは近隣の河川などでの漁労を目的とした網錘と推定される。

窯道具類（第24図）

出土した窯道具類は焼台（355～358）、障焔棒（359～361）である。まず焼台であるが、前章でも述べたように9・10号窯では焼成するにあたり焼台を使用しており、焼台は馬蹄状に成形した粘土の上に破損した碗の底部を設置する構造を持っている。ここで示すのは馬蹄状の粘土による焼台である。使用される粘土には砂粒や小礫を多く含み、指頭によって調整される。碗を押さえつけた跡が明瞭に残るため、まだ柔らかいうちに設置されたものであろう。断面は三角形に近い形状を示すものが多く、床に接する部分は平らとなる。9号窯焼成室出土の355・356は灰白色を呈し、生焼け気味である。357・358は10号窯焼成室床面に設置されたもので、前章でふれたように焼成ムラにより酸化気味となっている部位に設置されたため暗灰黄色を呈するが、焼成状態はよく、9号窯出土品よりも硬質である。

障焔棒はいずれも9号窯から出土したものである。高さ18.2～19.0cm、最大径11.3～12.8cmで、焼台と類似した粘土を使用して筒状に成形され、床面と接する底部は平らとなる。通焔孔の焼成室寄りという最も高温となる位置に置かれるため、全体的にかなりの被熱が認められ、灰色に硬化している。火表・火裏の区別がつかないため、面を変えて数回使用した可能性もある。床との設置面となる底部は直接的な被熱はなく、黄灰色を呈する。障焔棒は分焔柱の脇に立てられ、炎を制御する機能を持つ可能性が高いことは前章でも述べた。361は9号窯右側通焔孔で原位置を保ち、立った状態で出土したものである。359・360は焼成室分焔柱周辺埋土から出土しており、窯出しの際に取り外されたものであろう。

第２節　遺物の出土状況と傾向

ここでは各窯における遺物の出土状況とその傾向を第２・４表に基づき、前節で試みた碗皿の分類を踏まえながら記述したい。まず、第２表に示した各器種の全総量について個体数単位でふれてみたい。９・10号窯で焼成された製品は碗396個体、小皿831個体、鉢１個体、陶錘122個体である。碗・小皿が全体の90％を占め、この窯がほぼ碗皿の専用窯であったことがわかる。碗・小皿の数量比は１：2.11で小皿が倍以上を占める結果となる。しかし、焼成室における焼台の配置などの出土状況を見る限りこれが焼成状況に直結するとは考えられない。今回の調査はほぼ窯内のみという限定されたものであったため、遺存状況に偏りが生じていると考えられ、灰原を含めた調査を実施すれば異なる結果を得られるであろう。また表には記していないが、重ね焼の最上部に位置したとみられる内面全体に自然釉及び窯屑の付着が認められる個体は碗が５個体、小皿が15個体であった。外面にそれらが付着し、蓋に転用されたとみられる個体は確認できていない。以下各窯の出土遺物の様相について、総数に関わる数量は第２表に、分類に関わる数量は第４表に基づいて主要器種である碗・小皿を中心に見ていきたい。

第４表　９・10号窯分類別及び遺構部位別個体数集計表

遺構	遺構部位	層位	碗					小皿					
			A類	B類	焼台	合計	計	A１類	A２類	B類	C類	合計	計
９号窯	焼成室	埋土	45	2		47	131	132	8			140	176
		床面直上	14(9)	1(1)	69	84		32	4			36	
	燃焼室	埋土	3			3	3	7	1			8	8
		床面直上				0						0	
	前庭部	埋土	45	2	1	48	48			1		1	1
		床面直上				0						0	
	９号窯　合計		97	4	70		182	171	13	1	0		185
10号窯	焼成室	埋土	16	13		29	80	192	63	85	2	342	440
		床面直上	5	4	42	51		77	8	11	2	98	
	燃焼室	埋土	4	1		5	5	10	6	3		19	19
		床面直上				0						0	
	前庭部	埋土	1			1	4	1		2		3	3
		床面直上	2	1		3						0	
	焼成室～前庭部	埋土	2			2	2	41	7	4		52	52
	窯内	埋土上層	2			2	2	2	1			3	3
	10号窯　合計		32	19	42		93	323	85	105	4		517
	総計		129	23	112		275	494	98	106	4		702

※(　)内の数字は焼台

９号窯

出土した碗・小皿の数量比は49.8％：50.2％でほぼ１：１の割合である。碗の内訳はＡ類が96.1％を占め、Ｂ類は3.9％に過ぎず、圧倒的に体部が内彎する半球形状の製品が多い。小皿の分類別内訳はＡ１類が92.5％、Ａ２類が7.0％、Ｂ類が0.5％で、Ｃ類は全く出土していない。当窯においては体部が直線的なＡ１類が、製品として指向する小皿の形状であったと考えられる。

遺構部位別にみると焼成室での碗・小皿の比率は１：1.23、床面直上出土の遺物に限れば１：0.71である。埋土からの出土遺物しか確認できなかったが、燃焼室では総数として１：2.33、前庭部では１：0.01である。窯内では小皿の出土比率が高いのに対し、前庭部では碗の比率が極端に高くなることがわかり、また焼成室においては埋土中から出土する遺物の比率は小皿のほうが多い傾向が読み取れる。前述のように遺物の遺存状況に偏りがみられることが数字の上からも明らかである。

10号窯

出土した碗・小皿の数量比は20.4％：79.6％で１：3.9の割合である。碗の分類別内訳はＡ類が62.7％とＢ類の37.3％を凌ぐ結果となるが、９号窯のように圧倒的なものではない。小皿の場合、Ａ１類が62.4％、Ａ２類が16.4％、Ｂ類が20.3％、Ｃ類が0.8％である。Ａ１類が多数を占めるのは９号窯と同様であるが、突出しているわけではなく、多寡はあるものの各型式が一定量出土しており、多様な出土傾

向が認められる。

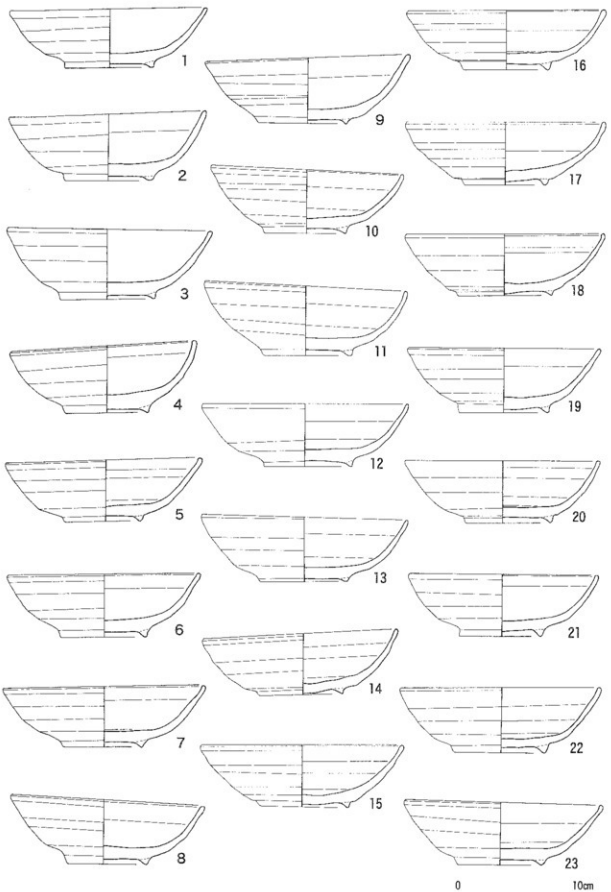
遺構部位による出土状況をみていくが、窯内堆積上上層である1～6層にあたる（第6図参照）「焼成室～前庭部埋土」、「窯内埋土上層」の項目については遺構部位を明確にし得ないため除外する。焼成室での碗・皿の比率は1：4.66、床面直上遺物に限ると1：2.09である。燃焼室では1：1、前庭部では1：0.30である。燃焼室と前庭部での遺物数が少ないため、不確定要素は強いが、9号窯と同様に窯内では小皿の比率が高い。また、比較の対象は焼成室に限定されるが、埋土から出土する小皿の比率が高いことも指摘でき、その比率を比較すれば9号窯よりも顕著に現れている。

以上のように各窯における遺物の出土状況を概観したが、共通するのは窯内では小皿の出土比率が高いことである。これは小皿が窯内、それも焼成室に遺棄されることが多く、碗は焼成室に遺棄されずに選別された製品は前庭部から灰原に廃棄されたことによって生じている現象と考えられる。9号窯よりも10号窯でその傾向は顕著であることは前述した。9号窯は窯が埋没した後、ほとんど間をおかずに10号窯の前庭部として利用されたため、10号窯のように廃絶後放置され、埋没した訳ではない。しかも焼成室上方は10号窯によって破壊されているため、本来遺存していた製品も除去された可能性が高い。よってこのように出土比率には差が生じているとも考えられ、10号窯構築に伴っていわば密封された状態である9号窯出土遺物は、より一括性が高いことが指摘できる。

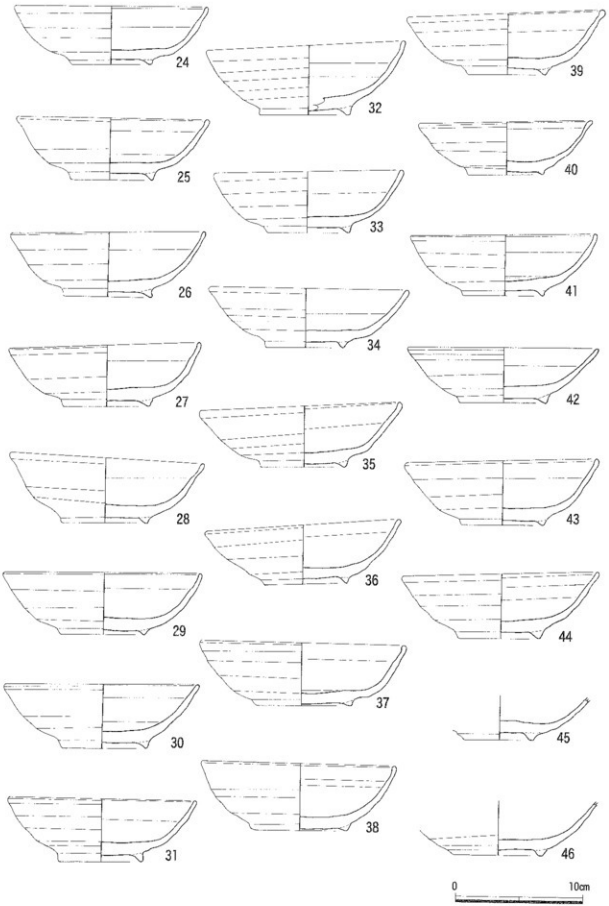
また、小皿は製品として十分流通可能な完形の個体が数多く出土しており、小皿が残存しやすいことを差し引いても、破損品の多い碗と比較するとその比率は高い。全体として小皿の出土比率が高いことも考え合わせれば、碗と小皿の選別も一様に行われたのではなく、そこには何らかの意思が働いていた可能性も考えられ、そこに需要と供給による選別が行われた結果をみるのは穿ちすぎであろうか。つまり、供給過多となる製品（当窯の場合は小皿）が、供給側である生産地において製品そのものの良・不良に関わらずに選別され、一部は窯出しもされずに遺棄されたとは考えられないだろうか。窯出しの最中に崩落したような形跡もなく、また築窯から焼成に至るまでの膨大な労働力を考えれば意味もなく流通可能な製品を遺棄するとは考えられないのである。いずれにしても、今回のように限定された調査区の中で推定していることであって、灰原を含めた調査を行った場合、異なる結果が生じる可能性もある。また、現在当地域において発掘された窯の数そのものが少ないこともあり、今後窯跡の発掘調査が進んでいく中でこうした数量的な分析を行うことにより生産地における状況も明らかになると思われる。

ここで、付編1で述べられているすやん沢4～8号窯との関連にもふれておく。4～8号窯の出土遺物を概観すると、形態的には9・10号窯でみられる碗・皿と類似しており、碗については当窯でいうA類、小皿についてはA1類が大半を占める。付編1で示されたように、5～7号窯は4・8号窯に先行する可能性が高く、9・10号窯出土の製品はその形態・法量を比較した場合、4・8号窯の製品と同時期という捉え方が可能と思われる。

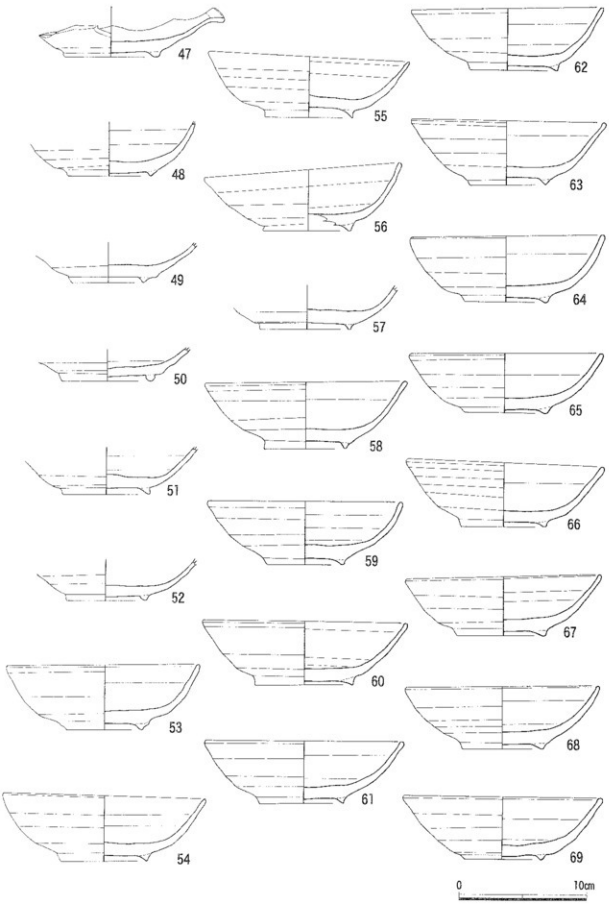
第1章でも述べたが、堀田美樓男氏によって昭和3年に報告されたすやん沢古窯跡の状況をみると（第2図参照）、大井川鉄道によって開削された丘陵斜面に計21基の窯が見えていたことが記されている。4～8号窯は堀田氏のいう斜面から続く南向きの斜面で発見されており、古い様相を持つ5～7号窯の存在を合わせて考えると、すやん沢古窯の中心は本来南から西側の丘陵斜面地で展開していたと推定される。一方、9・10号窯の立地する北東向き斜面では確認調査の結果からも単独で営まれていたことが判明しており、生産量の増加によって窯を集中して築くことが不可能となった結果、やや離れた場所に築窯された可能性もあろう。しかし、南向き斜面のように展開することなく、2基を重複して構築しているような状況から、北東向き斜面は営窯に適した環境ではなかったのかもしれない。



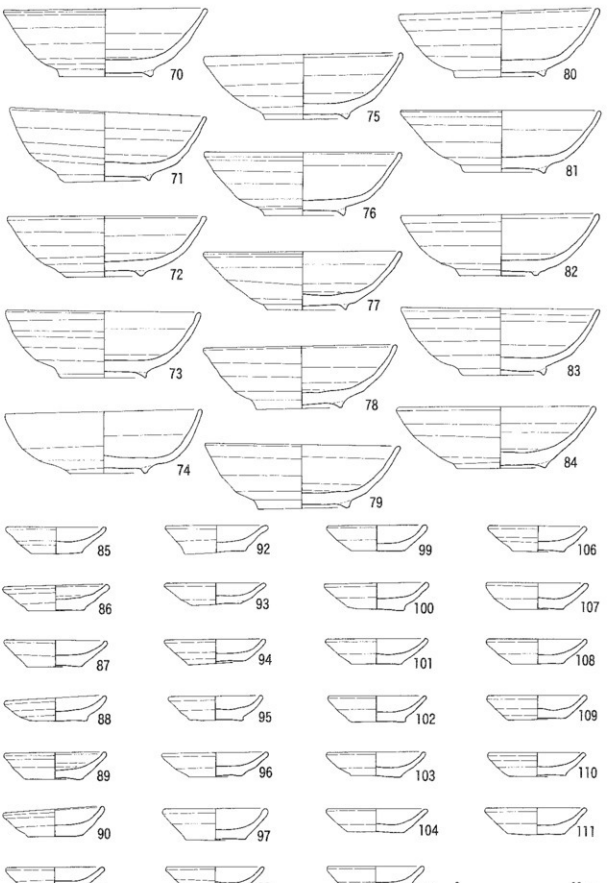
第15図　９号窯出土遺物実測図(1)



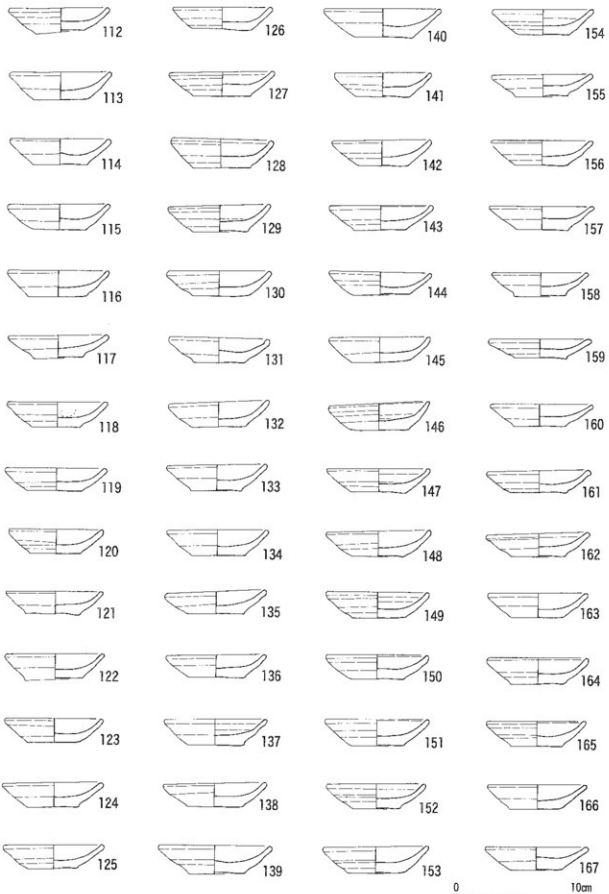
第16図　９号窯出土遺物実測図(2)



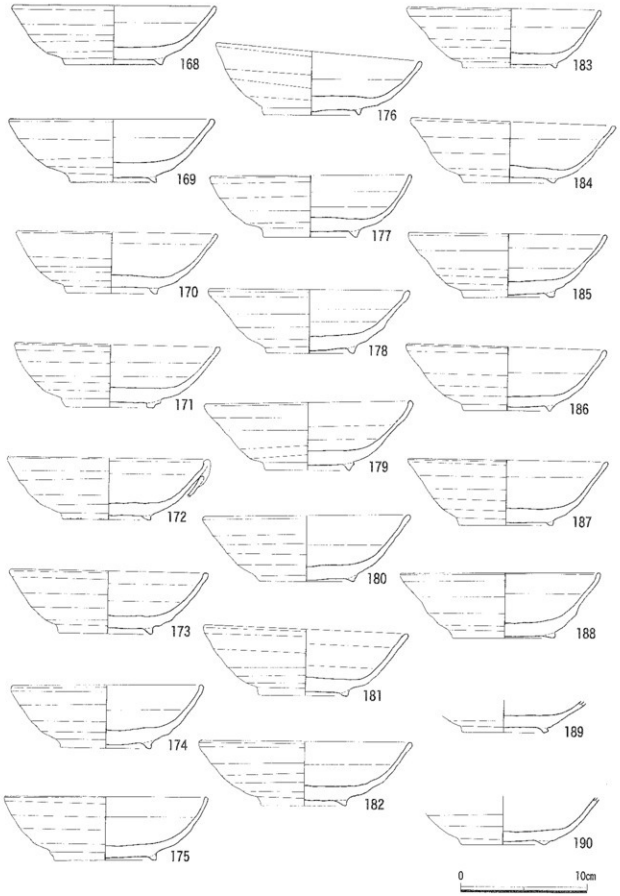
第17図　９号窯出土遺物実測図(3)



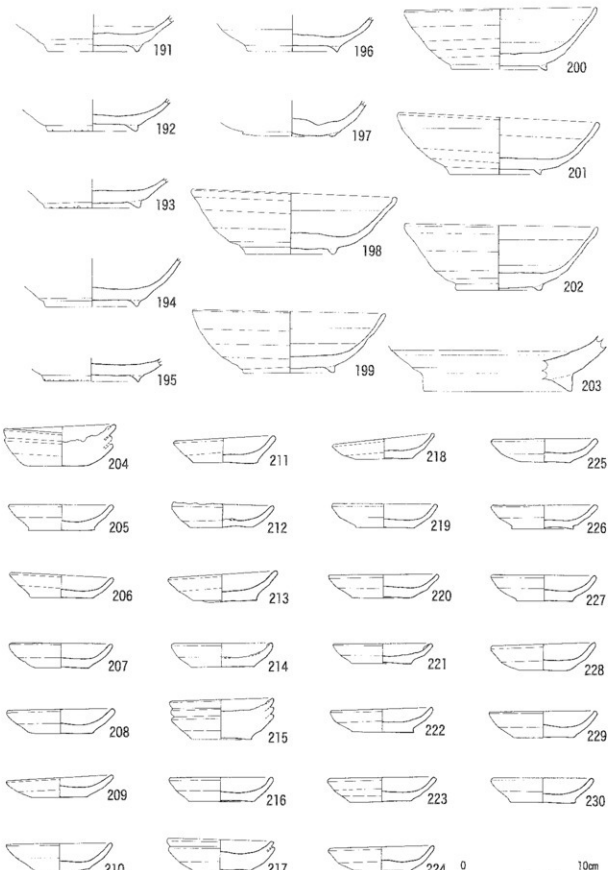
第18図　９号窯出土遺物実測図(4)



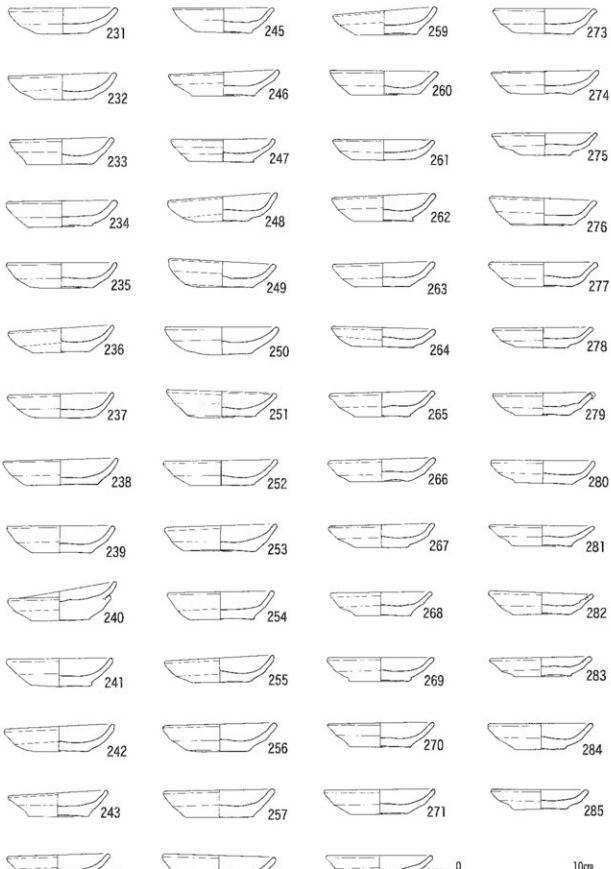
第19図　９号窯出土遺物実測図(5)



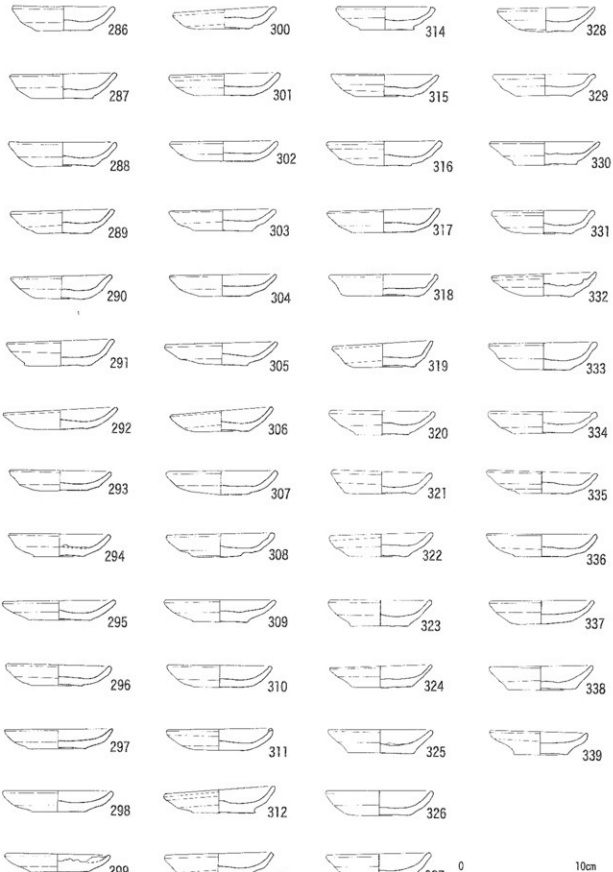
第20図　10号窯出土遺物実測図(1)



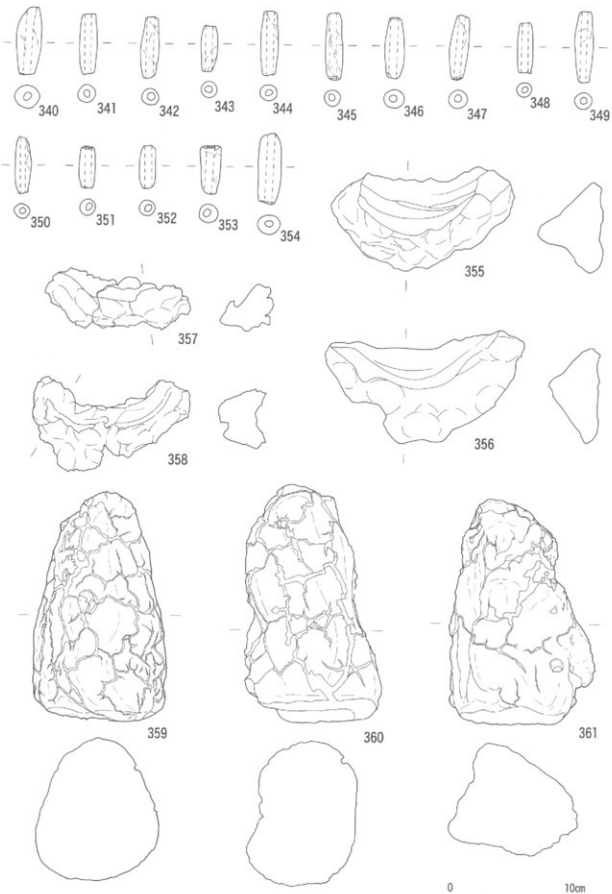
第21図　10号窯出土遺物実測図(2)



第22図　10号窯出土遺物実測図(3)



第23図　10号窯出土遺物実測図(4)



第24図　9・10号窯出土遺物実測図（陶錘・窯道具類）

第5表　9・10号窯出土遺物一覧表

遺物番号	図版番号	窯番号	遺構部位	層位	器種	分類	法量(cm) 口径	器高	底径 高台径	色調	ロクロ	焼成	残存率	高台底部圧痕	備考
1	9	9	焼成室	埋土	碗	A	15.8	4.5	7.0	灰白	右	不良	完形	スノコ痕	
2		9	焼成室	埋土	碗	A	15.8	5.3	6.8	灰白	右	やや不良	完形	スノコ痕	
3		9	焼成室	埋土	碗	A	16.4	5.6	7.4	灰白	右	不良	完形		
4	9	9	燃焼室	埋土	碗	A	14.8	5.3	6.5	灰	右	良好	80%		
5		9	焼成室	埋土	碗	A	15.7	4.8	6.1	灰白	右	良好	60%	スノコ痕	
6		9	焼成室	埋土	碗	A	15.4	5.0	6.2	灰	右	良好	60%	スノコ痕	
7		9	焼成室	埋土	碗	A	16.1	4.9	6.3	灰	右	良好	70%	スノコ痕	
8		9	焼成室	埋土	碗	A	15.5	5.1	6.4	灰	右	良好	80%	スノコ痕	底部内面に自然釉付着 重ね焼痕
9		9	焼成室	埋土	碗	A	16.3	5.3	6.9	灰白	右	良好	75%		
10	9	9	焼成室	床面直上	碗	A	15.5	5.1	6.6	灰	右	良好	80%	スノコ痕	
11		9	焼成室	床面直上	碗	A	16.2	5.5	7.2	灰白	右	やや不良	85%		
12		9	焼成室	床面直上	碗	A	16.4	5.0	7.0	灰白	右	やや不良	完形		
13	9	9	焼成室	床面直上	碗	A	16.5	5.2	7.0	灰白	右	やや不良	完形		
14		9	焼成室	床面直上	碗	A	15.6	4.8	6.8	灰白	右	良好	80%	スノコ痕	焼台
15		9	焼成室	床面直上	碗	A	16.2	5.0	7.1	灰	右	良好	50%	スノコ痕	焼台
16		9	焼成室	床面直上	碗	A	(16.0)	5.8	6.9	灰白	右	やや不良	50%	スノコ痕	焼台
17	9	9	焼成室	床面直上	碗	A	16.1	5.0	6.4	灰	右	良好	40%	スノコ痕	焼台
18		9	焼成室	床面直上	碗	A	(15.9)	4.7	7.4	灰	右	良好	80%	スノコ痕	焼台
19		9	焼成室	埋土	碗	A	15.5	5.1	7.2	灰	右	良好	50%	スノコ痕	
20		9	焼成室	埋土	碗	A	15.6	5.0	6.8	灰	右	良好	60%	スノコ痕	
21	9	9	焼成室	埋土	碗	A	15.2	4.9	6.6	灰	右	良好	85%	スノコ痕	
22		9	焼成室	埋土	碗	A	16.2	5.1	7.3	灰白	右	不良	完形		
23		9	焼成室	埋土	碗	A	15.9	5.0	6.7	灰	右	良好	60%		
24		9	焼成室	埋土	碗	A	15.5	4.8	6.3	灰	右	良好	55%	スノコ痕	
25		9	焼成室	埋土	碗	A	15.4	5.0	6.4	灰白	右	良好	60%	スノコ痕	
26		9	焼成室	埋土	碗	A	15.6	5.1	6.9	灰	右	良好	55%	スノコ痕	
27	9	9	焼成室	埋土	碗	A	15.3	4.9	6.8	灰	右	良好	完形	スノコ痕	
28	9	9	焼成室	埋土	碗	A	15.6	5.2	6.8	灰	右	良好	完形	スノコ痕	
29	9	9	焼成室	埋土	碗	A	15.9	4.9	6.7	灰	右	良好	完形	スノコ痕	
30		9	焼成室	埋土	碗	A	15.5	5.1	6.3	灰白	右	良好	完形	スノコ痕	
31	9	9	焼成室	埋土	碗	A	15.0	5.0	6.2	灰	右	良好	85%	スノコ痕	
32	9	9	焼成室	埋土	碗	A	15.9	5.5	7.4	灰白	右	不良	完形		
33	9	9	焼成室	埋土	碗	A	15.2	4.3	6.6	灰	右	良好	55%		
34	9	9	焼成室	埋土	碗	A	16.0	4.7	6.2	青灰	右	良好	75%		
35		9	焼成室	埋土	碗	A	16.2	5.9	6.8	灰	右	良好	55%	スノコ痕	
36	9	9	焼成室	埋土	碗	A	15.6	4.8	6.6	灰	右	良好	完形		
37		9	焼成室	埋土	碗	A	16.4	4.9	7.7	灰黄	右	不良	完形	スノコ痕	
38		9	焼成室	埋土	碗	A	15.5	5.3	7.7	灰白	右	不良	85%	スノコ痕	
39		9	焼成室	埋土	碗	A	15.7	4.9	6.1	灰	右	良好	60%	スノコ痕	
40	10	9	焼成室	床面直上	碗	A	13.9	4.2	5.9	灰	右	良好	65%	スノコ痕	焼台
41	10	9	焼成室	埋土	碗	A	15.0	4.9	6.4	灰白	右	良好	完形	スノコ痕	
42		9	焼成室	床面直上	碗	B	(15.2)	4.4	6.9	灰	右	良好	60%	スノコ痕	焼台
43	10	9	焼成室	埋土	碗	B	15.6	5.2	6.5	灰	右	良好	完形	スノコ痕	
44	10	9	焼成室	埋土	碗	B	15.8	5.2	6.5	灰	右	良好	完形	スノコ痕	
45		9	焼成室	床面直上	碗	—	—		5.4	灰白	右	良好	底部100%	スノコ痕	焼台
46		9	焼成室	床面直上	碗	—	—	—	7.0	灰	右	良好	底部100%	スノコ痕	焼台
47	10	9	焼成室	床面直上	碗	—	—	—	7.4	灰	右	良好	65%	スノコ痕	底部内面に自然釉付着 重ね焼痕 焼台
48		9	焼成室	床面直上	碗		—	—	6.6	灰	右	良好	底部100%	スノコ痕	焼台
49		9	焼成室	床面直上	碗	—	—	—	5.7	灰	右	良好	底部100%		焼台
50		9	焼成室	床面直上	碗	—	—	—	7.2	灰	右	良好	底部100%		焼台
51		9	焼成室	床面直上	碗	—	—	—	6.9	灰	右	良好	底部100%		焼台
52		9	焼成室	床面直上	碗	—	—	—	6.4	灰	右	良好	底部100%	スノコ痕	焼台
53	10	9	前庭部	埋土 (43.46層)	碗	A	15.4	5.6	6.0	灰白	右	良好	完形	スノコ痕	焼成室遺物と接合
54		9	前庭部	埋土 (43.46層)	碗	A	16.2	5.1	6.8	灰白	右	良好	70%	スノコ痕	焼成室遺物と接合
55	10	9	前庭部	埋土 (43.46層)	碗	A	16.1	4.8	7.0	灰	右	良好	完形	スノコ痕	焼成室遺物と接合
56		9	前庭部	埋土 (43.46層)	碗	A	15.8	4.9	(7.0)	灰	右	良好	70%	スノコ痕	焼成室遺物と接合
57	10	9	前庭部	埋土 (43.46層)	碗	—	—	—	7.3	灰白	右	良好	底部100%	スノコ痕	焼台と接合
58		9	燃焼室	埋土	碗	A	16.1	5.3	6.6	灰白	右	良好	70%	スノコ痕	
59		9	燃焼室	埋土	碗	A	15.5	5.0	6.1	灰白	右	良好	75%	スノコ痕	
60		9	前庭部	埋土 (43.46層)	碗	A	16.2	5.1	7.8	灰黄	右	良好	80%		
61		9	前庭部	埋土 (43.46層)	碗	A	15.8	5.0	6.4	灰	右	良好	80%		
62	10	9	前庭部	埋土 (43.46層)	碗	A	15.4	4.5	7.0	灰白	右	良好	完形		
63	10	9	前庭部	埋土 (43.46層)	碗	A	15.6	5.1	6.1	灰白	右	良好	80%	スノコ痕	
64		9	前庭部	埋土 (43.46層)	碗	A	15.6	5.3	6.6	灰白	右	良好	80%	スノコ痕	
65		9	前庭部	埋土 (43.46層)	碗	A	15.4	4.8	6.4	灰	右	良好	65%	スノコ痕 モミ殻痕	
66		9	前庭部	埋土 (43.46層)	碗	A	15.8	5.1	6.8	灰	右	良好	60%	スノコ痕	
67	10	9	前庭部	埋土 (43.46層)	碗	A	15.5	4.6	7.1	灰白	右	良好	完形	スノコ痕	
68	10	9	前庭部	埋土 (43.46層)	碗	A	15.4	5.0	6.5	灰白	右	良好	完形	スノコ痕	
69		9	前庭部	埋土 (43.46層)	碗	A	15.9	5.0	6.3	灰白	右	良好	85%	スノコ痕	

遺物番号	図面番号	遺構番号	遺構部位	層位	器種	分類	法量(cm) 口径	器高	底径 輪台径	色調	ロクロ	焼成	残存率	高台底部形態	備考
70		9	前庭部	埋土(43,46層)	碗	A	16.3	5.3	7.4	鈍い黄橙	右	良好	80%	スノコ痕	
71		9	前庭部	埋土(43,46層)	碗	A	15.7	5.5	6.7	灰白	右	良好	完形	スノコ痕	
72		9	前庭部	埋土(43,46層)	碗	A	15.9	4.8	5.9	オリーブ灰	右	良好	完形	スノコ痕	
73		9	前庭部	埋土(43,46層)	碗	A	15.6	5.3	6.8	浅黄	右	良好	完形	スノコ痕	
74	10	9	前庭部	埋土(43,46層)	碗	A	15.7	5.0	6.2	灰白	右	良好	80%	スノコ痕	
75		9	前庭部	埋土(43,46層)	碗	A	16.0	5.2	6.6	灰白	右	良好	85%	スノコ痕	
76		9	前庭部	埋土(43,46層)	碗	A	15.8	5.0	6.3	灰白	右	良好	完形	スノコ痕	
77		9	前庭部	埋土(43,46層)	碗	A	15.9	4.5	6.3	灰	右	良好	完形	スノコ痕	
78		9	前庭部	埋土(43,46層)	碗	A	15.5	4.9	6.8	灰	右	良好	75%	スノコ痕	
79		9	前庭部	埋土(43,46層)	碗	A	15.6	5.1	7.3	灰白	右	良好	80%	スノコ痕	
80		9	前庭部	埋土(43,46層)	碗	A	16.1	5.2	7.1	灰白	右	やや不良	60%	スノコ痕	
81		9	前庭部	埋土(43,46層)	碗	A	16.0	4.9	6.6	灰	右	良好	60%		
82		9	前庭部	埋土(43,46層)	碗	A	15.8	4.9	6.4	灰白	右	良好	70%	スノコ痕	
83	10	9	前庭部	埋土(43,46層)	碗	A	15.8	5.4	6.5	灰白	右	良好	85%		
84		9	前庭部	埋土(43,46層)	碗	B	16.0	4.9	7.0	浅黄	右	やや不良	完形		
85		9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.0	2.1	4.1	灰	右	良好	完形	スノコ痕	
86		9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.5	2.0	4.5	灰	右	良好	完形	スノコ痕	
87		9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.2	2.1	4.5	灰	右	良好	完形		
88		9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.1	1.8	4.6	灰	右	良好	完形		
89		9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.2	2.1	4.6	灰	右	良好	完形		
90		9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.1	2.1	4.5	灰	右	良好	75%		
91		9	焼成室	埋土	小皿	A1	7.9	2.0	4.4	灰	右	良好	完形		
92		9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.2	2.3	4.8	灰	右	良好	完形		
93		9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.1	1.8	4.0	灰白	右	良好	完形		
94		9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.1	2.0	4.6	灰	右	良好	完形		
95		9	焼成室	埋土	小皿	A1	7.6	1.9	4.3	灰	右	良好	完形		
96		9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.5	1.9	4.2	灰白	右	不良	完形		
97		9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.4	2.5	4.8	灰	右	良好	完形		
98		9	焼成室	埋土	小皿	A1	7.8	2.1	4.0	灰	右	良好	完形		
99		9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.0	2.1	4.2	青灰	右	良好	完形	スノコ痕	
100		9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.4	2.1	4.5	灰	右	良好	完形		
101		9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.3	2.0	4.0	青灰	右	良好	完形		
102	11	9	焼成室	埋土	小皿	A1	7.9	2.1	4.4	灰	右	良好	完形		
103	11	9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.0	1.9	4.0	灰	右	良好	完形		
104		9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.1	1.8	4.6	青灰	右	良好	85%		
105		9	焼成室	埋土	小皿	A1	7.8	2.0	4.5	灰	右	良好	完形		
106		9	焼成室	埋土	小皿	A1	7.7	2.0	4.2	灰白	右	良好	完形		
107		9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.2	2.1	4.4	青灰	右	良好	完形		
108		9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.1	2.0	4.2	青灰	右	良好	完形		
109		9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.1	1.9	4.5	灰	右	良好	完形		
110		9	焼成室	床面直上	小皿	A1	7.9	1.9	4.6	灰	右	良好	完形		
111		9	焼成室	床面直上	小皿	A1	8.3	2.1	4.6	灰	右	良好	完形	スノコ痕	
112	11	9	焼成室	床面直上	小皿	A1	8.2	2.1	3.9	灰	右	良好	完形	スノコ痕	
113	11	9	焼成室	床面直上	小皿	A1	8.2	2.2	4.4	灰	右	良好	完形		内面に自然釉、窯詰若干付着
114	11	9	焼成室	床面直上	小皿	A1	8.1	2.0	4.3	青灰	右	良好	完形		
115		9	焼成室	床面直上	小皿	A1	8.2	2.1	4.5	灰	右	良好	完形		
116	11	9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.2	2.1	4.6	灰	右	良好	完形		
117		9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.0	1.9	4.0	灰白	右	良好	完形		
118		9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.1	2.0	3.9	灰	右	良好	80%		
119		9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.2	1.8	4.3	灰	右	良好	完形		
120		9	焼成室	埋土	小皿	A1	7.6	1.9	4.1	灰	右	良好	完形		
121	11	9	焼成室	埋土	小皿	A1	7.9	1.8	4.4	灰	右	良好	完形		
122		9	焼成室	埋土	小皿	A1	7.9	2.1	4.6	灰	右	良好	85%		
123		9	焼成室	埋土	小皿	A1	7.9	1.8	4.1	灰	右	良好	完形		
124		9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.0	2.0	4.2	灰	右	良好	完形		
125	11	9	焼成室	床面直上	小皿	A1	8.0	1.5	3.9	青灰	右	良好	完形		
126		9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.0	1.8	4.6	灰	右	良好	完形		
127	11	9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.4	2.0	4.6	灰白	右	良好	完形	スノコ痕	
128		9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.2	2.3	4.5	灰白	右	良好	完形		
129		9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.2	2.1	4.5	灰	右	良好	完形		
130	11	9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.4	2.0	4.5	灰	右	良好	完形		
131		9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.1	2.0	4.1	灰	右	良好	完形		
132		9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.1	1.9	4.4	灰	右	良好	完形		
133	11	9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.0	2.0	4.0	灰	右	良好	完形		
134	11	9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.1	2.1	4.2	灰	右	良好	完形		
135	11	9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.1	1.8	4.5	灰	右	良好	完形		
136	11	9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.0	2.0	4.7	灰	右	良好	完形		
137	11	9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.2	2.1	4.5	灰	右	良好	完形		
138	11	9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.3	1.9	4.5	灰	右	良好	完形		

遺物番号	図版番号	窯番号	遺構部位	層位	器種	分類	法量 (cm)			色調	ロクロ	焼成	残存率	高台底部圧痕	備考
							口径	器高	底径 高台径						
139		9	焼成室	床面直上	小皿	A1	9.1	2.3	4.5	灰	右	やや不良	70%		
140		9	焼成室	床面直上	小皿	A1	9.4	2.2	4.6	鈍い黄橙	右	やや不良	70%		
141		9	焼成室	埋土	小皿	A1	7.9	1.9	4.4	灰	右	良好	80%		
142	12	9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.0	2.0	4.1	灰	右	良好	完形		
143		9	焼成室	床面直上	小皿	A1	8.3	2.0	4.1	灰	右	良好	完形		
144		9	焼成室	床面直上	小皿	A1	8.2	1.8	4.5	灰	右	良好	85%		
145		9	焼成室	床面直上	小皿	A1	8.2	2.0	4.7	灰	右	良好	80%		
146		9	焼成室	床面直上	小皿	A1	8.2	2.1	4.8	灰	右	良好	80%		
147		9	焼成室	床面直上	小皿	A1	8.2	1.9	4.5	灰	右	良好	80%		
148		9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.4	2.0	4.3	灰	右	良好	完形		
149		9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.2	2.1	4.3	灰	右	良好	完形		
150		9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.2	2.0	4.2	灰	右	良好	完形		
151		9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.4	2.1	4.3	灰	右	良好	完形		
152		9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.0	2.0	3.8	灰	右	良好	80%		
153		9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.5	2.1	4.6	灰	右	良好	85%		
154		9	焼成室	埋土	小皿	A1	8.2	2.0	4.3	灰白	右	良好	完形		
155	12	9	焼成室	埋土	小皿	A2	8.1	1.8	4.2	灰白	右	良好	完形		
156	12	9	焼成室	埋土	小皿	A2	8.2	2.0	4.2	青灰	右	良好	完形		底部内面に自然釉付着 重ね焼痕
157	12	9	焼成室	床面直上	小皿	A2	8.4	1.9	4.2	灰	右	良好	完形		
158		9	焼成室	床面直上	小皿	A2	7.8	1.9	4.1	青灰	右	良好	完形		
159		9	焼成室	埋土	小皿	A2	8.3	1.5	4.2	灰	右	良好	完形		
160	12	9	焼成室	床面直上	小皿	A2	8.2	1.7	4.1	灰	右	良好	完形		
161		9	焼成室	埋土	小皿	A2	8.3	1.7	4.5	灰白	右	良好	完形		
162		9	焼成室	埋土	小皿	A2	8.3	1.9	4.4	灰	右	良好	85%		
163	12	9	焼成室	埋土	小皿	A2	8.0	2.0	4.3	灰	右	良好	完形		
164		9	燃焼室	埋土	小皿	A1	8.1	2.1	4.3	灰	右	良好	完形	スノコ痕	
165		9	燃焼室	埋土	小皿	A1	7.9	2.0	4.2	灰	右	良好	完形		
166		9	燃焼室	埋土	小皿	A1	7.9	2.0	4.2	灰	右	良好	完形		
167		9	燃焼室	埋土	小皿	A1	8.2	1.8	4.1	灰	右	良好	完形		
168	12	10	焼成室	埋土	碗	A	16.0	4.8	7.7	灰黄褐	右	良好	完形	スノコ痕	
169	12	10	焼成室	埋土	碗	A	16.2	5.1	6.8	鈍い灰褐	右	やや不良	80%	スノコ痕	
170	12	10	焼成室	埋土	碗	A	15.9	4.9	7.1	褐灰	右	良好	完形	スノコ痕	内面全体に自然釉,窯屑付着
171		10	焼成室	埋土	碗	A	16.2	5.0	6.8	灰黄褐	右	良好	85%	スノコ痕	
172	12	10	焼成室	埋土	碗	A	16.0	5.0	6.9	灰	右	良好	85%	モミ殻痕	底部内面に自然釉,窯屑付着 重ね焼痕
173		10	焼成室	埋土	碗	A	15.7	5.0	7.3	鈍い橙	右	やや不良	70%	スノコ痕	
174		10	焼成室	埋土	碗	A	15.2	5.0	7.0	灰黄褐	右	やや不良	完形	スノコ痕	
175		10	焼成室	床面直上	碗	A	16.1	5.2	8.0	灰黄	右	良好	完形		
176		10	焼成室	床面直上	碗	A	16.3	5.2	7.5	灰黄	右	良好	完形		
177		10	焼成室	埋土	碗	A	15.9	4.9	7.3	暗灰黄	右	良好	完形	スノコ痕	
178	12	10	焼成室	埋土	碗	B	15.9	5.1	6.8	鈍い褐	右	やや不良	完形	スノコ痕	
179	12	10	焼成室	埋土	碗	B	16.5	5.4	6.6	灰	右	良好	80%	スノコ痕	
180		10	焼成室	埋土	碗	B	16.4	5.2	7.3	灰白	右	不良	80%		
181		10	焼成室	埋土	碗	B	16.1	5.3	7.0	灰白	右	やや不良	完形		
182		10	焼成室	埋土	碗	B	16.8	5.2	6.6	灰黄褐	右	やや不良	80%	スノコ痕	底部内面に自然釉付着 重ね焼痕
183	12	10	焼成室	埋土	碗	B	15.4	4.8	7.4	灰	右	良好	完形	スノコ痕	底部内面に自然釉,窯屑付着 重ね焼痕
184		10	焼成室	埋土	碗	B	16.2	4.9	7.1	灰	右	良好	70%	スノコ痕	
185	13	10	焼成室	床面直上	碗	B	15.7	5.1	7.1	灰	右	良好	完形	スノコ痕	
186		10	焼成室	床面直上	碗	B	15.9	5.1	6.9	黄灰	右	良好	完形	スノコ痕	
187	13	10	焼成室	床面直上	碗	B	15.8	5.3	7.4	灰	右	良好	完形		
188		10	焼成室	埋土	碗	B	15.9	5.2	8.1	灰オリーブ	右	良好	75%	スノコ痕	
189		10	焼成室	床面直上	碗	—	—	—	6.8	褐	右	良好	底部100%		焼台
190	13	10	焼成室	床面直上	碗	—	—	—	6.5	褐灰	右	良好	底部100%	スノコ痕	焼台
191		10	焼成室	床面直上	碗	—	—	—	7.2	橙	右	良好	底部100%	スノコ痕	焼台
192		10	焼成室	床面直上	碗	—	—	—	6.9	灰	右	良好	底部100%	モミ殻痕	焼台
193		10	焼成室	床面直上	碗	—	—	—	7.3	淡黄	右	良好	底部100%	モミ殻痕	焼台
194		10	焼成室	床面直上	碗	—	—	—	7.1	鈍い橙	右	良好	底部100%		焼台
195		10	焼成室	床面直上	碗	—	—	—	7.4	灰白	右	やや不良	底部100%	モミ殻痕	焼台
196	13	10	焼成室	床面直上	碗	—	—	—	7.0	灰	右	良好	底部100%	スノコ痕	焼台
197	13	10	焼成室	床面直上	碗	—	—	—	7.3	灰	右	良好	底部100%		焼台
198	13	10	燃焼室	埋土	碗	A	16.2	4.9	7.0	灰	右	良好	85%	スノコ痕	
199		10	燃焼室	埋土	碗	A	15.2	4.9	7.1	黄灰	右	良好	85%		底部内面に自然釉付着 重ね焼痕
200	13	10	燃焼室	埋土	碗	A	15.2	4.9	7.5	灰褐	右	良好	80%	スノコ痕	
201	13	10	燃焼室	埋土	碗	A	16.0	4.6	7.1	灰	右	良好	70%	スノコ痕	
202	13	10	燃焼室	埋土	碗	B	15.3	5.1	6.8	灰	右	良好	完形	スノコ痕	
203		10	窯内	埋土	鉢		—	—	4.5	オリーブ灰	右	良好	底部10%		
204	13	10	焼成室	埋土	小皿	A1	(8.4)	(2.0)	(5.0)	灰	右	良好	(上)完形 (中)完形 (下)完形		3枚釉着 内面全体に自然釉,窯屑付着
205	13	10	焼成室	埋土	小皿	A1	8.3	2.1	5.2	灰黄	右	良好	完形		
206		10	焼成室	埋土	小皿	A1	8.2	1.8	4.9	浅黄橙	右	良好	完形		
207		10	焼成室	埋土	小皿	A1	8.1	2.0	4.4	灰	右	良好	完形		内面全体,外面上部自然釉,窯屑付着
208		10	焼成室	埋土	小皿	A1	8.5	2.0	5.1	淡黄	右	良好	完形	スノコ痕	
209		10	焼成室	埋土	小皿	A1	8.4	1.6	4.3	灰オリーブ	右	良好	完形		内面全体に自然釉,窯屑付着
210		10	焼成室	埋土	小皿	A1	8.3	2.2	4.4	浅黄	右	良好	完形		
211		10	焼成室	埋土	小皿	A1	8.0	1.9	5.1	灰	右	良好	70%		
212		10	焼成室	埋土	小皿	A1	8.0	1.9	5.0	灰白	右	良好	完形		内面全体に自然釉,窯屑付着
213		10	焼成室	埋土	小皿	A1	8.6	2.2	5.0	浅黄橙	右	良好	80%		工具痕
214		10	焼成室	埋土	小皿	A1	8.0	1.9	4.9	灰白	右	良好	完形		内面全体,外面上部自然釉,窯屑付着
215		10	焼成室	埋土	小皿	A1	(8.2)	(1.9)	(4.6)	灰	右	良好	(上)70% (中)完形 (下)完形		3枚釉着 内面全体,外面上部自然釉,窯屑付着
216		10	焼成室	埋土	小皿	A1	8.2	1.9	5.1	灰黄	右	良好	完形		
217		10	焼成室	埋土	小皿	A1	(8.4)	(1.9)	(4.5)	灰	右	良好	(上)完形 (下)完形		2枚釉着 内面全体,外面上部に自然釉付着

遺物番号	図版番号	窯番号	遺構部位	層位	器種	分類	法量(cm)			色調	ロクロ	焼成	残存率	高台底部圧痕	備考
							口径	器高	底径高台径						
218		10	焼成室	埋土	小皿	A 1	8.1	1.6	4.6	灰赤	右	良好	完形		
219		10	焼成室	埋土	小皿	A 1	8.4	1.9	4.6	灰	右	良好	完形		底部内面に自然釉付着 重ね焼痕
220		10	焼成室	埋土	小皿	A 1	8.7	1.9	4.9	灰白	右	やや不良	完形		
221		10	焼成室	埋土	小皿	A 1	7.9	1.6	4.8	灰	右	良好	完形		内面全体に自然釉，窯屑付着
222		10	焼成室	埋土	小皿	A 1	8.1	1.9	4.9	灰黄褐	右	良好	完形		内面全体，外面上部に自然釉，窯屑付着
223		10	焼成室	埋土	小皿	A 1	8.6	1.9	4.9	灰黄	右	やや不良	完形		
224		10	焼成室	埋土	小皿	A 1	8.4	1.9	4.4	灰黄	右	良好	完形		
225		10	焼成室	埋土	小皿	A 1	8.4	1.8	4.2	灰	右	良好	完形		
226		10	焼成室	埋土	小皿	A 1	8.4	1.9	4.9	灰オリーブ	右	良好	完形		
227		10	焼成室	埋土	小皿	A 1	8.3	2.1	4.4	灰白	右	良好	完形		
228		10	焼成室	埋土	小皿	A 1	8.3	2.1	4.1	灰黄	右	やや不良	完形		
229		10	焼成室	埋土	小皿	A 1	8.5	2.1	4.3	灰白	右	やや不良	完形		
230		10	焼成室	床面直上	小皿	A 1	8.1	2.0	5.1	灰黄	右	やや不良	完形		
231		10	焼成室	床面直上	小皿	A 1	8.6	2.1	4.2	灰黄	右	やや不良	完形		
232		10	焼成室	床面直上	小皿	A 1	8.6	2.1	4.5	灰白	右	やや不良	完形		
233	13	10	焼成室	床面直上	小皿	A 1	8.3	2.2	5.3	灰白	右	良好	完形		
234		10	焼成室	床面直上	小皿	A 1	8.8	2.1	5.1	灰白	右	不良	完形		
235		10	焼成室	床面直上	小皿	A 1	8.8	2.0	5.1	灰白	右	やや不良	完形		
236		10	焼成室	床面直上	小皿	A 1	8.4	1.9	4.6	灰白	右	不良	完形		
237		10	焼成室	床面直上	小皿	A 1	8.4	1.9	5.0	灰白	右	不良	完形		
238	13	10	焼成室	床面直上	小皿	A 1	9.1	2.0	5.8	灰白	右	不良	完形	スノコ痕	
239		10	焼成室	床面直上	小皿	A 1	8.5	2.2	4.9	灰白	右	不良	完形	スノコ痕	
240		10	焼成室	埋土	小皿	A 1	(8.1)	(1.9)	(4.5)	灰	右	良好	(上)完形 (下)完形		2枚融着 内面全体，外面上部に自然釉，窯屑付着
241		10	焼成室	埋土	小皿	A 1	8.4	2.2	5.0	灰白	右	やや不良	85%		
242		10	焼成室	埋土	小皿	A 1	8.7	2.0	4.4	灰白	右	やや不良	完形		
243	13	10	焼成室	埋土	小皿	A 1	7.9	1.9	4.7	灰	右	良好	70%		
244		10	焼成室	埋土	小皿	A 1	8.2	1.8	4.7	灰	右	良好	完形		底部内面に自然釉付着 重ね焼痕
245		10	焼成室	埋土	小皿	A 1	8.0	2.0	4.5	灰	右	良好	完形		内面全体に自然釉，窯屑付着
246		10	焼成室	埋土	小皿	A 1	8.7	1.9	5.0	灰黄	右	良好	完形		
247		10	焼成室	埋土	小皿	A 1	8.2	1.8	5.2	灰	右	良好	60%		
248		10	焼成室	埋土	小皿	A 1	8.6	2.0	4.2	灰	右	良好	完形		
249		10	焼成室	床面直上	小皿	A 1	8.5	2.0	5.3	淡黄	右	不良	完形		
250		10	焼成室	床面直上	小皿	A 1	9.0	2.2	4.9	淡黄	右	不良	完形		
251	13	10	焼成室	床面直上	小皿	A 1	8.7	2.1	5.3	灰白	右	不良	完形		
252		10	焼成室	床面直上	小皿	A 1	9.0	2.0	5.0	灰白	右	不良	完形		
253		10	焼成室	床面直上	小皿	A 1	8.9	2.1	5.6	灰白	右	不良	完形		
254		10	焼成室	床面直上	小皿	A 1	8.4	2.0	5.1	灰白	右	不良	85%		
255		10	焼成室	床面直上	小皿	A 1	8.6	2.0	4.5	灰白	右	不良	完形		
256		10	焼成室	床面直上	小皿	A 1	9.0	2.2	5.0	浅黄橙	右	やや不良	完形		
257		10	焼成室	床面直上	小皿	A 1	8.7	2.2	5.4	灰白	右	不良	70%		
258		10	焼成室	床面直上	小皿	A 1	9.0	2.1	4.9	灰白	右	不良	完形		
259		10	焼成室	床面直上	小皿	A 1	8.2	2.0	4.9	灰褐	右	やや不良	70%		
260		10	焼成室	埋土	小皿	A 1	8.5	1.9	5.5	灰白	右	良好	完形		底部内面に自然釉付着 重ね焼痕
261		10	焼成室	埋土	小皿	A 1	8.0	1.6	5.1	灰	右	良好	完形		底部内面に自然釉付着 重ね焼痕
262		10	焼成室	埋土	小皿	A 1	8.2	2.1	4.7	暗灰黄	右	良好	完形		
263	13	10	焼成室	埋土	小皿	A 1	8.1	1.9	4.4	灰オリーブ	右	良好	完形		
264		10	焼成室	埋土	小皿	A 2	8.2	1.5	5.0	灰白	右	良好	完形	スノコ痕	底部内面に自然釉付着 重ね焼痕
265		10	焼成室	埋土	小皿	A 2	8.3	1.9	4.4	灰オリーブ	右	良好	完形		
266	14	10	焼成室	埋土	小皿	A 2	8.4	1.8	4.7	灰白	右	良好	完形		
267		10	焼成室	埋土	小皿	A 2	8.3	1.8	4.2	灰黄	右	やや不良	完形		
268	14	10	焼成室	床面直上	小皿	A 2	8.0	1.9	4.4	灰	右	良好	完形		
269		10	焼成室	床面直上	小皿	A 2	8.4	2.0	4.9	灰オリーブ	右	良好	完形		底部内面に自然釉，窯屑付着 重ね焼痕
270		10	焼成室	床面直上	小皿	A 2	8.4	1.9	5.0	灰白	右	不良	完形	スノコ痕	
271		10	焼成室	床面直上	小皿	A 2	8.7	2.0	4.8	灰白	右	不良	完形		
272	14	10	焼成室	床面直上	小皿	A 2	8.4	1.7	5.3	灰白	右	不良	完形	スノコ痕	
273		10	焼成室	床面直上	小皿	A 2	8.2	2.0	4.8	灰白	右	やや不良	完形		
274		10	焼成室	埋土	小皿	A 2	8.6	1.8	5.1	灰黄	右	良好	完形		
275		10	焼成室	埋土	小皿	A 2	8.4	1.8	4.4	灰	右	やや不良	完形		
276		10	焼成室	埋土	小皿	A 2	8.5	2.1	5.1	鈍い黄橙	右	不良	完形		
277	14	10	焼成室	埋土	小皿	A 2	8.6	2.0	4.6	灰	右	良好	完形		
278		10	焼成室	埋土	小皿	A 2	8.1	1.6	4.1	灰褐	右	良好	完形		底部内面に自然釉付着 重ね焼痕
279		10	焼成室	埋土	小皿	A 2	8.2	1.8	4.3	灰	右	良好	完形		内面全体，外面底部に自然釉，窯屑付着
280		10	焼成室	埋土	小皿	A 2	8.3	1.9	4.5	黄灰	右	良好	50%		
281	14	10	焼成室	埋土	小皿	A 2	8.4	1.7	4.8	灰黄	右	良好	完形		底部内面に自然釉付着 重ね焼痕
282		10	焼成室	埋土	小皿	A 2	8.3	1.7	4.6	灰	右	良好	完形		内面全体，外面底部に自然釉，窯屑付着
283		10	焼成室	埋土	小皿	A 2	8.1	1.6	4.6	灰	右	良好	85%		内面全体に自然釉，窯屑付着
284		10	焼成室	埋土	小皿	A 2	8.3	2.1	4.1	灰黄	右	良好	85%		
285		10	焼成室	埋土	小皿	A 2	7.7	1.6	4.4	灰オリーブ	右	良好	完形		
286		10	焼成室	埋土	小皿	A 2	8.1	1.9	4.4	鈍い黄橙	右	やや不良	完形		
287		10	焼成室	埋土	小皿	A 2	8.4	2.0	4.9	灰オリーブ	右	良好	85%		
288	14	10	焼成室	埋土	小皿	A 2	8.5	1.9	4.9	鈍い黄橙	右	やや不良	完形		
289		10	焼成室	埋土	小皿	A 2	8.2	1.8	4.4	灰白	右	やや不良	85%		
290		10	焼成室	埋土	小皿	A 2	8.0	1.8	4.6	灰	右	良好	85%		内面全体に自然釉付着
291		10	焼成室	埋土	小皿	A 2	8.5	2.0	5.2	灰白	右	良好	70%	スノコ痕	
292	14	10	焼成室	埋土	小皿	B	9.0	1.6	4.4	灰	右	良好	完形		
293		10	焼成室	埋土	小皿	B	8.0	1.6	4.3	灰	右	良好	85%		
294		10	焼成室	埋土	小皿	B	8.0	1.8	4.0	灰オリーブ	右	良好	完形		内面全体に自然釉，窯屑付着
295	14	10	焼成室	埋土	小皿	B	8.9	1.6	4.9	灰白	右	良好	完形		底部内面に自然釉付着 重ね焼痕
296		10	焼成室	埋土	小皿	B	8.3	1.7	4.2	灰黄	右	良好	80%		
297	14	10	焼成室	埋土	小皿	B	8.5	1.6	4.7	灰白	右	良好	完形		底部内面に自然釉付着
298		10	焼成室	埋土	小皿	B	8.7	1.8	4.2	灰	右	良好	50%		
299	14	10	焼成室	埋土	小皿	B	8.3	1.5	4.6	灰	右	良好	完形		内面全体，外面上部に自然釉，窯屑付着
300		10	焼成室	埋土	小皿	B	8.1	1.6	4.1	黄灰	右	良好	完形		内面全体に自然釉，窯屑付着

遺物番号	図版番号	窯番号	遺構部位	層位	器種	分類	法量(cm)			色調	ロクロ	焼成	残存率	高台底部圧痕	備考
							口径	器高	底径 高台径						
301		10	焼成室	埋土	小皿	B	8.7	1.9	4.7	暗灰黄	右	良好	完形		
302	14	10	焼成室	埋土	小皿	B	8.6	1.6	4.6	黄灰	右	良好	完形		
303		10	焼成室	埋土	小皿	B	8.5	1.6	4.6	黄灰	右	良好	完形		内面全体に自然釉,窯屑付着
304		10	焼成室	埋土	小皿	B	8.5	1.7	4.2	鈍い橙	右	良好	完形		
305		10	焼成室	埋土	小皿	B	8.9	1.8	4.0	鈍い赤褐	右	良好	完形		
306		10	焼成室	埋土	小皿	B	8.2	1.7	4.3	灰	右	良好	完形		内面全体に自然釉,窯屑付着
307	14	10	焼成室	床面直上	小皿	B	8.8	1.9	4.7	灰黄	右	やや不良	完形		
308		10	焼成室	埋土	小皿	B	8.5	1.9	3.9	灰	右	良好	完形		底部内面に自然釉付着 重ね焼痕
309	14	10	焼成室	埋土	小皿	B	8.8	1.8	4.2	灰	右	良好	完形	スノコ痕	内面全体に自然釉,窯屑付着
310		10	焼成室	埋土	小皿	B	8.3	1.7	4.4	鈍い橙	右	良好	完形		
311		10	焼成室	埋土	小皿	B	8.4	1.7	4.5	灰	右	良好	完形		
312		10	焼成室	埋土	小皿	B	8.8	1.8	4.9	灰白	右	良好	80%		
313		10	焼成室	床面直上	小皿	B	8.6	1.9	4.3	灰白	右	良好	完形		
314		10	焼成室	埋土	小皿	B	7.8	1.9	4.9	灰	右	良好	完形		
315		10	焼成室	埋土	小皿	B	8.5	1.8	4.7	灰黄	右	やや不良	60%		
316		10	焼成室	埋土	小皿	B	9.2	2.0	4.6	灰オリーブ	右	良好	完形		
317		10	焼成室	埋土	小皿	C	8.9	1.8	4.8	灰白	右	良好	完形		
318	14	10	焼成室	床面直上	小皿	C	8.6	1.7	6.5	灰白	右	やや不良	完形		
319	14	10	焼成室	埋土	小皿	C	8.0	1.9	4.9	鈍い黄橙	右	やや不良	70%		
320		10	燃焼室	埋土	小皿	A 1	8.4	1.9	4.2	灰白	右	良好	完形		
321		10	燃焼室	埋土	小皿	A 1	8.0	1.8	5.5	灰	右	良好	完形		
322		10	燃焼室	埋土	小皿	A 1	8.2	1.8	4.6	灰白	右	やや不良	完形		底部に工具痕?
323		10	燃焼室	埋土	小皿	A 1	8.2	2.1	4.6	灰	右	良好	完形		内外面底部に自然釉,窯屑付着 重ね焼痕
324		10	燃焼室	埋土	小皿	A 1	8.1	1.7	4.7	黄灰	右	良好	80%		
325	14	10	燃焼室	埋土	小皿	A 1	8.3	1.9	5.3	灰	右	良好	完形		
326		10	燃焼室	埋土	小皿	A 1	8.6	2.0	5.1	灰	右	良好	完形	スノコ痕	内外面底部に自然釉,窯屑付着 重ね焼痕
327		10	燃焼室	埋土	小皿	A 1	8.3	1.9	5.4	灰白	右	良好	完形		
328		10	燃焼室	埋土	小皿	A 1	7.7	1.9	4.4	灰白	右	良好	完形		
329		10	燃焼室	埋土	小皿	A 2	8.1	1.7	4.5	灰	右	良好	完形		
330		10	燃焼室	埋土	小皿	A 2	8.8	1.9	5.1	灰	右	良好	完形		
331	14	10	燃焼室	埋土	小皿	A 2	8.2	1.8	4.8	灰	右	良好	完形	スノコ痕	内面全体に自然釉,窯屑付着
332		10	燃焼室	埋土	小皿	A 2	8.3	1.7	4.3	灰	右	良好	完形		内面全体に自然釉,窯屑付着
333		10	燃焼室	埋土	小皿	A 2	8.6	2.2	4.6	灰白	右	不良	完形		
334		10	燃焼室	埋土	小皿	A 2	8.6	1.8	4.6	灰	右	良好	完形		内面全体に自然釉,窯屑付着
335		10	燃焼室	埋土	小皿	B	8.8	1.8	4.4	灰オリーブ	右	良好	完形		
336		10	燃焼室	埋土	小皿	B	8.8	1.8	4.2	黄灰	右	良好	完形		底部内面に自然釉,窯屑付着
337		10	燃焼室	埋土	小皿	B	8.4	1.9	4.7	灰白	右	良好	完形		底部内面に自然釉,窯屑付着
338		10	窯内	埋土	小皿	A 1	8.3	2.1	5.4	灰白	右	不良	80%	スノコ痕	
339		10	窯内	埋土	小皿	A 1	7.8	1.9	4.2	灰	右	良	完形	スノコ痕	底部内面に自然釉,窯屑付着

遺物番号	図版番号	窯番号	遺構部位	層位	種類	法量(cm)			色調	焼成	残存率	備考
						長さ	最大径	重さ(g)				
340	12	9	焼成室	床面直上	陶錘	5.3	2.0	17.0	灰白色	やや不良	完形	
341	12	9	焼成室	床面直上	陶錘	4.8	1.4	9.0	灰白色	やや不良	完形	
342	12	9	焼成室	床面直上	陶錘	4.8	1.5	8.0	灰白色	やや不良	完形	
343		9	焼成室	床面直上	陶錘	3.7	1.2	5.0	灰白色	やや不良	完形	
344	12	9	焼成室	床面直上	陶錘	5.1	1.4	9.0	灰白色	やや不良	完形	
345		9	焼成室	床面直上	陶錘	5.3	1.4	9.0	灰白色	やや不良	完形	
346	12	9	焼成室	床面直上	陶錘	4.7	1.6	11.0	灰白色	やや不良	完形	
347	12	9	焼成室	床面直上	陶錘	4.9	1.5	12.0	灰色	やや不良	完形	
348	12	9	焼成室	床面直上	陶錘	4.0	1.2	6.0	灰白色	やや不良	完形	
349	12	9	焼成室	床面直上	陶錘	5.7	1.6	11.0	灰白色	やや不良	完形	
350		9	焼成室	床面直上	陶錘	4.5	1.3	6.0	灰色	良好	完形	
351	12	9	焼成室	床面直上	陶錘	3.2	1.3	7.0	灰色	良好	完形	
352		9	焼成室	床面直上	陶錘	3.3	1.3	5.0	灰白色	やや不良	完形	
353	12	9	焼成室	床面直上	陶錘	3.8	1.7	9.0	灰白色	やや不良	60%	
354		9	焼成室	床面直上	陶錘	5.6	1.8	16.0	灰白色	やや不良	完形	
355	16	9	焼成室	床面直上	焼台	14.3	(厚さ)4.9		灰白色	—	—	
356	16	9	焼成室	床面直上	焼台	15.5	(厚さ)3.9		灰白色	—	—	
357	16	10	焼成室	床面直上	焼台	11.6	(厚さ)4.4		暗灰黄	—	—	
358	16	10	焼成室	床面直上	焼台	12.4	(厚さ)4.5		暗灰黄	—	—	
359	16	9	焼成室	埋土	障焔棒	18.2	12.4	—	褐灰	良好	—	
360	16	9	焼成室	埋土	障焔棒	19.0	12.8	—	灰	良好	—	
361	16	9	焼成室	床面直上	障焔棒	18.9	11.3	—	灰黄	良好	—	
		9	焼成室	床面直上	陶錘	4.8	1.4	9.0	灰白色	やや不良	完形	
		9	焼成室	床面直上	陶錘	4.1	1.5	8.0	灰白色	やや不良	完形	スノコ痕
		9	焼成室	床面直上	陶錘	4.1	1.5	8.0	灰黄色	やや不良	完形	
		9	焼成室	床面直上	陶錘	5.1	1.4	11.0	灰白色	やや不良	完形	
		9	焼成室	床面直上	陶錘	4.7	1.6	12.0	灰白色	やや不良	完形	
		9	焼成室	床面直上	陶錘	3.8	1.4	7.0	灰白色	やや不良	完形	
		9	焼成室	床面直上	陶錘	4.2	1.5	10.0	灰白色	やや不良	完形	
		9	焼成室	床面直上	陶錘	5.0	1.5	9.0	灰黄色	やや不良	完形	
		9	焼成室	床面直上	陶錘	4.3	1.4	8.0	灰白色	やや不良	完形	
		9	焼成室	床面直上	陶錘	4.6	1.4	9.0	灰白色	やや不良	完形	
		9	焼成室	床面直上	陶錘	4.8	1.4	11.0	灰白色	やや不良	完形	
		9	焼成室	床面直上	陶錘	5.9	1.6	13.0	灰白色	やや不良	完形	
		9	焼成室	床面直上	陶錘	5.0	1.5	13.0	灰白色	やや不良	完形	
		9	焼成室	床面直上	陶錘	5.0	1.6	11.0	灰白色	やや不良	完形	
		9	焼成室	床面直上	陶錘	5.3	1.4	10.0	灰白色	やや不良	完形	
		9	焼成室	床面直上	陶錘	4.0	1.3	7.0	灰白色	やや不良	完形	
		9	焼成室	床面直上	陶錘	4.0	1.6	10.0	灰白色	やや不良	完形	
		9	焼成室	床面直上	陶錘	4.3	1.7	10.0	灰白色	やや不良	完形	

第5章　まとめ

1　検出遺構について

今回の発掘調査では時期を違えて構築された2基の窯体、すなわち9号窯とその焼成室から煙道部分にかけてを破壊しながら新たに構築された10号窯を検出することができた。双方の窯ともに焼成室上方から煙道部の状況は不明瞭ながら窯構造をある程度把握できる成果を得、その結果類似した構造を持つ窯であることが判明した。9・10号窯は軸方向を同じくし、また9号窯の廃絶後埋没が進まないうちに10号窯が築造され、しかも焼成室の一部を前庭部として利用した状況が調査所見によって明らかとなったことから、同一の工人がほとんど間をおかずに築造したものと推定できる。9・10号窯ではともに床面および壁面が1面のみ確認され、修復の痕跡もみられないため、修復を繰り返しながら長期にわたって営んだのではないことがわかる。前庭部に残る灰層や埋没土の堆積状況をみても9・10号窯ともに間層を挟むなどの継続的に営まれた様子は窺えない。よって、それぞれの窯は短期間のうちに操業を停止しているものと考えられ、焼成回数は多くて数回、場合によっては1回のみであった可能性もある。

いずれの窯も東海地方の中世窯通有の分焔柱を有する窖窯であるが、窯体の平面的な形状は9号窯・10号窯の焼成室の最大幅はそれぞれ2.20m、2.10mとかなり広くなるにも関わらず燃焼室はほとんど絞らず、寸胴状を呈する特徴を持つ。煙道部は再三述べているように明らかではないが、わずかに残存した9号窯の壁面から狭くなっていくことが予想される。つまり、湖西窯や知多窯などでみられるような煙道部および燃焼室が狭くなる胴張り状の構造ではなく、燃焼室と焼成室でほとんど幅が変わらず、煙道部のみが狭くなる構造を持っていると考えられる。こうした構造は焼成室の幅を広げることにより量産化に対応すると同時に、窖窯時の諸作業すなわち窯入れ、薪入れ、窯出しといった作業を容易にするために燃焼室および焚口の幅の確保を図った結果である可能性もある。また、窯体の傾斜に関しては9号窯の場合、燃焼室から焼成室中ほどまでほとんど平坦であり、焼成室上方から煙道部に向かって急激に立ち上がる構造と推定できた。焼成室のほとんどが調査区外となる10号窯も同様の構造を示すものと思われ、かなり特徴的な構造であるといえる。平成4年に金谷町教育委員会によって実施された山茶碗窯、きつね沢3号窯で確認された窯構造は、分焔柱を持たず、焼成室煙道側が急激に立ち上がって煙道部につながり、その斜面に焼台を乗せるための階段状の施設があるというもので[21]、焼成室の傾斜という点でのみではあるが当窯との類似性を見出すことができる。このように焼成室が中途から極端に立ち上がる構造の窯は管見の限りでは他地域に例が見当たらないため、今後類例の蓄積を待ってその系譜と独自性、また独特の焼き上がりを示す製品と窯構造との関連について検討すべきであろう。

また、特徴的な窯構造として9号窯において検出された障焔棒の設置が挙げられる。すでに述べたようにこれは焼成室内への火勢の強化と均一化を狙うための施設と考えられ、知多窯などでみられる間仕切障壁と同様の効果を得ることができるものと思われる。間仕切障壁との最大の相違点は移動の可否にあり、そのために原位置を保って検出される例も少ないのであろう。原位置のままそれが検出された例としては島田市旗指古窯跡群アザミ沢1号窯が挙げられる[22]。この窯で検出された「移動式障壁」は、設置位置こそ焼成室内（分焔柱より上方20cm）と若干の違いはあるが、当窯で検出された障焔棒とほとんど同様の機能を持った施設であるといえる。その他にもアザミ沢1号窯には燃焼室をほとんど狭めない窯体の平面形や馬蹄形の焼台の使用など、当窯との類似点が多く指摘できる。これら類似する要素により、遺物のうえから先行するとみられるアザミ沢1号窯[23]を含めた旗指古窯跡群のなかに、窯構造からみた当窯の技術的な系譜を求めることが可能であろう。

2　出土遺物について

第４章で述べたように、９・10号窯で焼成された製品の多くは還元炎焼成によって灰色～青灰色の色調を示し、薄手に仕上げられているために一見すると須恵器のような焼き上がりを示す特徴を持っている。そして陶錘を除けば、鉢類が１個体出土したにとどまり、その他をすべて碗・皿が占めている。この結果から９・10号窯がほぼ山茶碗専焼窯であることが明らかとなった。

碗及び小皿はその形態的特徴から、碗はＡ・Ｂ類の２類型、小皿はＡⅠ・Ａ２・Ｂ・Ｃ類の４類型に分類することができた。まずはこれら製品の編年的位置付けについて先学の成果に学びながら考えてみたい。碗Ａ類は体部下半が張るようにして内彎することであたかも半球状を呈し、口縁部が外反せずにそのまま立ち上がり、丸く収められるという形態的特徴と、口径16cm前後、器高５cm前後という法量から松井一明氏の編年[4]でいう山茶碗Ⅲ－１期に比定されるものと思われる。体部が直線的となる碗、ここでいう碗Ｂ類については、該期の金谷古窯跡群の製品としては確認されていないが、河合修氏の論考[5]のなかで先行するⅡ期の製品の中に体部が直線的となる碗の存在が指摘されている。Ｂ類はこの系統がⅢ－１期まで存在することを示していると思われる。碗Ａ・Ｂ類は前述のようにその差はわずかなものであり、製品として指向する形状はかなり似通ったものである。また、碗の高台端部のいわゆるスノコ状圧痕がつく個体が、第３表に示したように圧倒的多数にのぼることを改めて確認することができた。

碗とセット関係を成し、併焼される小皿についても当然ではあるが、Ⅲ－Ⅰ期に位置付けられよう。体部から口縁部にかけて直線的または内彎気味に立ち上がるＡⅠ類、口縁部がやや外反するＡ２類はともに口径８～９cm、器高２cm前後で、Ａ２類は若干器高が低くなる傾向があるがおおむねⅢ－１期とされる小皿の形状を示すものと思われる。底部から体部にかけて丸く立ち上がるＢ類、内面底部と体部の境を強くナデることで段を作り出すような形状を示すＣ類についてはこれまで該期の金谷古窯跡群の製品として確認されていない。Ｂ類は口径がＡ類系とほぼ同様となるが、器高は２cm以下となり、扁平化する特徴を持つ。このＢ類とその形状、法量から類似性を指摘できると思われるのは、同じくⅢ－１期に位置付けられる菊川町皿山５号窯で出土している小皿、すなわち塚本和弘氏の論考[6]で小皿Ｂ類とされるものである。

Ｃ類は法量がＢ類とほぼ同様となるが、前記のような特徴的な形状を持ち、出土点数は極めて少量である。金谷古窯跡群を含めた東遠江地域の生産地では類例が確認されていないが、湖西市宮崎１号窯の製品などに類似する例が認められる[7]。また消費地の例ではあるが、島田市山王前遺跡の出土遺物にＣ類同様、底部内面と体部の境に段を有する「段付山皿」[8]がある。「段付山皿」は渡谷昌彦氏によって輸入陶磁である白磁小皿の写しであると指摘されている。Ｃ類と比較すると「段付山皿」は全体として器高が高く、段も明瞭であるため当窯での焼成品ではないと思われるが、東遠江系山茶碗の中にこうした系統の小皿が存在することは今後注目すべきであろう。

ところで、松井一明氏は当窯の分類でいう小皿Ｂ類の系統が皿山古窯跡群、清ヶ谷古窯跡群でみられることに着目し、これを湖西古窯跡群出土の小皿と対比させることによって皿山、清ヶ谷古窯跡群が湖西古窯跡群の影響を大きく受けていることを想定している[9]。すやん沢古窯跡を含む金谷古窯跡群もこの観点からいえば、湖西古窯跡群からの影響を受けているといえるだろう。さらに松井氏はこうした流れを尾野善裕氏によって示された[10]「瀬戸窯及び猿投窯における輸入陶磁、具体的には同安窯系小皿を祖形とした小皿の型式変化」が湖西古窯跡群に訪れ、それが東遠江地域の生産地にまで波及した結果であることを指摘する。今回の調査によって確認された小皿Ｂ・Ｃ類の存在はそれが金谷古窯跡群にまで及んだことを示し、Ｃ類の特徴的な器形は輸入陶磁の影響をより色濃く受けたものと推定できる。

以上のように９・10号窯で出土した遺物はⅢ－１期に位置付けられる。暦年代についての科学的なデータを得るために、今回９・10号窯燃焼室から出土した炭化材の放射性炭素年代測定を実施した。結果については付編３として掲載したが、試料ごとにばらつきがあり、またこれまでの編年研究による年代よ

りもかなり古い測定結果となってしまった。試料に問題があった可能性もあるが、いずれにしろ有用なデータとなり得ないため、松井氏によって示された13世紀前葉という年代観を支持したい。

次に上記のような遺物の年代観を踏まえ、9・10号窯それぞれの遺物出土状況をみてみたい。新旧関係でいえば9号窯が古く、10号窯が新しくなり、調査の所見からはほとんど時期差がみられない可能性が高いということをすでに述べた。9・10号窯におけるそれぞれの比率について第4表を元にもう一度みてみたい。碗の場合、9号窯ではA類が96.1%、B類が3.9%、10号窯ではA類が62.7%、B類が37.3%である。9号窯ではA類が圧倒的に多く、10号窯ではB類の比率が増加している。A・B類双方が前代からの系譜を引くものであり、また形状としての類似性もあることから、B類の増加をもって新旧関係から新しい10号窯出土遺物をより新しい傾向とするのは困難である。

小皿の比率をみると9号窯ではA1類が92.5%、A2類が7.0%、B類が0.5%で、C類は全く出土していない。10号窯ではA1類が62.4%、A2類が16.4%、B類が20.3%、C類が0.8%である。9号窯ではB類が1点確認できるものの、A類系、それもA1類が圧倒的多数を占めていることが指摘できる。一方、10号窯はA1類が優位ではあるが、A2・B類の比率が増加しており、特にB類の増加は急激である。また9号窯では出土していないC類が少数ながら出土しており、かなり多様な構成比となる。

こうした出土傾向から、ある程度の規格性が認められる9号窯と、それが緩み多様な器形がみられるようになる10号窯という特徴を見出すことができよう。それは碗よりも小皿に明瞭であり、9号窯においては第14図で示した小皿の法量を示すドットの密集及びA1類の比率の高さに、10号窯においては法量を示すドットの分散及び多様な各類型の構成比に現れているように思われる。これらから9号窯から10号窯への変遷の過程で何らかの変化、碗ではA類、小皿ではA1類という基本となる類型はある程度維持しながらも、10号窯において新たな要素が加わるということが認められ、それは工人の新たな参加によるものとは考えられないだろうか。第3表に示した碗高台端部圧痕が、9号窯ではほぼヘラ状圧痕のみであったものが、10号窯では少量ながら籾殻痕が確認できるようになるのは、すでに河合修氏が指摘するように[5]工人の新たな流入による結果とも捉えられよう。また、工人の流入に際しては前述のような西からの影響を合わせて受容したことを、小皿B類の増加とC類の出現から推定することも可能かと思われる。そして、9号窯から10号窯への変遷とそれに伴うこうした変化は遺構の調査所見、遺物の年代観から皿－1型式でおさえられる25～30年程度の間に行われたものと推定したい。

3　すやん沢古窯跡操業の背景について

すやん沢古窯跡の操業の背景を以下に記すが、推論を多分に含むため詳細な検討は今後に譲るとしてここでは気付いた点を指摘するにとどめたい。旗指古窯跡群からの工人の移動に伴う生産地の拡散の流れにより、すやん沢古窯跡を含む金谷古窯跡群が成立し、14世紀初頭まで山茶碗生産が営まれた東遠江系山茶碗諸窯の中でも屈指の生産量を誇る古窯跡群ということがすでに先学によって指摘されている[6]。その動向に従えば、金谷古窯跡群では松井氏山茶碗編年Ⅰ－1期（12世紀前半）より生産が開始され、Ⅱ期～Ⅲ－Ⅰ期（12世紀後葉～13世紀前葉）において最盛期を迎え、Ⅲ－2～3期（13世紀中葉～14世紀初頭）にかけて徐々に生産量を減らし、生産を終了させるという。第2章でふれたように灰釉陶器終末段階である11世紀後半には釜谷西古窯跡が操業しているが、周辺には同時期及び後続する窯は確認されていないため、金谷古窯跡群の本格的な成立はⅠ－1期であろう。

荘園における直接的な支配権を把握しているのは、荘園公領体制化にあっては本家、領所といったより上位の領主ではなく、下司などの荘官をはじめとする在地領主層であるといえる。金谷古窯跡群の成立が旗指古窯跡群からの工人の移動によるものとされるが、工人の移動については窯業生産が立地、陶土、燃料材の上地への依存なくしては成立しないことから、そうした在地領主層との関係が問題となろ

う。燃料材を得ることが容易な丘陵部に築窯をしていることは古代、中世の窯においては共通する部分であり、このことについて注目してみたい。今回、9・10号窯の燃焼室で出土した燃料材とみられる炭化材の分析を実施したが、瀬戸窯などで一般的にみられる松材がまったくなく、モミ属やクリなどが多いことが判明している。質侶荘における貢納品の内容は治承二（1178）年の『遠江国質侶荘年貢物等注文案』によって確認できる[3]。それによれば質侶荘では見米百石、白布三十段、八月廿二日正月修正料として御仏供一前、僧前十二前、正月修正料として綻松百五把が課せられている。貢納品としての松は当然統制下にあったと考えられ、植生など多様な要因はあろうが、穿った見方をすれば当窯で松材が燃料材として確認できないことをその一つの要因と捉えられる。燃料材の確保ひとつとっても工人の自由にはならず、こうしたことからも在地領主層の関与なくして営窯することは不可能であったと思われる。

工人の在地領主層による関与はいかなるものであったのだろうか。それには律令公民や奴婢の「浮浪」、「逃亡」が日常的となり、そうした「浪人」を取り込むことによって、荘園を直接支配する在地領主層が荘園における開発を進めた[4]とされる意見が参考になると思われる。質侶荘域における金谷古窯跡群成立のひとつの要因として、律令支配の動揺や営窯条件の悪化などによって「浪人」化した旗指古窯跡群の工人を開発目的で保護、さらに積極的な関与としては招致した可能性は考えられないだろうか。金谷古窯跡群の山茶碗が本格的に開始される12世紀前半頃は第2章で述べたように大治三（1128）年に質侶荘が円勝寺領として立荘され、政治的に安定がもたらされた時期である。この時期的符合は荘園の安定化による開発との関わりを示すものであり、11世紀後半に位置付けられる釜谷西古窯の単発的な操業は逆に質侶荘の政治的不安定さを物語るものとも考えられよう。

陶器を貢納品そのものとして捉えることについては、前述の質侶荘年貢等注文にみえる「御仏供一前、僧前十二前」が陶器である可能性をすでに足立順二氏が指摘している[5]。湖西市大知波峠廃寺で「御佛供」の墨書が残る灰釉陶器碗が出土していることから[6]、それが陶器である可能性もあろうが、断定できるものではなく不明という他はない。むしろ在地領主層による開発の一環として工人の保護あるいは招致を行うことは、交易品としての余剰生産力を富として蓄えようとする、または本家への貢納品を得るための交易品の確保などが目的として考えられる。工人への関与の具体的なあり方としては給免田の付与などによる直接的な支配か、一定の製品を納めさせその見返りとして陶土や燃料材の用益権を保護するというような弱い関与の仕方であったのかは明らかではない。しかし、宗教具などの特殊品（特注品）を大量に焼成していた形跡は今のところ金谷古窯跡群では確認されておらず、いわば規格品である日常雑器としての山茶碗を主に焼成している事実から、製品そのものに対する在地領主層の関与はなく、工人が需要にあわせる形で製品化していることが推測され、生産への関与は薄かったのではないかと思われる。

ところで、工人の専業性については藤沢良祐氏によって、瀬戸及び猿投窯の分析から専業性の高い「職人」的な山茶碗工人像が想定されている[7]。金谷古窯跡群の場合についていえば、第2章でふれたように天王の瀬替え以前に横岡地区周辺は沖積地が極めて狭いという状況であったことや、山茶碗窯の分布がすやん沢をはじめとして、ほろん沢、きつね沢などやや奥まった丘陵地にしか分布していないこともあり、沖積地近くに居住し農業生産との兼業を行っていたかは定かではない。しかし、約200年にわたる間、専業的に窯業生産を行ったにしては確認されている窯の数は少なく、工人の専業性については今後周辺における集落遺跡（工房跡を含む）の調査の進展、さらなる窯跡の分布調査や窯跡における製品の分析を通じた生産経営形態の検討によって明らかになろう。

金谷古窯跡群で焼成された製品の流通についてはすでに松井氏がその論考で述べるように、遠くは鎌倉を含む関東地方においても少ないながらも出土することから、東への流通圏を持っていたと考えられる。また、松井氏はこの流通圏は旗指古窯跡群のそれを継承している傾向が看取され、そこに商人や水

運業の性格を持った集団の存在が関わった可能性もあわせて指摘している。そうした流通のひとつの手がかりとしては「市」の存在が挙げられる。この頃当地域周辺で「市」がすでに立てられていたことを示すものとして、13世紀前葉の成立とされる紀行文『海道記』がある[※]。「藤枝の市をとをれば花はさきかゝりたり。」というくだりにそれは現れており、正安元（1299）年の成立とされる『一遍上人絵伝』のなかで福岡の「市」において備前甕が並べられ、商品として描かれているのと同様、山茶碗のような陶器がそのように取引されていても不思議ではない。これが山茶碗流通のすべてを表すとは限らないが、「商品」である山茶碗がそうした「市」を媒介とした流通経路を持っていた可能性も高いと思われ、そこに商人的あるいは水陸運業者的な組織の介在も考えられる。しかし、これは専業度にも関わることではあるが工人自身による流通への関与も否定できないという意見[※]も重要視すべきである。日常雑器である山茶碗は基本的には狭域な流通圏を持つと考えられるが、生産地と消費地を結ぶ研究はまだ不十分であり、消費地の出土傾向の分析やすでに述べたように生産地での製品の器種構成や比率の分析、またその結果を文献から読み取れる中世的流通とも合わせて考察していくことが今後の課題となろう。

発掘調査及び資料整理にあたって、金谷町教育委員会、島田市博物館から格別の御協力をいただいた。また、下記の方々に御指導、御教示をいただいた。記して感謝申し上げる。

飯塚晴夫　岩井立弥　岡本直久　片山達男　加藤　晃　加藤真司　加藤理文　金子健一　河合　修
篠ヶ谷路人　柴垣勇夫　柴田　稔　塚本和弘　中野晴久　羽二生保　萩原佳保里　孕石　晃　藤沢良祐
増山禎之　松井一明　（順不同・敬称略）

註

(1) 未報告であるが、柴垣勇夫氏、羽二生保氏、萩原佳保里氏にご教示いただいた。
(2) 島田市教育委員会他　1976『旗指古窯址群－一般国道1号島田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
(3) 小碗を伴う山茶碗の焼成が確認されている。松井一明氏の編年によれば、山茶碗Ⅰ－1期に位置付けられている。
（松井一明　1993「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究』静岡県考古学会）
(4) 前掲註(3)文献
(5) 河合　修　2001「青灰色のうつわ～榛原郡金谷町横岡字釜谷の灰釉系陶器について～」『研究紀要第8号』静岡県埋蔵文化財調査研究所
(6) 塚本和弘　1993「山王古窯跡群の成立と終末について」『地域と考古学』向坂鋼二還暦記念論文集
皿山古窯跡群の遺物については塚本和弘氏の御配慮により実見させていただいた。
(7) 後藤健一　1991「4．湖西古窯跡の調査例」『山口第17地点古窯跡発掘調査報告書』湖西市教育委員会
(8) 島田市教育委員会　2002「山王前遺跡」
「段付山皿」については島田市博物館ならびに篠ヶ谷路人氏の御配慮により実見させていただいた。
(9) 前掲註(3)文献
松井氏の分類でいう皿山古窯跡群小皿Ｂ－1類、清ヶ谷古窯跡群小皿Ｂ－1類、湖西古窯跡群小皿Ｃ－1類を対比させている。
(10) 尾野善裕　1992「モデルとコピーからみた古瀬戸と中国陶磁－古瀬戸成立期（12･13世紀）の様相」『貿易陶磁研究No.12』
(11) 前掲註(5)文献
(12) 鈴谷昌彦　1985「旗指古窯を中心とした灰釉陶器生産の終末、山茶碗の生産年代とその流通過程について」『山ノ谷遺跡』島田市教育委員会
松井一明　前掲註(3)文献
河合　修　前掲註(5)文献
(13)『静岡県史資料編4古代』1907
(14) 戸田芳美　1977「中世とはどういう時代か　中世前期」『世界陶磁全集3日本中世』小学館
(15) 足立順二　1982「中世陶器生産と消費・序説」『東笊子ＨＫ第27地点遺跡発掘調査報告書』湖西市教育委員会
(16) 湖西市教育委員会　1992『大知波峠廃寺Ⅲ』
(17) 藤沢良祐　1995「土に生きる「職人」－東海の山茶碗生産者について」『中世の風景を読む3』新人物往来社
(18)『群書類従』巻三百三十
(19) 藤沢良祐　1994「山茶碗研究の現状と課題」『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』第3号

付編Ⅰ

すやん沢４～８号窯の調査について

平野吾郎・河合　修

第１節　遺跡の発見と調査の経緯

遺跡の発見　43年４月、金谷町担当の県文化財調査員であった後藤武蔵氏から当時島田市初倉に在住していた山村宏氏のもとへ「金谷町横岡で窯が壊され遺物が出土している」との連絡があった。山村氏から連絡を受けた筆者が島田商業高等学校の社会部の生徒を同行して、現地に赴いたところ、県道工事によって丘陵の先端部が削られ、法面に窯跡の断面が何カ所かで見つかった。

工事は主要地方道金谷－中川根線の改良のため、昭和42年度事業として行われたもので、現地はすでに工事が完了しており、それ以上の改変はないことから、県島田土木事務所としては「現地調査等への対応は難しい」とのことであった。従って、この地域で考古学の研究を続けていた遠江考古学研究会のメンバーとも相談し、緊急措置として、窯の基数の確認、散乱している遺物の採集など当面できる範囲の措置をとり、資料の保全に努める事にした。

現地調査　現地の観察によって、法面に窯跡は５基発見されており、位置も法面の比較的高い位置で確認された。道の反対側（南側）の斜面には灰原の上に工事の土が大きく押し出されており、その中から法面に現れている窯の位置に対応するように多くの遺物の存在が確認出来た。現地調査は４月・５月の日曜日を当てることにし、窯の残存状態を確認するために窯本体の発掘調査を行うことにした。しかし、上のミカン畑に影響を及ぼさないようにするために、発掘は法面の中だけにとどめることになった。このため窯跡の断面と焼成室の床面の一部を検出するに止まった。しかし、７号窯では焼成室の床が比較的大きく発掘出来たため、床に詰め台が並んで居るのが観察できた。窯跡の間隔が比較的大きくあいており、灰原の遺物はかなりまでは各窯に対応していると推定出来たので、出来るだけ各窯の資料として纏めて採集することにした。

資料整理　現地調査が終了した段階で、採集した遺物を島田商業高等学校に持ち帰り、社会部の生徒の協力を得て、水洗・注記などの基礎的な作業を行った。しかし、基礎作業が終わった段階で、筆者の転勤など様々要因で、継続して整理・検討が出来なくなったので、一旦作業を中断することにして、資料を島田市教育委員会（博物館）で保管してもらうことになった。その後、諸般の事情で、整理・報告が出来なくなったままでいたが、今回同じすやん沢古窯の一部が発掘調査されることになり、その参考資料として取り上げてもらうことになって、資料が日の目を見ることが出来た。先年山村宏氏が若くして仏故された事もあって、写真・現地調査図面などが十分提示出来なかったが、なにはともあれ現地調査に関係した一人として、資料が日の目を見ることを喜びたい。

当時の発掘調査の多くがそうであったが、この調査も全て手弁当で、勤務の休みを使ってのものであった。従前のなりゆきから、この項を私が担当したが、調査の担当者は山村宏氏であったし、現地調査には向坂鋼二氏・植松章八氏・大崎辰夫氏・池田純氏・後藤武蔵氏など遠江考古学研究会の会員諸氏が参加してくれた。また資料の採集・整理に参加してくれた島田商業高等学校の生徒達と資料の保管に意を注いでくれた滝谷昌彦氏の名を記してこの稿を閉じることにする。（平野）

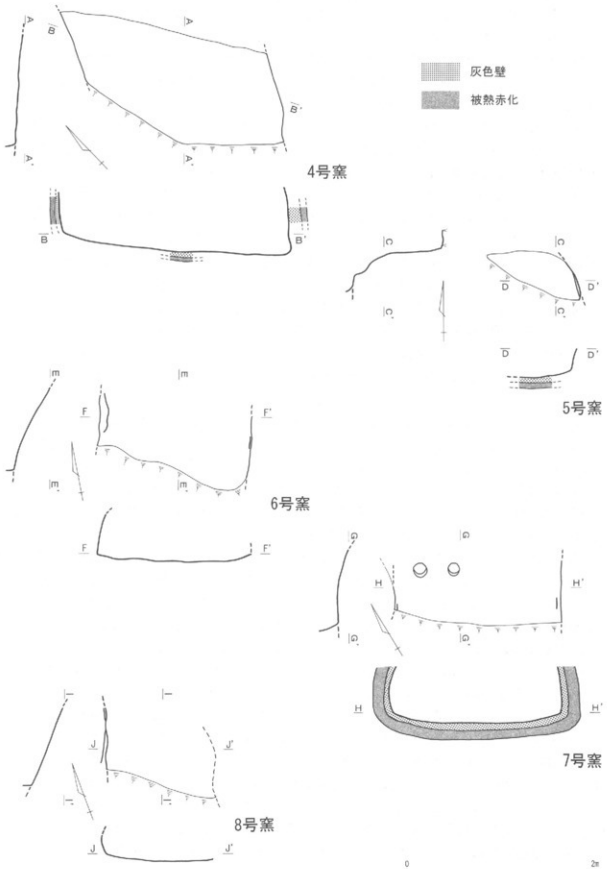
（付遍１） 第１図　すやん沢４～８号窯遺構全体図

第２節　遺構の状況と出土遺物

各窯の概要　窯は西側から４～８号窯と名付けられている。いずれも焚口を南向きに開口させるが、５号窯は主軸をやや東に、４・６～８号窯はやや西に振っている。これらの微妙な差は、元来あった微地形に左右されるものなのだろう。いずれの窯も焚口周辺の元地形から焼成室にかけては道路工事によって失われてしまっているが、焼成室の一部から煙道にかけてはいまだに残存している可能性が高い。

４号窯の状況と出土遺物　幅2.5m、長さ1.2m、窯壁高さ0.7mを測る窯体の一部が検出されている。床面がほぼ平らであることから、燃焼室に程近い焼成室の一部分と推測される。床から壁にかけては６～14cmの厚みで灰色に還元した状況で焼けしまり、更に外側に厚さ８cm前後で赤化した熱のしみが把握されている。

窯体内の床面上からは山茶椀（１～10）・小皿（29～34）が出土している。山茶椀は口径14.6～16.5cmと２cm近い差があるが、最も多いのは16cm前後である。器高も4.7～5.6cmと１cm近い差があるが5.0～5.2cmが最も多くなっている。高台のつぶれは３が著しいがそのほかは断面三角形状を呈し、余り差がうかがえない。体部の形状は下半で緩い稜をもち、口縁部までを直線状に挽き出す１・４・９と全体的に丸く仕上げるものに大別できる。量的には後者が多く、前者はやや古手の様相を残すものと理解できる。小皿はいずれも体部中ほどに稜を伴って、体部を２段に挽き出すものである。34の器高が2.1cmとやや高いのみで他はほぼ同形態である。灰原から採取されている遺物は山茶椀・片口椀・無高台椀・片口鉢・小皿である。山茶椀は床面上出土遺物と概ね同形態であるが、大振りで外面が直立する高台を持つ14はさかのぼってⅡ期に位置付けられるだろう。小皿についても床面上出土遺物と概ね同形態である



（付遍1） 第2図　すやん沢4～8号窯実測図

が、特に偏平となる58・64などは、小ぶりな無高台椀27とともにⅢ期－３の所産と考えられる。片口鉢66は口唇部を鋭利に挽き出している。７号窯床面出土の片口鉢135～137にみると、この時期の鉢の口唇部は丸く処理されるものと理解できる。これもⅡ期の所産と考えられる。

５号窯の状況と出土遺物　床面から窯壁にかけての一部が検出されたに留まる。床では６cm程度の厚みで灰色に還元した床面、更に外側に厚さ６cm前後で赤化した熱のしみが把握されている。検出された床面が狭かったため、床面からの遺物は得られていない。

灰原から採取されている遺物は山茶椀・無高台椀・小皿である。山茶椀は点数が少ないが、４号窯の椀に比べて器高がやや高くなるようである。無高台椀69はやや小振りであり、Ⅲ期－２以降と考えたい。

６号窯の状況と出土遺物　幅1.7m、長さ0.8m、窯壁高さ0.5mを測る窯体の一部が検出されている。床面は南側がやや平坦で北側に向かって50％ほどの傾斜をもつに至っていることから、焼成室の中ほどと推測される。窯壁の状況については記録がないが、恐らく他の窯と同様であったろうと推測される。

この窯に伴う遺物は少なく、窯体内から出土したとされる山茶椀２点（84・85）・小皿２点（87・88）、灰原出土の小皿４点（89～92）のみである。山茶椀は体部に丸みをもつもので、他の窯に伴うものに大差ない。小皿については４号窯よりも器高が高く、むしろ５号窯や後述する７号窯に類似する。

７号窯の状況と出土遺物　５基の中で４号窯とともに最も状況がよく把握できる窯である。幅1.85m、長さ0.75m、窯壁高さ0.6mを測る窯体の一部が検出されている。床面は検出範囲の中程までがほぼ平らで、奥に向かうにしたがって次第に傾斜がついてくるため、焼成室の中心あたりと推測される。床から壁にかけては10cm前後の厚みで灰色に還元した状況で焼けしまり、更に外側に厚さ12cm前後で熱がしみて赤化している。

窯体内の床面上からは山茶椀（93～122）・小皿（123～132）・片口鉢（135～137）が出土している。山茶椀は口径15.2～17.6cmと２cm以上の差がみられるが、多くは16cm台である。器高についても4.6～6.3cmと１cm以上の差があるが５cm台中～後半が最も多くなっている。４号窯の山茶椀に比べると全体的にやや大振りである。高台はいずれも断面三角形状で、ややつぶれながら外側に開いている。体部の形状は下半で緩い稜をもち、口唇部までを直線状に挽き出す94～98・100・103～106・114・116と全体的に丸く仕上げるものに大別できる。量的には後者がやや多い。小皿は体部中ほどに稜を伴って、体部を２段に挽き出すものである。器高はいずれも２cm台であり山茶椀と同様、４号窯の製品に比べやや大振りである。片口鉢（135～137）は体部を比較的直線状に挽き出したうえ、口唇部を丸く処理している。高台は矩形となる。灰原から採取されている遺物は小皿２点で、床面出土のものと同形態である。

８号窯の状況と出土遺物　幅1.2m、長さ0.7m、窯壁高さ0.2mを測る窯体の一部が検出されている。床面は北側に向かって40％ほどで均一に下る傾斜をもっていることから、焼成室の中ほどと推測される。窯壁の状況については記録がないが、恐らく４・５・７号窯と同様であったろうと推測される。

この窯に伴う遺物は少なく、窯体床面・窯内から出土した遺物は山茶椀１点（138）・小皿４点（155～158）である。山茶椀は体部下半で緩い稜をもって口縁部までを直線状に挽き出すものである。小皿155・156は口径の割りに底径がやや大きいために、体部が内湾するように見うけられ特徴的である。灰原出土遺物は山茶椀（139～153）・片口椀（154）・小皿（159～170）である。山茶椀139～141・143・147は138と同様な形態である。他は体部から口縁部までを丸く球胴形に仕上げるものである。これらの中には140～142・145・151など器高が４cm台になるものがある。片口椀154は４号窯出土の28よりやや大振りとなる。小皿は比較的直線状に挽き出す、５～７号窯にも一般的に見られる形態である。

地表面で採集された遺物　山茶椀・小皿・片口鉢（171～173）等が出土している。山茶椀・小皿については他の窯にみられる形態に類するため、図化を省略した。片口鉢171は口唇部をやや鋭利に挽き出している。172・173は底部片であるが、高台を断面三角形状に整え、緩やかな開きを保ちながら体部に

至っている。口唇部を丸く仕上げる135・136や断面矩形の高台をもち、急にたちあがる137より古い要素を備えることからⅡ期に位置付けられる。

遺物の特徴　以上に4～8号窯の概要を順にみてきた。いずれの窯も今回調査が行われた9号窯・10号窯と同様に、若干の鉢を焼くほかは、山茶椀・小皿の専焼窯として捉えられることが明らかになった。

山茶椀の形態については、体部下半で緩い稜をもって口縁部までを直線状に挽き出すもの（本文中のB類）と体部から口縁部までを丸く球胴形に仕上げるもの（同A類）が存在する。前者は灰釉陶器椀の中に見られる特徴をおぼろげながらも留めるものであり、後者はⅡ期に発生して次第に定着化するものと考えている。よって、ほぼ同様な法量の元に存在する場合は、両者は必ずしも直接時期差を示すものではなく、むしろ同時期にある新旧の要素として捉えるほうが適当と理解できる。法量的には器高4cm台がある程度あらわれる8号窯・4号窯が5～7号窯に比べ、新しく位置付けられる。

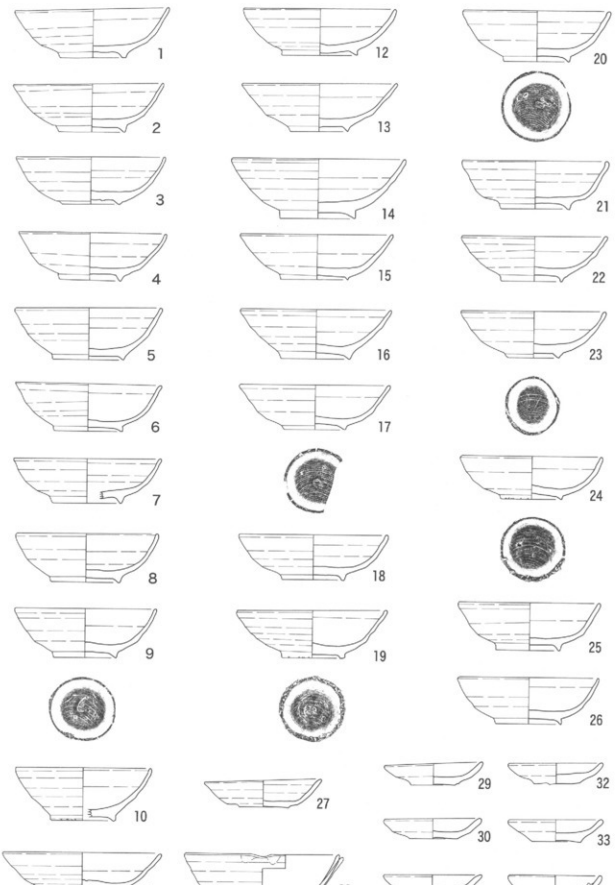
小皿についても、4号窯に伴うものが全体的により小振りとなり、5～8号窯より新しいことが伺える。5～8号窯の小皿は体部を比較的高く2段にわたって挽き出し、口縁部をやや内湾気味に仕上げることが特徴である。

以上のように、5～7号窯の遺物はほとんど差異が認められないため、Ⅲ期－1前半の近似した時期幅に収まるものと考えられる。更に、山茶椀のみがやや小振りになる8号窯、山茶椀が全体的に小振りになり小皿も扁平化する4号窯の順で、5～7号窯に遅れるⅢ期－1後半に築かれたものと位置づけられる。

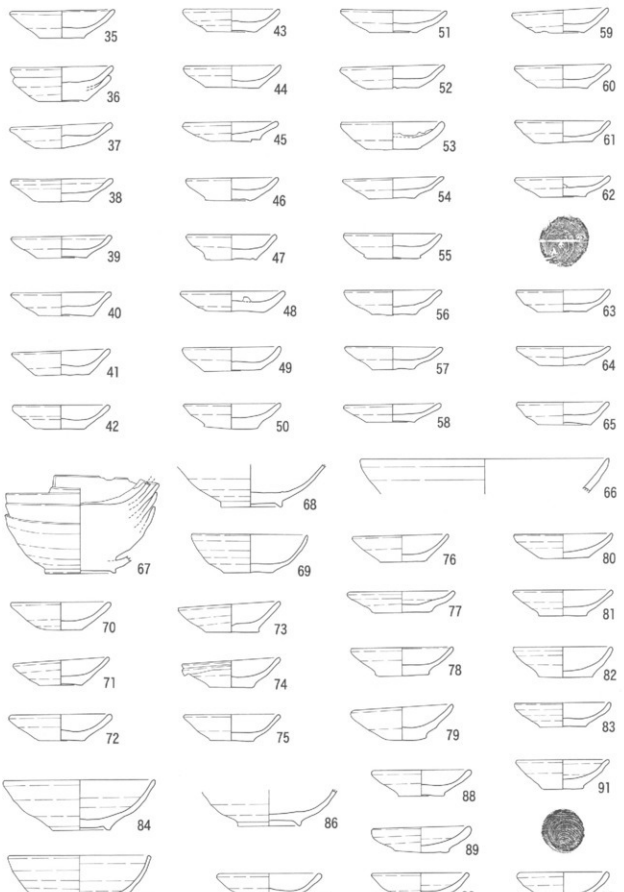
窯のうごき　南向き斜面で把握されている5基の窯のうち、5～7号窯はそれぞれ概ね9mの間隔で並行しているため、前庭部に充分な作業スペースを確保するなど、相方が有機的に築かれていると観取できる。一方、4号窯は5号窯の西側にやや焚口を西に振って築かれ、8号窯も7号窯の東側にやや焚口を西に振って築かれる。つまり、この2基はグループとみなされる5～7号窯の外側に振り分けられるように造られている。当地域では、9・10号窯の調査でも明らかなように、窯は焼き物の原料にもなる粘土中に多くの部分が築かれている。4～8号窯の並びにも同様に堆積しているのならば、5～7号窯の間に新たに単独の窯を築いても耐久性を充分期待できる。あえて新しい箇所に窯を構築することは、その窯ごとの必要に見合った広さの前庭部を設けることや、操業するにしたがって随時焼け狐ねや灰・炭など不要品が多量に発生することを予測した結果生じることなのだろう。逆の見方をすれば、窯の廃棄は天井や壁の崩壊など窯自体が機能不全に陥った場合だけではなく、前庭部や灰原が機能しなくなった場合にも起こりうるといえる。このような見方と遺物の形態差を鑑みれば、8号窯は5～7号窯に替るものとして、これらに直後の時期に築かれたと考えられる。更に4号窯は8号窯の時期を経て、5～7号窯からの一連の生産機能が再構築される過程で、丘陵内の空閑地を求めて分散して築かれた1基と考えることが可能である。今回調査された9・10号窯もこのような経過のなかに位置付ければ、東側斜面に単独で存在しても一向に不思議ではなかろう。

さて、8号窯以東の南向き斜面では窯の存在は明らかでない。4号窯以西は、堀田美櫻男氏の報告を読み解けば、焚口を南西～西にもつ窯9基、南東～東にもつ窯12基を想定できる（本文第1章参照）。大井川鉄道によって掘り割られているこの部分が当初からすべて南向き斜面であれば、左右の法面に窯が出現するはずがない。現在では鉄道のほか、茶畑に改変されて痕跡を見つけることは困難であるが、おそらくこの部分には南に開口する谷があったのだろう。4号窯の主軸方向が南西向きに振れていることや、大井川鉄道西側法面で遺物が採集されることが傍証になるだろう。ただし、大井川鉄道西側法面で採集された遺物の中には、Ⅲ期－1に当たる遺物のほかに、更に古く位置づけられるものも見られる。あるいは、4号窯は谷の中にすでに築かれていた一群と5～7号窯の隙間に上手に割り込んでいるのかもしれない。

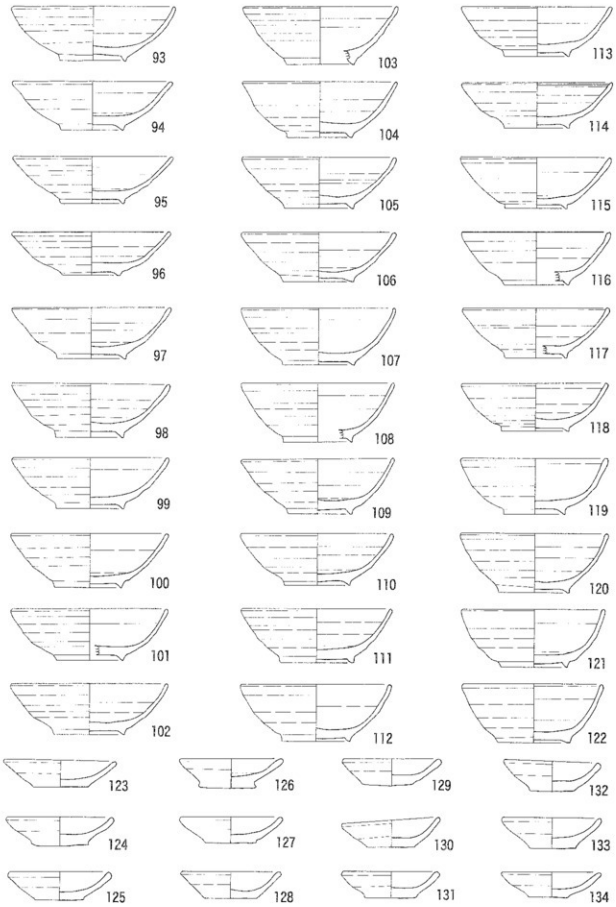
（河合）



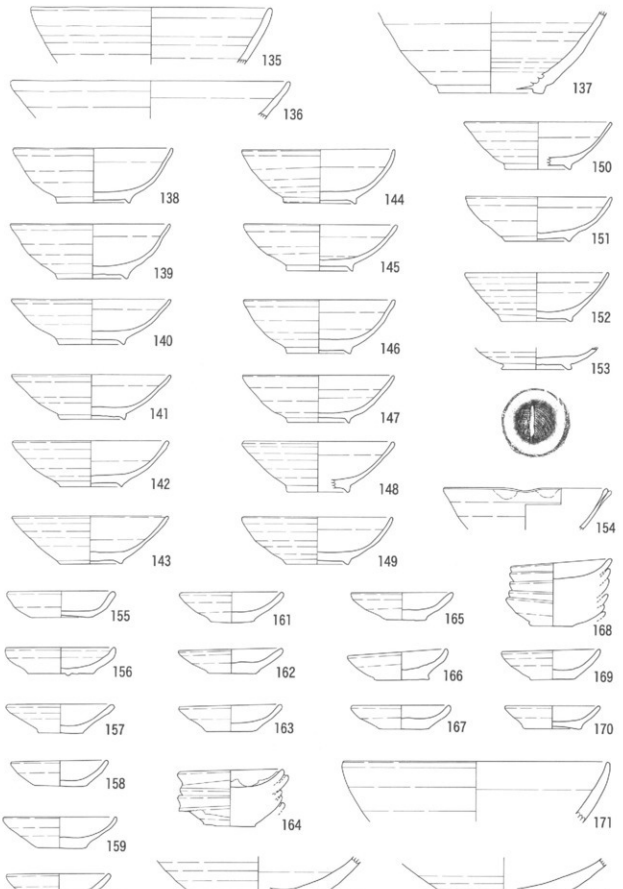
（付編１）第３図　４号窯出土遺物実測図（椀・鉢＝1/4　小皿＝1/3）



（付編１）第４図　４・５・６号窯出土遺物実測図（椀・鉢＝1/4　小皿＝1/3）



（付編１）第５図　７号窯出土遺物実測図（椀・鉢＝1/4　小皿＝1/3）



（付編１）第６図　７・８号窯出土遺物および表採遺物実測図（椀・鉢＝1/4　小皿＝1/3）

（付編１）第１表　４～８号窯出土遺物一覧

遺物番号	窯番号	層位等	器種	法量(cm) 口径	器高	底径(高台径)	色調	備考
1	4	床面	椀	16.5	5.1	7.1	黄灰色	スノコ痕、焼成やや不良
2	4	床面	椀	16.2	5.1	7.1	にぶい橙色	スノコ痕、焼成やや不良
3	4	床面	椀	(16.0)	5.0	(6.2)	青灰色	スノコ痕
4	4	床面	椀	15.9	5.1	6.6	灰黄色	スノコ痕
5	4	床面	椀	(15.8)	5.5	7.6	にぶい黄橙色	焼成やや不良
6	4	床面	椀	15.7	5.0	7.4	灰黄褐色	モミ殻痕
7	4	床面	椀	(15.8)	4.7	(7.4)	黄灰色	スノコ痕
8	4	床面	椀	(15.3)	5.2	7.4	にぶい赤褐色	スノコ痕、焼成やや不良
9	4	床面	椀	(15.2)	5.2	6.7	黄灰色	スノコ痕、底部外面にヘラ記号？あり
10	4	床面	椀	(14.6)	5.6	(7.0)	にぶい黄橙色	モミ殻痕、焼成やや不良
11	4	灰原２層	椀	(17.0)	4.5	6.3	灰色	スノコ痕
12	4	灰原２層	椀	(16.4)	4.9	(8.0)	灰白色	内面全体に自然釉付着、スノコ痕
13	4	灰原４層	椀	(16.6)	5.1	6.2	灰色	スノコ痕
14	4	灰原６層	椀	(18.6)	6.4	8.0	青灰色	スノコ痕
15	4	灰原６層	椀	(16.4)	4.8	7.2	褐灰色	スノコ痕
16	4	灰原６層	椀	(16.2)	5.2	7.4	灰黄色	スノコ痕、焼成やや不良
17	4	灰原６層	椀	(16.2)	4.7	6.6	灰色	スノコ痕、底部外面にヘラ記号？あり
18	4	灰原６層	椀	(16.0)	4.7	6.7	オリーブ灰色	スノコ痕
19	4	灰原６層	椀	16.1	5.0	6.7	灰色	モミ殻痕
20	4	灰原６層	椀	(15.8)	5.5	7.1	暗黄灰色	スノコ痕、底部外面にヘラ記号？あり
21	4	灰原６層	椀	(15.8)	5.1	7.5	灰黄褐色	スノコ痕、焼成やや不良
22	4	灰原６層	椀	15.7	4.8	6.6	褐灰色	スノコ痕
23	4	灰原６層	椀	(15.6)	4.9	5.4	灰色	底部内外面に放状沈線文、スノコ痕、高台の作り雑
24	4	灰原６層	椀	(15.4)	4.5	6.6	灰色	モミ殻痕
25	4	灰原６層	椀	15.3	5.1	6.8	灰色	スノコ痕、ロクロ痕？
26	4	灰原６層	椀	(15.2)	5.0	7.1	灰黄色	スノコ痕
27	4	灰原６層	椀	12.6	2.8	5.3	灰色	内面全体に自然釉付着、無高台
28	4	灰原６層	片口椀	(16.6)	(4.0)	—	灰色	
29	4	床面	小皿	7.8	1.8	3.7	暗緑灰色	
30	4	床面	小皿	7.7	1.7	4.0	灰色	内面全体に自然釉付着
31	4	床面	小皿	7.8	1.8	4.2	灰色	
32	4	床面	小皿	7.6	1.7	3.6	灰色	内面全体に自然釉付着
33	4	床面	小皿	7.6	1.8	4.1	灰色	
34	4	床面	小皿	7.5	2.1	4.0	灰色	内面全体に自然釉付着
35	4	灰原２層	小皿	8.3	2.2	3.5	灰白色	
36	4	灰原２層	小皿	8.1	2.8	3.9	灰白色	２枚輪着
37	4	灰原２層	小皿	8.1	1.9	3.8	灰白色	
38	4	灰原２層	小皿	8.0	1.8	4.4	灰白色	
39	4	灰原２層	小皿	8.0	1.8	3.9	灰白色	
40	4	灰原２層	小皿	7.9	1.9	4.4	灰白色	
41	4	灰原２層	小皿	7.8	1.9	4.1	灰色	
42	4	灰原２層	小皿	7.8	1.9	4.0	灰色	
43	4	灰原２層	小皿	7.7	1.9	4.0	灰色	
44	4	灰原２層	小皿	7.7	1.8	4.4	灰色	
45	4	灰原２層	小皿	7.6	1.6	4.2	灰白色	内面全体に自然釉付着
46	4	灰原２層	小皿	7.4	1.8	4.0	灰色	
47	4	灰原２層	小皿	7.2	2.0	4.1	灰白色	内面全体に自然釉付着
48	4	灰原３層	小皿	8.4	1.6	4.3	灰色	内面全体に自然釉付着
49	4	灰原３層	小皿	7.8	2.0	4.6	灰色	
50	4	灰原３層	小皿	7.7	2.1	4.2	灰白色	
51	4	灰原６層	小皿	8.4	1.8	3.8	灰色	内面全体に自然釉付着
52	4	灰原６層	小皿	8.3	1.8	4.3	灰色	
53	4	灰原６層	小皿	8.3	2.3	4.4	灰白色	内面全体に自然釉付着
54	4	灰原６層	小皿	8.0	1.7	3.8	灰色	内面全体に自然釉付着
55	4	灰原６層	小皿	7.8	2.0	4.5	灰白色	
56	4	灰原６層	小皿	7.8	2.0	3.6	灰色	
57	4	灰原６層	小皿	7.8	1.9	3.4	灰色	
58	4	灰原６層	小皿	7.8	1.7	3.9	青灰色	内面全体に自然釉付着

遺物番号	第 番号	層位等	器種	法量(cm) 口径	器高	基底(高台径)	色調	備考
59	4	灰原6層	小皿	7.7	1.9	3.9	灰色	内面全体に自然釉付着
60	4	灰原6層	小皿	7.7	1.8	4.0	灰色	
61	4	灰原6層	小皿	7.6	1.8	4.5	灰色	内面歪曲
62	4	灰原6層	小皿	7.6	1.6	3.6	灰色	内面全体に自然釉付着、底部外面に圧痕あり
63	4	灰原6層	小皿	7.5	1.8	3.8	灰色	
64	4	灰原6層	小皿	7.5	1.5	3.6	黒灰色	内面全体に自然釉付着、底部外面にスノコ痕
65	4	灰原6層	小皿	7.4	1.8	4.2	灰色	
66	4	灰原5層	鉢	(26.6)	(3.6)	−	灰色	
67	5	灰原3層	椀	16.0	(5.8)	7.7	灰白色	5枚釉着、スノコ痕
68	5	灰原4層	椀	−	(4.5)	6.6	灰白色	スノコ痕
69	5	灰原	椀	(12.5)	4.0	5.3	灰色	黒斑有
70	5	灰原3層	小皿	8.0	2.3	3.5	灰白色	内面全体に自然釉付着
71	5	灰原3層	小皿	7.7	2.0	3.6	灰色	内面全体に自然釉付着
72	5	灰原4層	小皿	(8.3)	2.1	3.8	灰色	
73	5	灰原4層	小皿	8.2	2.2	4.3	灰色	
74	5	灰原4層	小皿	7.9	2.2	3.5	灰色	内面全体に自然釉付着
75	5	灰原4層	小皿	(7.7)	2.2	3.5	灰黄色	
76	5	灰原4層	小皿	7.7	2.1	3.8	灰色	
77	5	灰原5層	小皿	8.7	1.7	4.9	灰色	内面全体に自然釉付着
78	5	灰原6層	小皿	(8.3)	2.3	4.3	灰色	
79	5	灰原6層	小皿	8.2	2.6	3.3	黄灰色	割れ口まで全面に自然釉付着
80	5	灰原6層	小皿	(8.0)	1.9	4.1	灰色	
81	5	灰原6層	小皿	(8.0)	2.1	(3.9)	灰色	
82	5	灰原	小皿	(8.0)	2.5	4.3	灰色	底部外面にスノコ板
83	5	灰原6層	小皿	(7.8)	1.9	(3.7)	灰白色	
84	6	窯内?レキ層	椀	(16.2)	5.3	6.1	灰色	スノコ痕
85	6	窯内?レキ層	椀	(15.2)	5.6	7.2	灰色	スノコ痕
86	6	灰原3層	椀	−	(3.9)	6.7	灰青灰色	スノコ痕
87	6	窯内?B層	小皿	8.4	2.3	3.9	灰黄色	内面全体に自然釉付着
88	6	窯内?B層	小皿	(8.0)	2.0	(3.7)	灰色	
89	6	灰原3層	小皿	8.0	2.1	4.3	灰色	
90	6	灰原3層	小皿	7.9	2.1	3.8	灰白色	
91	6	灰原3層	小皿	7.5	2.4	3.4	灰黄色	スノコ痕
92	6	灰原5層	小皿	7.4	2.5	3.5	灰黄色	内面全体に自然釉付着
93	7	床面	椀	(17.6)	5.7	7.0	灰色	スノコ痕
94	7	床面	椀	(17.2)	5.2	6.6	灰色	
95	7	床面	椀	(17.2)	5.0	6.7	灰色	スノコ痕
96	7	床面	椀	(17.0)	4.6	6.2	灰色	スノコ痕
97	7	床面	椀	(17.0)	5.4	7.3	灰色	スノコ痕
98	7	床面	椀	16.9	5.7	7.3	灰オリーブ色	スノコ痕
99	7	床面	椀	(16.8)	5.4	7.2	灰色	スノコ痕
100	7	床面	椀	16.8	5.9	7.1	灰色	スノコ痕
101	7	床面?	椀	(16.8)	5.5	(7.0)	黄灰色	スノコ痕
102	7	床面	椀	(16.8)	5.4	7.5	灰色	スノコ痕
103	7	床面	椀	(16.6)	6.1	(7.2)	灰黄色	焼成やや不良
104	7	床面	椀	(16.6)	5.9	6.9	灰色	スノコ痕
105	7	床面	椀	(16.6)	5.5	7.4	灰オリーブ色	スノコ痕
106	7	床面	椀	(16.6)	5.3	7.6	黄灰色	スノコ痕、焼成やや不良
107	7	床面	椀	(16.5)	6.0	7.7	黄灰色	スノコ痕?
108	7	床面	椀	(16.4)	6.2	(7.4)	灰褐色	スノコ痕
109	7	床面	椀	16.4	5.8	6.9	灰色	スノコ痕
110	7	床面	椀	(16.4)	5.5	7.0	灰色	スノコ痕
111	7	床面	椀	(16.2)	5.7	7.9	灰色	スノコ痕
112	7	床面	椀	(16.2)	6.1	7.3	淡黄色	スノコ痕、焼成やや不良
113	7	床面?	椀	(16.2)	5.3	7.0	灰色	スノコ痕
114	7	床面	椀	(16.2)	4.9	7.0	灰色	スノコ痕
115	7	床面	椀	(16.2)	5.5	(6.7)	灰色	スノコ痕
116	7	床面?	椀	(16.0)	5.6	(7.0)	灰色	スノコ痕

遺物番号	図版番号	層位等	器種	法量(cm) 口径	器高	底径(高台径)	色調	備考
117	7	床面	椀	(15.8)	5.3	(6.7)	灰黄色	スノコ痕
118	7	床面	椀	(15.8)	5.1	7.3	黄灰色	スノコ痕
119	7	床面	椀	(15.8)	5.9	6.6	灰オリーブ色	スノコ痕
120	7	床面	椀	(15.8)	6.3	7.6	灰白色	スノコ痕
121	7	床面	椀	(15.4)	6.3	7.1	灰色	スノコ痕
122	7	床面	椀	(15.2)	6.2	7.7	淡黄色	スノコ痕、焼成やや不良
123	7	床面?	小皿	9.0	2.1	4.4	灰色	
124	7	床面	小皿	8.6	2.3	4.5	灰色	
125	7	床面	小皿	8.2	2.3	3.9	灰色	
126	7	床面	小皿	8.2	2.3	4.5	灰色	
127	7	床面	小皿	8.2	2.1	4.1	灰色	内面全体に自然釉付着
128	7	床面?	小皿	(8.0)	2.1	4.2	灰色	
129	7	床面	小皿	7.9	2.1	4.1	灰色	
130	7	床面	小皿	7.8	2.1	3.8	灰色	内面全体に自然釉付着
131	7	床面	小皿	7.8	2.2	4.2	灰白色	
132	7	床面	小皿	7.8	2.3	3.6	灰色	内面全体に自然釉付着
133	7	灰原4層	小皿	8.0	2.4	3.7	灰色	
134	7	灰原4層	小皿	8.0	2.0	3.3	褐灰色	
135	7	床面	鉢	(28.0)	(6.0)	−	灰色	
136	7	床面	鉢	(30.0)	(4.0)	−	灰色	
137	7	床面	鉢	−	(8.7)	(11.0)	灰色	スノコ痕
138	8	床面	椀	(17.1)	5.8	7.8	にぶい橙色	焼成やや不良
139	8	灰原	椀	(17.0)	5.9	7.5	灰黄色	焼成やや不良
140	8	灰原	椀	(17.1)	4.9	7.1	灰色	スノコ痕
141	8	灰原	椀	(17.0)	4.8	7.1	灰色	スノコ痕
142	8	灰原	椀	(16.7)	4.9	6.6	灰赤色	スノコ痕
143	8	灰原	椀	(16.7)	5.2	6.7	橙色	焼成やや不良
144	8	灰原	椀	16.4	5.7	7.8	暗灰色	
145	8	灰原	椀	(16.4)	4.9	7.1	黄灰色	スノコ痕
146	8	灰原	椀	(16.2)	5.7	6.8	灰黄褐色	スノコ痕
147	8	灰原	椀	(16.2)	5.0	(6.7)	にぶい黄橙色	焼成やや不良
148	8	灰原	椀	(16.2)	5.5	(6.7)	にぶい橙色	焼成やや不良
149	8	灰原	椀	(16.1)	5.0	6.5	にぶい赤褐色	
150	8	灰原	椀	(15.9)	5.1	(7.1)	青灰色	スノコ痕
151	8	灰原	椀	(15.6)	4.8	7.0	暗青灰色	スノコ痕
152	8	灰原	椀	(15.4)	5.2	7.6	灰黄色	スノコ痕、焼成やや不良
153	8	灰原	椀	−	(2.4)	7.4	黄灰色	スノコ痕、底部外面に棒状の圧痕
154	8	灰原	片口椀	(17.6)	(4.6)	−	灰色	
155	8	床面	小皿	(8.6)	2.1	(5.1)	にぶい黄橙色	焼成やや不良
156	8	窯内?レキ層	小皿	(8.8)	2.1	(5.2)	灰オリーブ色	内外面に自然釉付着
157	8	窯内?レキ層	小皿	(8.6)	2.3	3.5	灰白色	
158	8	窯内?レキ層	小皿	7.8	2.0	4.3	灰黄色	
159	8	灰原	小皿	(9.0)	2.5	4.0	灰白色	
160	8	灰原	小皿	8.4	2.3	3.9	黄灰色	
161	8	灰原	小皿	8.4	2.5	3.5	灰白色	焼成やや不良
162	8	灰原	小皿	8.4	1.9	3.9	灰色	
163	8	灰原	小皿	8.2	2.1	4.2	灰白色	焼成やや不良
164	8	灰原	小皿	8.5	(2.4)	4.1	黄灰色	5枚釉着、最上部内面に自然釉付着
165	8	灰原	小皿	8.2	2.2	3.4	灰色	内面全体に自然釉付着
166	8	灰原	小皿	8.1	2.3	4.3	灰オリーブ色	内面全体に自然釉付着
167	8	灰原	小皿	8.0	2.0	4.1	灰色	
168	8	灰原	小皿	7.9	(2.1)	3.4	灰白色	6枚釉着
169	8	灰原	小皿	7.9	2.3	3.5	灰色	
170	8	灰原	小皿	(7.6)	1.9	4.6	灰色	
171	表採		鉢	(28.5)	(6.9)	−	灰色	
172	表採		鉢	−	(5.1)	(14.3)	灰色	
173	表採		鉢	−	(4.9)	(13.7)	灰色	

付編２

すやん沢９・10号窯出土炭化材の樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

１．はじめに

静岡県榛原郡金谷町に所在するすやん沢古窯跡から出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。すやん９・10号窯は13世紀前半頃に山茶碗を主に生産していた窯跡である。窯業の維持継続に必要な要因のひとつに、大量かつ継続的な燃料材の確保は重要であるが、これに関わる調査や情報は意外と少ない。燃料材にどのような樹種が選択され確保されていたのかを知るためにも古窯の炭化材樹種調査の蓄積は必要と思われ、今回の樹種調査は資料蓄積の一資料となる。

２．炭化材樹種同定の方法

まず炭化材を自然乾燥し、まず横断面（木口）を手で割り実体顕微鏡で分類群のおおよその目安をつけ、次に３方向の断面（横断面・接線断面・放射断面）を走査電子顕微鏡で拡大して材組織の観察を行ない同定した。走査電子顕微鏡用の試料は、３断面を５㎜角以下の大きさに整え、直径１cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子㈱製JSM－T100型）で観察と写真撮影を行った。

炭化材の残り試料は、㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所に保管されている。

３．結　果

２基の窯跡のうち、先行して操業していた９号窯の燃焼室から出土した炭化材（試料７）は、落葉広葉樹のクリであった。10号窯の焼成室から出土した５試料からは、針葉樹のモミ属と落葉広葉樹のクリ・ケヤキ・カエデ属が検出された（表１）。

10号窯の試料２と試料３にはクリの小破片が含まれていて、調査対象として取上げられた炭化材の周囲にあったクリの破片が混在したと思われる。このクリ破片以外は、放射方向（材の肥大成長する方向）の長さが８～17cmの大きな材であった。ほとんどが芯部を含まない破片なので、単純に倍にしても直径16～34cm以上の太い材の一部と推定される（表の備考欄参照）。

また試料２のケヤキは、直径約12cmの芯持ちの丸木で約50年輪が連続して数えられた。カエデ属・モミ属については、連続して年輪数は数えられなかった。クリも連続して年輪数を数えることができなかったが、年輪幅は３～５㎜で成長の良い材であった。

以下に同定根拠とした材組織の特徴を分類配列順に記載し、各分類群の３方向または特徴的な断面の走査電子顕微鏡写真を図版１に提示した。

モミ属　*Abies*　マツ科　図版１　１a－１c（試料4）

仮道管・放射柔細胞からなる針葉樹材。樹脂細胞・正常樹脂道・仮道管にらせん肥厚はない。早材から晩材への移行はゆるやか、放射柔細胞の接線壁に数珠状肥厚があり上下端の細胞はときに山形になる。分野壁孔は炭化材では孔口の大きさが不揃いで小型のスギ型が多い、１分野に１～４個、１分野内の配置はやや雑然としている。

モミ属は常緑高木で、暖帯から温帯下部の山地に普通に見られるモミ、温帯上部の高山に生育するウラジロモミ・シラベ・アオモリトドマツ、北海道の山地に生育するトドマツの５種があるが、材組織は類似しており種類は識別できない。

クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　ブナ科　図版１　２（試料７）

年輪の始めに中型～大型の管孔が配列し除々に径を減じてゆき、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状である。コナラ節には広放射組織がある点以外は、クリとコナラ節は類似性が高いが、肉眼や実体顕微鏡観察下でも広放射組織は認められなかった。

クリは、北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野や二次林に普通の落葉高木である。

ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 図版1 3a－3c（試料2）

年輪の始めに大型の管孔が1層配列し、その後は小型の管孔が多数集合して接線状・塊状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、小道管にらせん肥厚がある。放射組織は異性、1～5細胞幅、上下端や縁に大型の結晶細胞がある。

ケヤキは暖帯下部から温帯の山中や川岸に生育する落葉高木である。

カエデ属 *Acer* カエデ科 図版1 4a－4c（試料1）

小型の管孔が単独または2～3個が放射方向に複合し均一に散在する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔にらせん肥厚がある。放射組織は同性、1～5細胞幅、道管との壁孔は楕然とした交互状で孔口はやや大きい。

カエデ属は日本全上の暖帯から温帯の山地や谷間に生育し、約26種と多くの変種が知られている。

4．まとめ

13世紀前半頃の操業で山茶碗を生産していた当窯跡の炭化材からは、燃料材として針葉樹のモミ属と落葉広葉樹のクリ・ケヤキ・カエデ属が使用されていた事が判った。また、炭化材の横断面の形状や大きさから類推して、樹種を問わず直径16～34cm以上の太い材を分割して使用していたと推定される。新窯では5試料中の3試料からモミ属が検出された事から、モミ属が主要な燃料材であった可能性がある。

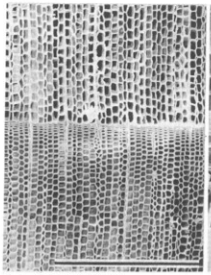
主に山茶碗を大量生産していた事で知られている愛知県瀬戸地区の中世窯やその他の同時期の窯跡では、マツ属複維管束亜属が主要燃料材であった窯跡が多い（山口・千野、1990、瀬戸市埋蔵文化財センター、2001、三好町教育委員会、2001a・2001bなど）。また、マツ属複維管束亜属と共に、コナラ節・クヌギ節・クリ・イヌシデ節・シイノキ属などの広葉樹材が検出される窯跡も多いが、試料数・量ともにこれらの広葉樹材の検出はマツ属複維管束亜属より圧倒的に少ない。そしてこれらの窯跡ではマツ属複維管束亜属も含め発掘された炭化材の太さは直径5cm前後かそれ以下のものが多い。また、静岡県西部の湖西窯跡群の炭化材調査でも、マツ属複維管束亜属（二葉松類とほぼ同義）は6世紀中葉～13世紀の窯跡から検出されていて、燃料材として利用されていたことが判る（山口・千野、1990）。これらの窯跡と比較すると、当窯跡の燃料材樹種構成は大きく異なっていた。当窯跡ではマツ属複維管束亜属やコナラ節・クヌギ節（ナラ類とほぼ同義）は検出されず、針葉樹ではモミ属が多く、広葉樹のカエデ属・ケヤキ・クリもモミ属と同様に大きな材が検出された。

このような燃料材の樹種構成や材の太さなどの違いは、比較資料が少ないこともあり不明であるが、窯跡周辺の植生の違いや、燃料材調達事情の違いなどを反映しているのではないだろうか。

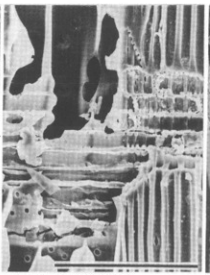
引用文献
山口慶一・千野裕道、1990、マツ林の形成および窯業へのマツ材の導入について、85－114、図版1－図版10、『研究論集 Ⅷ』、東京都埋蔵文化財センター。
瀬戸市埋蔵文化財センター、2001、『広久手18・20・30号窯跡』。
三好町教育委員会、2001a、『三好根浦特定土地区画整理事業内埋蔵文化財発掘調査報告書』。
三好町教育委員会、2001b、『北部伽総南工区笛和地内発掘調査報告書』。

（付編２）表１　すやん沢古窯跡出土炭化材樹種同定結果

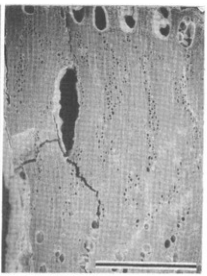
試　料	窯　跡	出土地点	用　途	樹　種	備　考 （放射方向×接線方向）	^{14}C試料No.
試料１	10号窯	燃焼室	燃料材	カエデ属	8.5×14cm	PLD－1682
試料２	10号窯	燃焼室	燃料材	ケヤキ	直径約12cm芯持ち丸木50年輪以上あり	
				クリ	小破片	
試料３	10号窯	燃焼室	燃料材	モミ属	幅８cm	PLD－1683
				クリ	破片	
試料４	10号窯	燃焼室	燃料材	モミ属	17×９cm	
試料５	10号窯	燃焼室	燃料材	モミ属	10×８cm	
試料６	９号窯	燃焼室	燃料材	クリ	８×10cm	PLD－1684



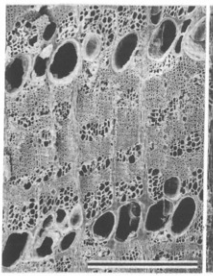
1a モミ属（横断面）
炭化物試料4　bar：0.5㎜



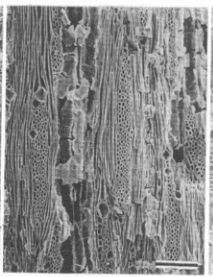
1b モミ属（放射断面）
炭化物試料4　bar：0.1㎜



2 クリ（横断面）
炭化物試料7　bar：1.0㎜

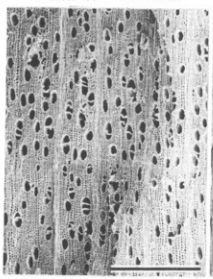


3a ケヤキ（横断面）
炭化物試料2　bar：0.5㎜

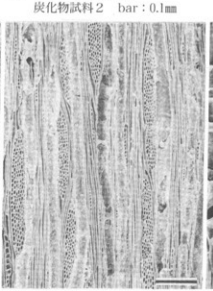


3b ケヤキ（接線断面）
炭化物試料2　bar：0.1㎜

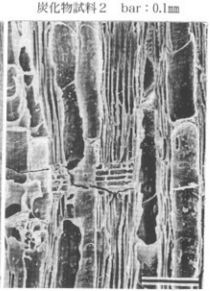
3c ケヤキ（放射断面）
炭化物試料2　bar：0.1㎜



4a カエデ属（横断面）
炭化物試料1　bar：0.5㎜



4b カエデ属（接線断面）
炭化物試料1　bar：0.1㎜



4c カエデ属（放射断面）
炭化物試料1　bar：0.1㎜

（付編2）図版1　すやん沢古窯出土炭化材樹種

付編３

すやん沢９・10号窯出土炭化材の放射性炭素年代測定

山形秀樹（パレオ・ラボ）

１．はじめに

すやん沢古窯跡より検出された炭化材の加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を実施した。

２．試料と方法

試料は、10号窯燃焼室から採取した炭化材（カエデ属）１点、同じく10号窯燃焼室から採取した炭化材（モミ属）１点、９号窯燃焼室から採取した炭化材（クリ）１点の併せて３点である。

これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨（グラファイト）に調整した後、加速器質量分析計（AMS）にて測定した。測定された^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した^{14}C濃度を用いて^{14}C年代を算出した。

３．結　果

表１に、各試料の同位体分別効果の補正値（基準値－25.0‰）、同位体分別効果による測定誤差を補正した^{14}C年代、^{14}C年代を暦年代に較正した年代を示す。

^{14}C年代値（yrBP）の算出は、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±1σ）は、計数値の標準偏差σに基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。これは、試料の^{14}C年代が、その^{14}C年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、および半減期の違い（^{14}Cの半減期5,730±40年）を較正し、より正確な年代を求めるために、^{14}C年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU－Th年代と^{14}C年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて^{14}C年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて^{14}C年代を暦年代に較正した年代を算出する。

^{14}C年代を暦年代に較正した年代の算出にCALIB4.3（CALIB3.0のバージョンアップ版）を使用した。なお、暦年代較正値は^{14}C年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、1σ暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその1σ暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。1σ暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

４．考　察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行なった。暦年代較正した1σ暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

引用文献
中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎.日本先史時代の^{14}C年代、p.3-20.
Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended ^{14}C Database and Revised CALIB3.0 ^{14}C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.
Stuiver,M., Reimer,P.J., Bard,E., Beck,J.W., Burr,G.S., Hughen,K.A., Kromer,B., McCormac,F.G., v.d. Plicht,J., and Spurk,M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

（付編３）表１　放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号（測定法）	試料データ	$\delta^{13}C_{PDB}$（‰）	^{14}C年代（yrBP±1σ）	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD−1682（AMS）	炭化材（カエデ属）試料１ 10号窯燃焼室	−25.1	1105±25	calAD905 calAD915 calAD965	calAD900−920（44.2%） calAD945−980（55.8%）
PLD−1683（AMS）	炭化材（モミ属）試料３ 10号窯燃焼室	−24.9	1205±25	calAD780 calAD790 calAD810	calAD790−830（54.4%） calAD840−870（40.5%）
PLD−1684（AMS）	炭化材（クリ）試料７ ９号窯燃焼室	−25.9	910±25	calAD1070 calAD1080 calAD1125 calAD1135 calAD1160	calAD1040−1095（62.7%） calAD1115−1140（27.1%） calAD1150−1160（10.2%）

写真図版

9・10号窯全景（北東より）

カラー図版2

9号窯分焔柱および焼成室遺物出土状況（北東より）

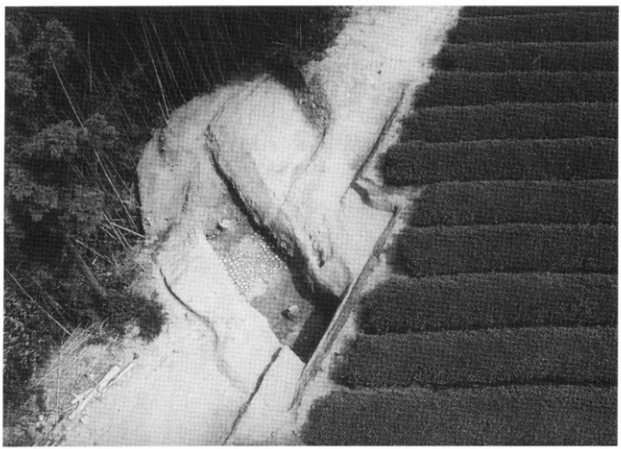
9号窯左側床面残存状況（北より）

9号窯右側床面残存状況（東より）

9号窯床面残存部断ち割り状況（北東より）

10号窯右側天井部残存状況（東より）

調査区遠景（南上空より）

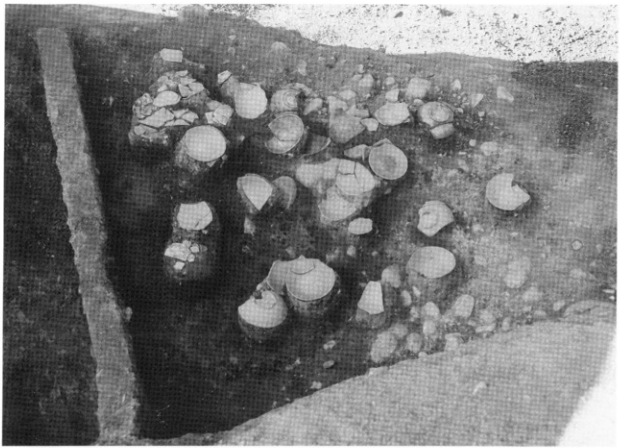


9・10号窯全景（西上空より）

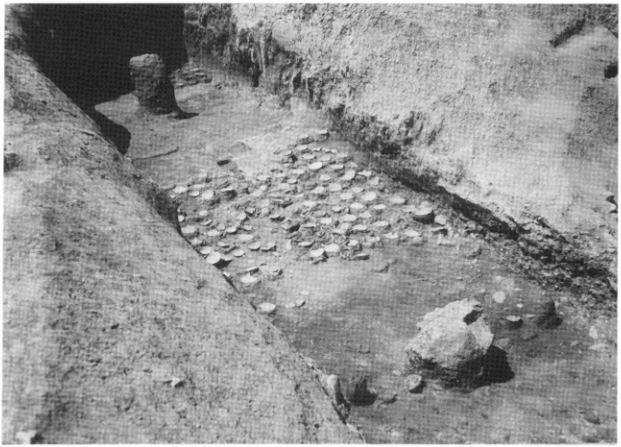
図版２

９号窯分焔柱付近遺物出土状況（西より）

９号窯前庭部遺物出土状況（西より）

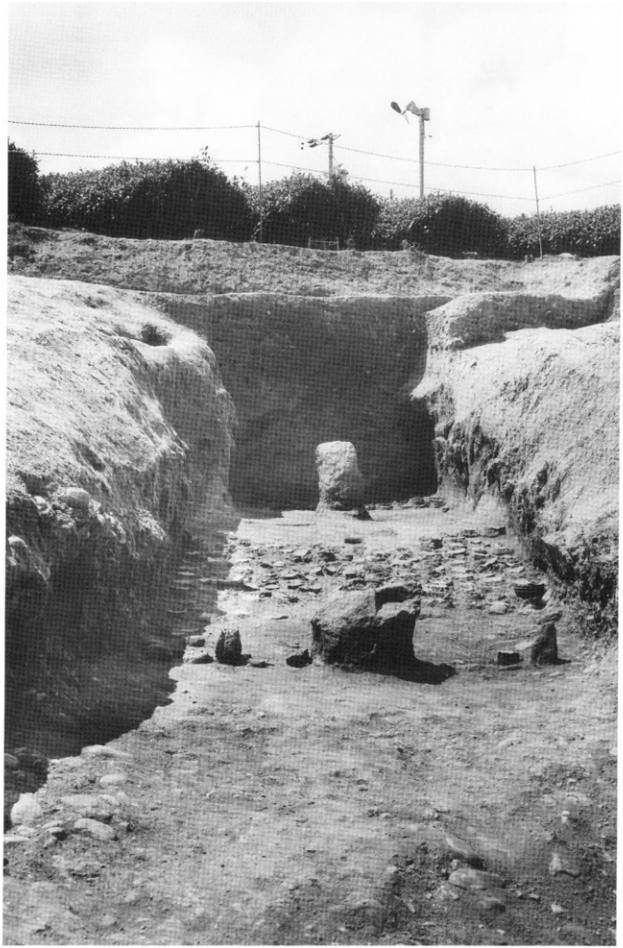


9号窯前庭部下層遺物出土状況（南東より）



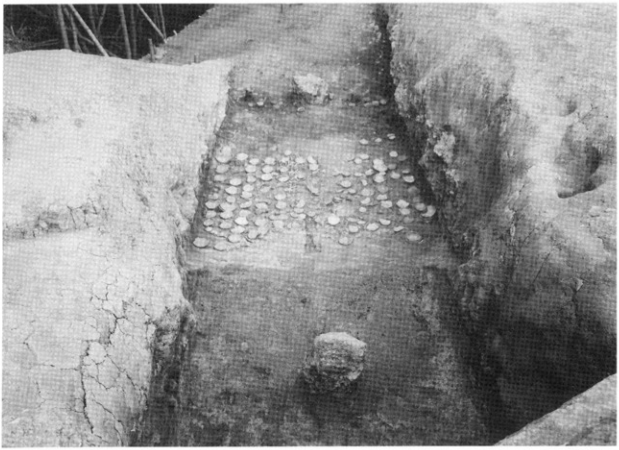
9号窯全景（東より）

図版４



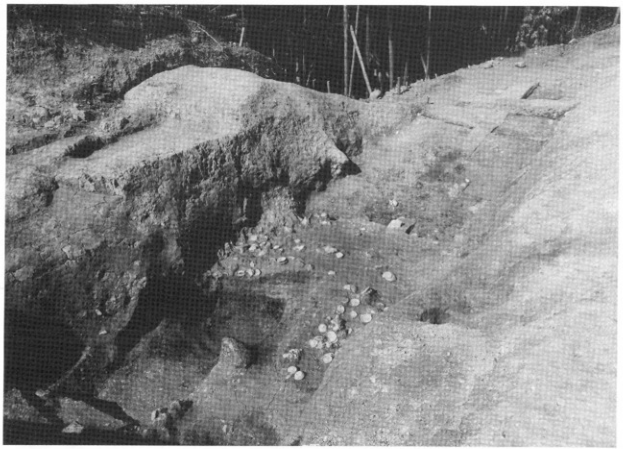
９・10号窯全景（北東より）

9号窯焼成室遺物出土状況（北東より）

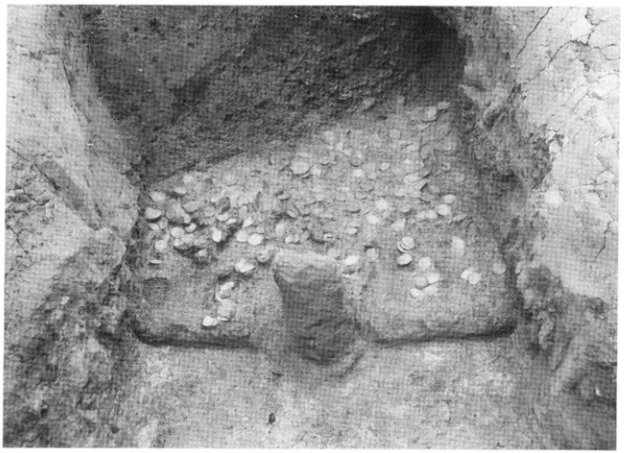


9号窯焼成室遺物出土状況（南西より）

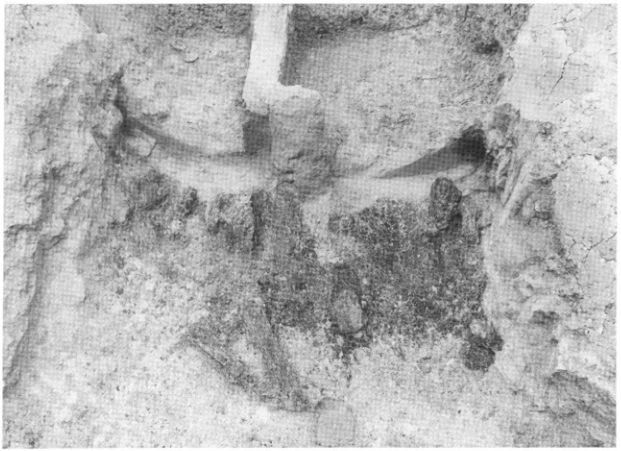
図版6



10号窯埋土遺物出土状況（南より）



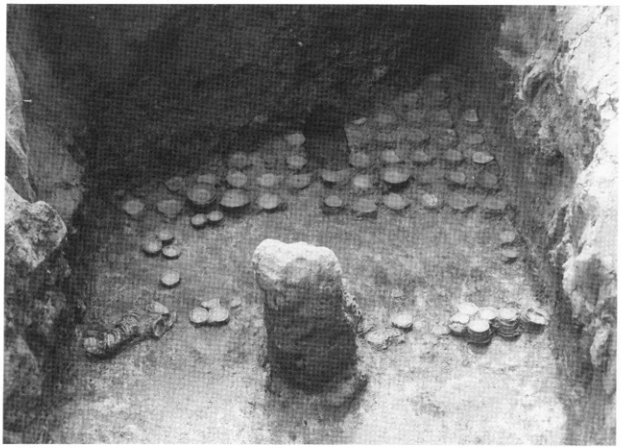
10号窯焼成室埋土遺物出土状況（北東より）



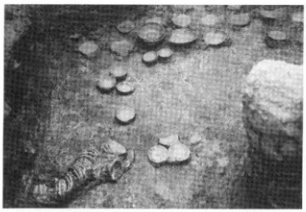
10号窯燃焼室炭化材出土状況（北東より）

10号窯焼成室遺物出土状況（北東より）

図版8

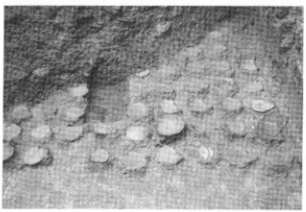


10号窯焼成室遺物出土状況（北東より）



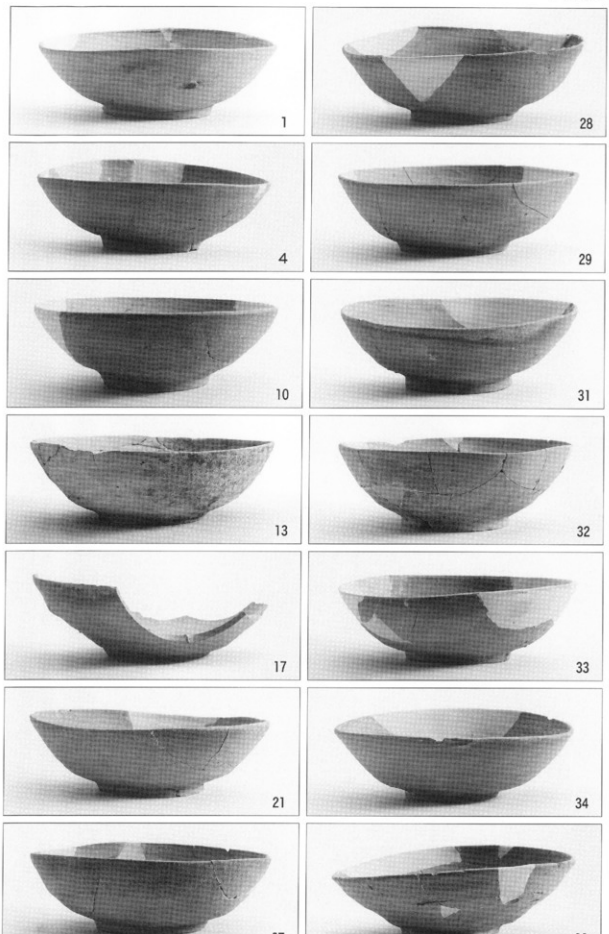
10号窯分焔柱左側遺物出土状況（北東より）

10号窯分焔柱右側遺物出土状況（北東より）



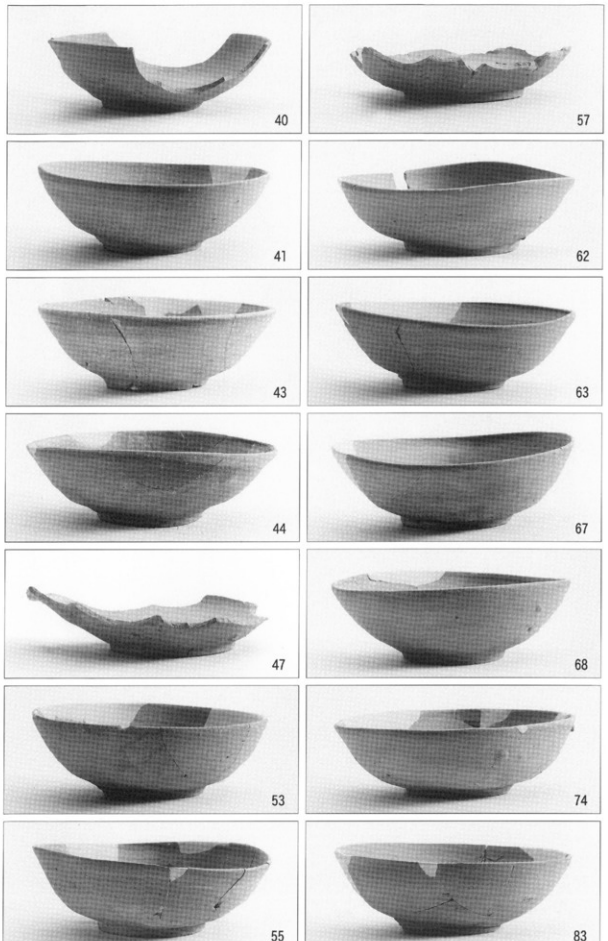
10号窯焼成室遺物出土状況（北東より、近接）

10号窯焼成室遺物出土状況（北東より）



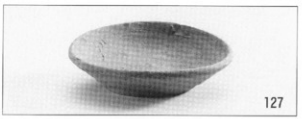
９号窯出土遺物

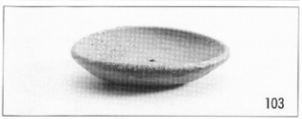
図版10



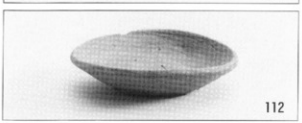
9号窯出土遺物

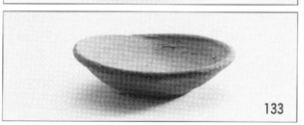
102


127

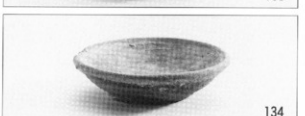

103

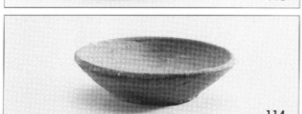
130


112


133

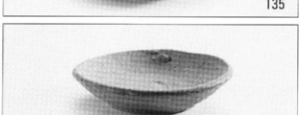
113


134


114

135

116


136

121

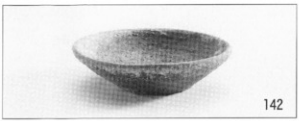
137

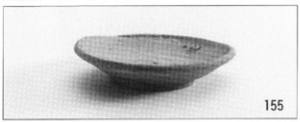
125

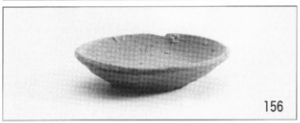
138

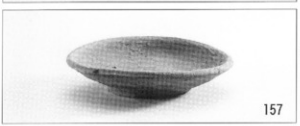
9号窯出土遺物

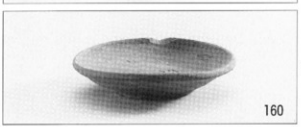
図版12

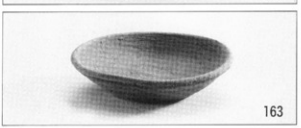

142


155

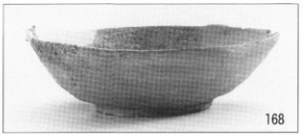

156

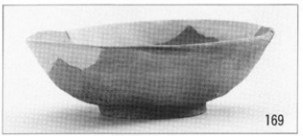

157


160


163

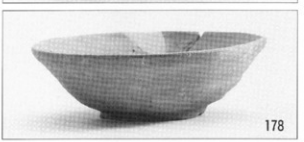
9号窯出土陶錘

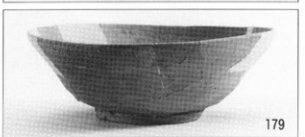

168

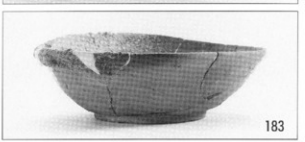

169

170

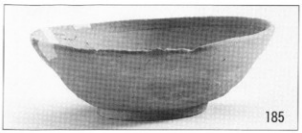
172


178

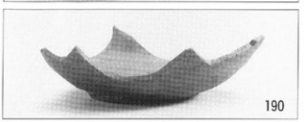

179

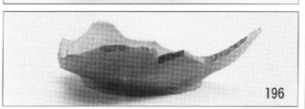

183

9・10号窯出土遺物

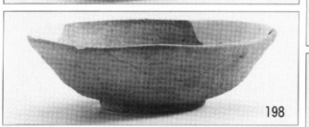

185

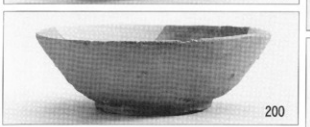
187


190

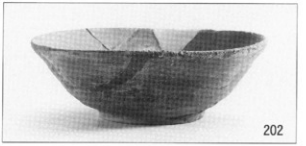

196

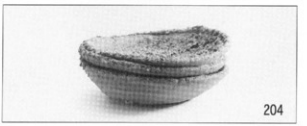
197

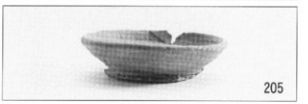

198


200

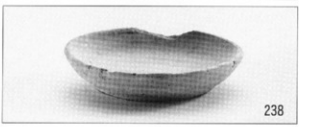
201


202

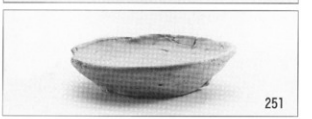

204

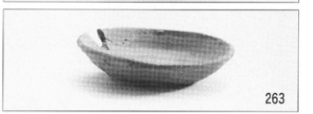

205

233


238

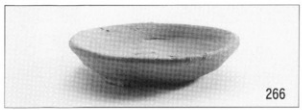
243

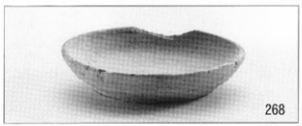

251

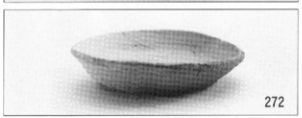

263

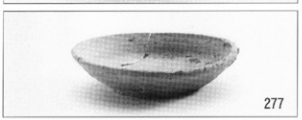
10号窯出土遺物

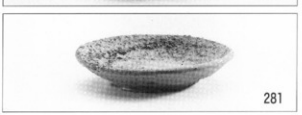
図版14

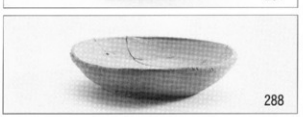

266

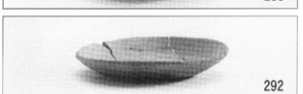

268


272


277

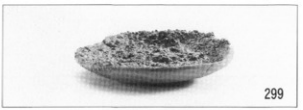

281

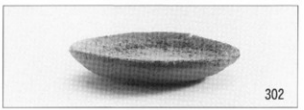

288

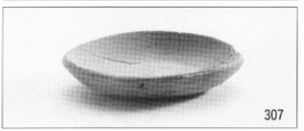

292

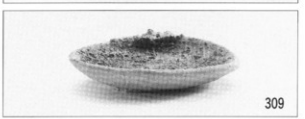
295

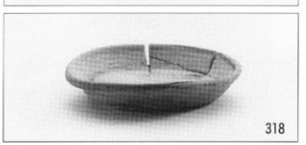
297

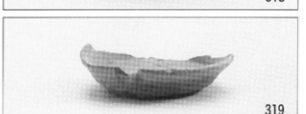

299


302


307


309

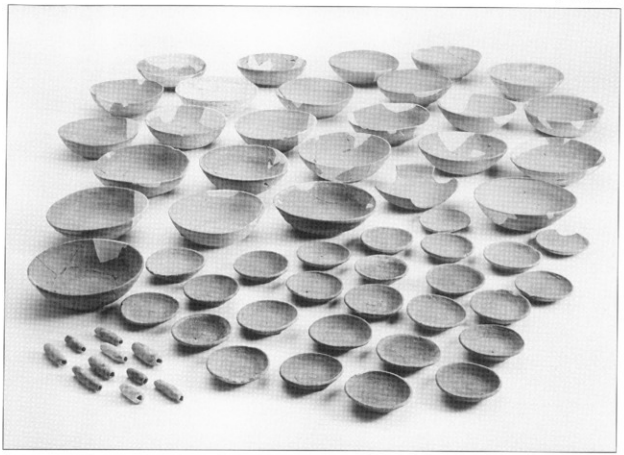

318


319

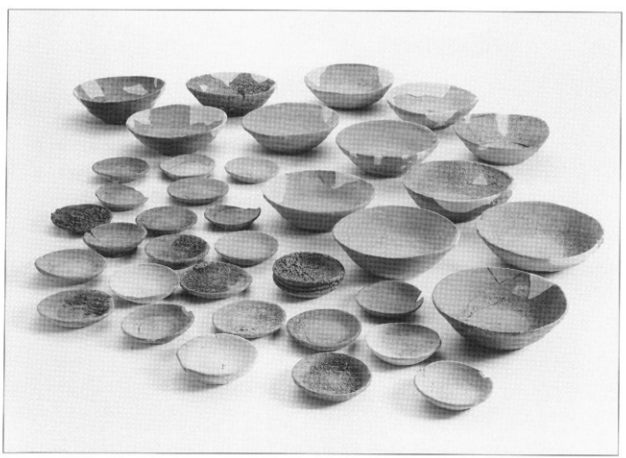
325

331

10号窯出土遺物

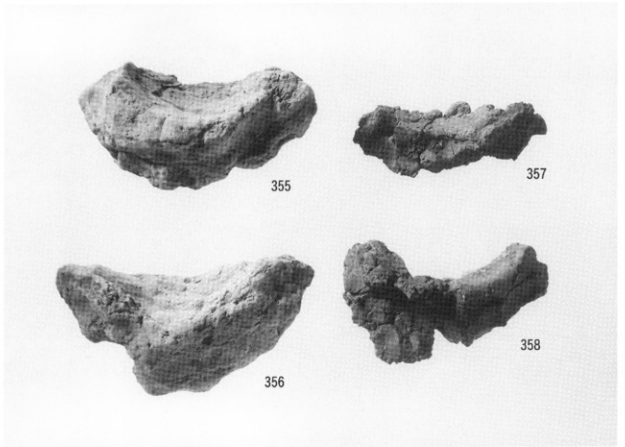


9号窯出土遺物

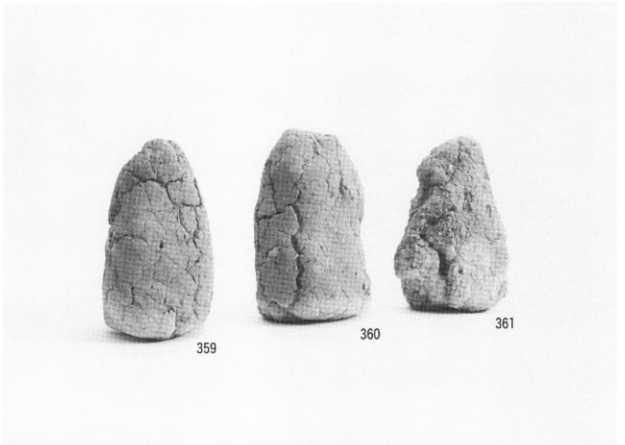


10号窯出土遺物

図版16



9・10号窯出土焼台



9号窯出土障焔棒

報告書抄録

ふりがな	すやんざわこようあと
書名	すやん沢古窯跡
副書名	平成14年度　大井川用水（一期）農業水利事業小笠幹線水路大井川水路橋埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第141集
編著者名	溝口 彰啓　平野 吾郎　河合 修 (㈱パレオ・ラボ（植田 弥生・山形 秀樹)
編集機関	財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422-8002　静岡県静岡市谷田23-20
発行年月日	平成15年3月27日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 (世界測地系)	東経 (世界測地系)	調査期間	調査面積	調査原因
すやん沢古窯跡	静岡県榛原郡 金谷町横岡大 道北837-1	22425	17	34度 51分 35秒	138度 06分 51秒	20020701 ～ 20020912	70㎡	大井川用水 大井川水路 橋改築工事

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
すやん沢古窯跡	窯跡	鎌倉時代	山茶碗焼成窯２基 （9・10号窯）	山茶碗（碗・小皿） 鉢類 陶錘 窯道具類（焼台・障焔棒）	重複して築造された２基の窯が良好に遺存。焼台や分焔柱、障焔棒などの発見は当該期の窯構造を知る上で重要。

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第141集

すやん沢古窯跡

平成14年度　大井川用水（一期）農業水利事業
小笠幹線水路大井川水路橋
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成15年３月27日

編集発行　財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002　静岡県静岡市谷田23-20
ＴＥＬ　054-262-4261㈹
印 刷 所　松本印刷株式会社
〒437-0022　静岡県袋井市方丈3丁目3-11
ＴＥＬ　0538-43-6300